

い ほ い  
伊 保 遺 跡

ね が わ  
根 川 3 号 墳

さ か ぐ ち  
坂 口 遺 跡

た か ど い  
高 樋 遺 跡

1993

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

## 序

豊田市及び東加茂郡旭町は、愛知県の北側、西三河地方北部に所在し、この位置は愛知県の山間部を形成する三河高原の先端部にあたっています。この三河高原をほとばしる水は、いくつかの水系を形成しながら各地域を潤しておりますが、その水系の一つである矢作川は、三河高原の中心から北側を迂回しながら、太平洋（三河湾）へと向かって流れています。この矢作川の流れが山間部から平野部へと移行する場所が、旭町から豊田市にかけての地域であり、太古の昔より水系の上・下流域からのさまざまな影響を受けた生活が営まれてまいりました。

このたび愛知県土木部道路建設課によって、豊田市東保見町地内に県道加納東保見線建設・東加茂郡旭町大字池嶋地内に県道島崎豊田線拡幅・豊田市坂上町地内に県道坂上花沢線建設の各工事が行われることとなりました。この各工事予定地には愛知県遺跡分布地図に記載の「根川古墳」（遺跡番号63075）・「伊保遺跡」（遺跡番号63074）・「坂口遺跡」（遺跡番号69022）・地図には無記載ながら試掘調査によって存在が確認された「高樋遺跡」があります。（財）愛知県埋蔵文化財センターでは愛知県教育委員会を通じて愛知県土木部からの委託を受けて、各工事に先立ち事前調査を行いました。その結果、縄文・弥生・古墳時代などの遺構、遺物を検出することができ、この地域の歴史に新たな資料を提供できることになりました。

各調査にあたりましては、愛知県教育委員会、愛知県土木部道路建設課、豊田市教育委員会、旭町教育委員会をはじめとする関係諸機関、地元住民の皆様から多大の御協力をいただきましたことに深く感謝申し上げる次第であります。

最後に本書が地域史の理解、埋蔵文化財研究の一助となれば幸いと存じます。

平成5年3月

財團法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 高木鐘三

伊保遺跡  
根川3号墳

## 例　　言

1. 本編は愛知県豊田市保見町・東保見町に所在する伊保遺跡、及び東保見町根川に所在する根川3号墳の調査報告である。
2. 調査は県道加納東保見線建設に伴う事前調査として実施し、愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成2年6月(1990)～平成4年(1992)8月まで財団法人愛知県埋蔵文化財センターが行った。
3. 調査は北村和宏(調査研究員、現岡崎西高等学校)・真鍋雅治(主査、現松陰高等学校)・岡本直久(嘱託員、現(財)瀬戸市埋蔵文化財センター)・鷲見豊(主査、現西春小学校)・赤塚次郎(調査研究員)・鬼頭剛(調査研究員)が担当し、水野拝子氏の御協力を得た。
4. 調査にあたっては次の各関係機関の御協力を得た。  
愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県豊田土木事務所・豊田市教育委員会
5. 本編の執筆は第Ⅱ章1と第Ⅲ章1を加藤安信(調査課長)が、その他と編集を赤塚次郎が担当した。
6. 遺物整理において国立智美・高田恵理子両氏の御協力を得た。
7. 調査区に使用した座標は国土座標第VI系に基づくものである。
8. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターに保管。

# 目 次

## 〈伊保遺跡〉

I 調査概要	2
1 経緯	2
2 環境	4
II 遺構	6
1 旧石器時代	6
2 弥生時代後期から古墳時代初頭	6
3 室町時代	9
III 遺物	10
1 旧石器時代	10
2 弥生時代後期から古墳時代初頭	13
3 室町時代	18
IV まとめ	21

## 〈根川第3号墳〉

根川第3号墳	24
別表	27

## 挿図目次

第1図 調査進行図	3	第13図 N R02出土土器	15	図版1 伊保遺跡主要遺構 1:500
第2図 調査区位置図	3	第14図 S D03出土土器	16	図版2 伊保遺跡 90E・90S N R02
第3図 伊保遺跡と周辺の遺跡	5	第15図 N R01・S D05・S D08 出土土器	17	図版3 伊保遺跡 S D03・S B01・N R03
第4図 石器分布	7	第16図 S K03・S K02・S K01 出土土器	19	図版4 伊保遺跡 N R02・S D03出土遺物
第5図 石器出土地点	7	第17図 S K05・S K04他出土土器	20	図版5 伊保遺跡 出土遺物
第6図 基本配置	7	第18図 伊保遺跡	23	
第7図 90区南部	8	第19図 根川古墳群	24	
第8図 91B区北部	9	第20図 根川3号墳	25	図版6 根川3号墳 1:200
第9図 石器出土位置関係	11	第20図 根川3号墳出土遺物	25	図版7 根川3号墳
第10図 石器	12	第21図 根川古墳群位置図	26	
第11図 動物型土製品	14	第22図 S X01	26	図版8 根川3号墳出土台・伊保遺跡出土土器
第12図 その他の遺物	14	第23図 調査区位置図	26	

# 伊 保 遺 跡

# I 調査概要

## 1 概要

伊保遺跡（遺跡番号63074）<sup>1)</sup>は愛知県農田市保見町から東保見町にかけて広がる遺跡であり、北緯35°30' 東経137°8'30"に位置する。

伊保遺跡の発掘調査は、昭和44年（1969）県営圃場整備事業に伴ない実施されたのが嚆矢であり、翌昭和45年（1970）において第2次調査が行なわれた。調査主体は「猿投遺跡調査会」であり、その調査成果はすでに『伊保遺跡』報告書として刊行されている<sup>2)</sup>。それによると遺跡の範囲は、伊保川が流れる谷間である「伊保谷」西部を東西に長く広がることが確認されている。出土遺物はおよそ3世紀の遺物群と5世紀末から6世紀前半にかけての2つに大きくまとまる傾向が認められる。そのうち最も注目され、かつ「伊保遺跡」の名を著名にしているものはといえば、第2次調査における棚口地区溝状遺構出土土器であろう。その遺構は幅1m・深さ0.3mほどの小規模なものであるが、その第2層より大量の土器が出土し、そしてその主体を占めていた壺のほとんどが、平底タタキ壺であった。こうしたタタキ壺を主体とする土器群の在り方は、現在においても西三河地区、いや伊勢湾沿岸部においてさえも他に類例を見ないものである。その意味からも伊保遺跡棚口地区のもつ重要性が窺い知れるのであるが、残念なことに出土土器が今だ公表されず、そのため研究の進展がほとんど見られない。さらにタタキ壺だけが遺跡から遊離し、多くの研究者によって様々な推論が発表される結果となっているのが現状である。特に「タタキ壺すなわち畿内系」という式に基づく土器交流に言及する場合が多いようである。

さて今回は県道加納東保見線建設予定地において調査区を設定することができた。愛知環状鉄道を挟んで南北に長い調査区であり、その中をおよそ2地点に区分して考えることができる。まず愛知環状鉄道より南の90区において、3世紀前半を中心とする遺物の出土が確認できたが、これらの多くは残念ながら2次的な遺物の堆積状況であった。しかし北部地区（91B区）では室町時代の建物の発見が見られ、中世期の遺構の展開が想定できるような新たな知見も得られている。さらに90区北では旧石器時代の石器分布が小範囲ではあるが確認でき、当初予想もしない尖頭器の発見も見られた。

〔注〕

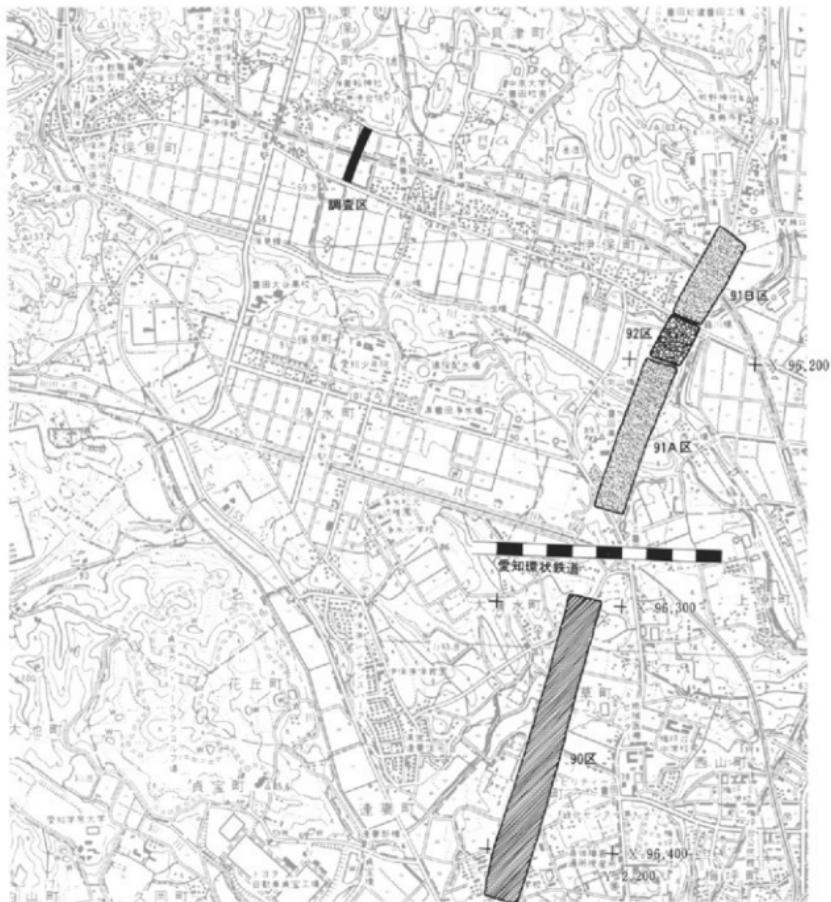
1) 愛知県教育委員会 1988 『愛知県遺跡分布図（Ⅱ）知多・西三河』

2) 大橋 勲他 1974 『伊保遺跡』 猿投遺跡調査会

調査概要

1990												1991												1992年											
9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12								
90区												2,192m <sup>2</sup>												(調査担当) 鶴見豊・岡本直久											
(調査担当) 直鍋雅治・岡本直久												91A・B区												1,750m <sup>2</sup>											
												92区												500m <sup>2</sup>											
(調査担当) 木塚太郎・鬼頭順																																			

第1図 調査進行図



第2図 調査区位置図

(地図 1:25000 豊田市全図より、調査区設定図 1:200)

## 2 環境

伊保遺跡は豊田市北方、旧猿投町の伊保谷に所在する。伊保谷は西及び南北が低丘陵に囲まれ、谷は急速に南傾してその端には伊保川が東流する。伊保川は谷の出口部で亀首谷を流れる籠川と合流し、さらにその南でただちに矢作川と合流する。現在の伊保遺跡周辺は、遺跡の中央部を県道名古屋豊田線と愛知環状鉄道が東西に通り、その南には水田が広がっている。愛知環状鉄道保見駅が遺跡のほぼ中央に位置し、北部の丘陵地は保見團地によって大きく開かれ、市街地としての景観が整いつつある。ところで伊保遺跡から西へ向かうと現在の国道155号にそって瀬戸に通じることになる。この道は古来より、摹母（豊田）から瀬戸を通り多治見に抜ける道として、重要な役割を担ってきたものと思われる。

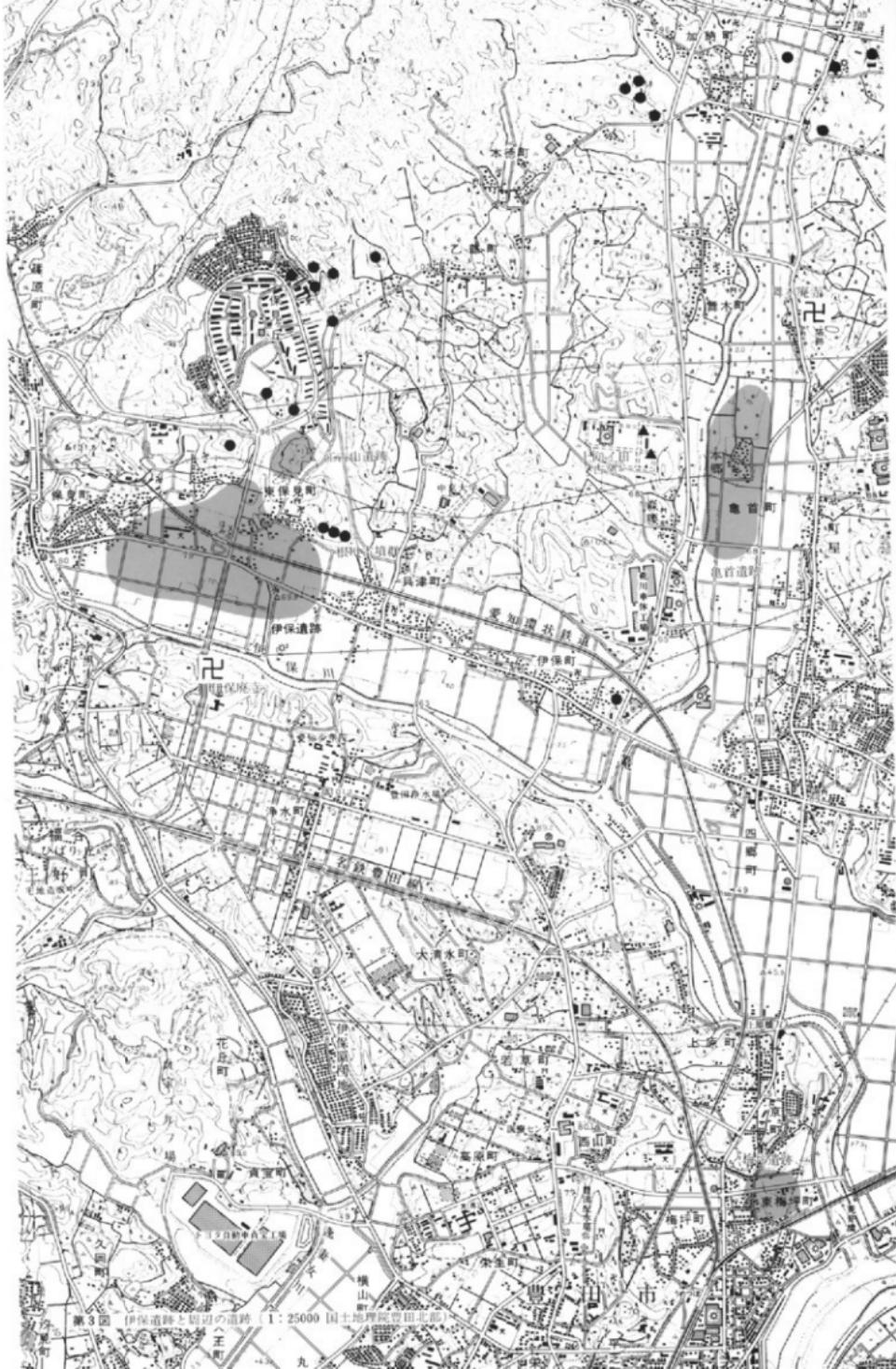
伊保谷はおおよそ標高70mの等高線をさかいにその上部が洪積台地面を形成しており、その台地面全域がほぼ伊保遺跡の範囲と推定することができる。その台地面やや東寄りに伊保堂川が流れ、谷の南で伊保川と合流する。調査成果からこの伊保堂川沿いに古墳時代初頭の集落が展開していたものと推定することができよう。

伊保遺跡の北丘陵上には近年豊田市教育委員会が調査した江古山遺跡が所在し、やはり弥生時代後期から古墳時代にかけての墳丘墓が発見されている。また埴輪を使用した小規模な古墳も造営されており、伊保遺跡との強い関係を推測させるものである。2・3世紀の集落遺跡として伊保遺跡と同様な性格をもつものとしては、亀首谷入り口に所在する、亀首遺跡や籠川が矢作川と合流する地点に位置する梅坪遺跡が見られる。亀首遺跡は調査がほとんど行なわれておらず不明瞭であるが、梅坪遺跡は市教育委員会によって数次にわたる調査が実施されている。それによると弥生時代後期から古墳時代にかけての極めて注目すべき遺跡であることが明らかになりつつある。このようにこの時期各小河川を単位に1つの拠点的な集落が点在する点は改めて留意する必要があろう。

ところで古墳時代後期になるとまず伊保谷に埴輪を使用した新しい古墳造営が開始されていく。それが伊保遺跡北東の丘陵上に存在する根川古墳や江古山遺跡に代表される動きであろう。それに呼応する形で伊保遺跡が再び大きく集落を形成することになる。なお亀首遺跡西丘陵部には須恵器・埴輪兼用窯である上向伊田古窯が営まれた。その後亀首谷には6世紀後半から7世紀にかけて大型の横穴式石室を採用した古墳が造営され、1つのまとまった力の台頭を類推させる。それは池田1号墳・藤山1号墳に代表されるものであり、やがて舞木庵寺の建立につながる。なお伊保遺跡南方にも伊保庵寺が所在する。これらの地域はやがて西加茂郡「伊保郷」として文献に登場することになる。

### 参考文献

伊藤稔 1976 「古代の豊田」『豊田市史1』 豊田市教育委員会



第3図 伊保道路と周辺の道路 (1:25000 國土地理院図面北部)

## II 遺構

今回の調査区では大きく3つの時期に区分して考えることができる。まず石器の分布が確認された尖頭器を主体とする時期。次に2世紀後半から3世紀初頭に中心を置く時期。最後に14世紀後半に中心を置く時期である。

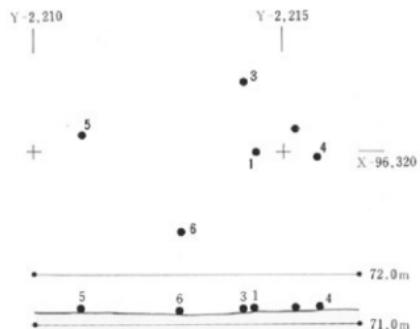
### 1 旧石器時代

90A調査区北端近くから、旧石器時代の槍先形尖頭器4点、剣片2点、チップ1点が出土した。出土地点は愛知環状鉄道用地の南側に当たり、石器は国土座標第VII系のX=-96.320、Y=-2.217を中心にした直径約5メートルの範囲内に分布していた。出土レベルは、71.3メートル前後。いずれも淡赤褐色を呈する基盤（三好面の三好層）直上から発見された。石器分布範囲及びその周辺から、関連するとみられる遺構は発見されなかった。また、各石器間に接合関係も認められず、出土地点が石器製作跡であるのかどうか、断定できない。

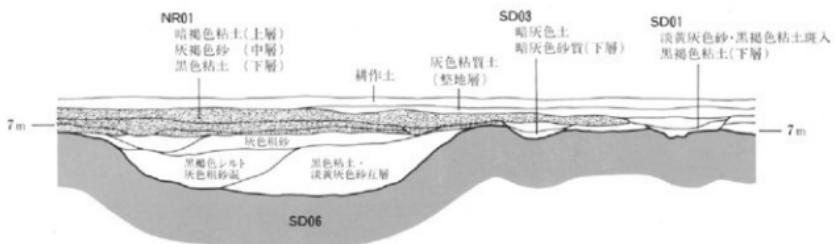
### 2 弥生時代後期から古墳時代初頭

明確な遺構としては90区南部で検出したSD03が存在する。調査区を東西に横断する小溝で、幅1m・深さ0.1mを測り、ややまとまった土器の出土が見られた。またSD03に沿うかたちでSK06が掘削され、やはり同様に古墳時代初頭の土器が包含されていた。また90区南端のSD08は幅0.5m・深さ0.15mの小規模な溝であり、この溝からの出土遺物は山中式後期に併行する可能性がある。

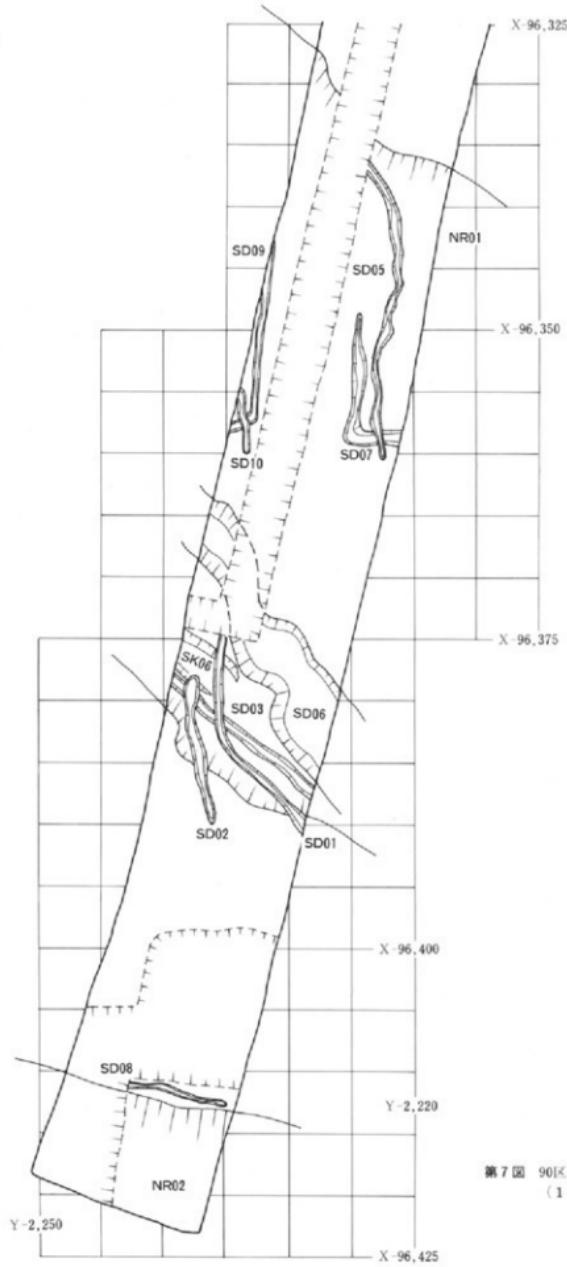
その他には明確な遺構は確認できていない。ただ90区中央部で検出されたNR01の砂礫・粘土の堆積層中からは、2次堆積ではあるが土器の包含が認められた。さらに調査区南端のNR02北掘り形において、山中式後期に併行する土器が出土している。なおNR01とした砂礫の堆積範囲は幅50mにも及んでおり、その上流部での弥生時代後期～古墳時代の集落遺構の展開が推定でき、それらの遺構群を襲った小河川の氾濫が、NR01における土器堆積と推定できよう。



▲ 第4図 石器分布 (1:10)

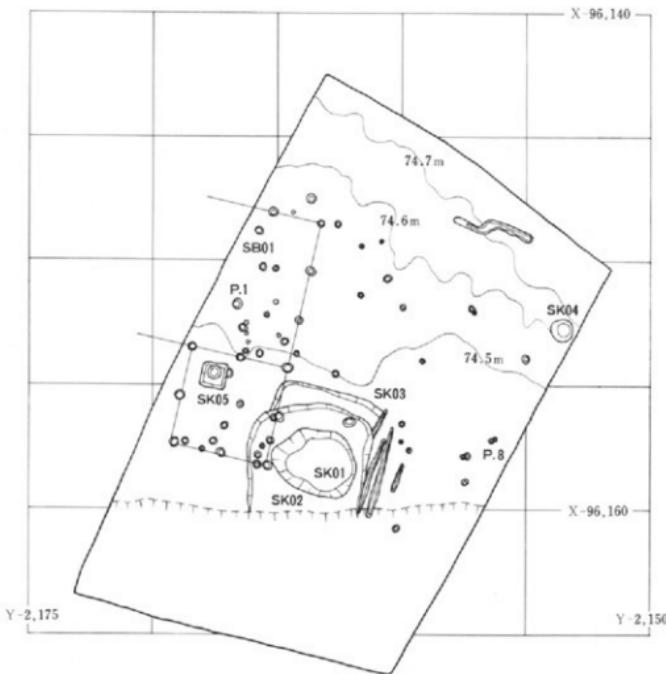
第5図 石器出土地点  
(90区 北部 1:400)

第6図 基本層序 (1:100)

第7図 90K 南部  
(1:400)

### 3 室町時代

91B区北端において室町時代の遺構を確認することができた。検出面での標高は74.5mを測り、遺構が立地する場所は、すぐ北には丘陵部が迫り急速に南に向かって下降する斜面となる。掘立柱建物SB01は調査区北西隅に存在し、南北3間・東西3間以上で南北隅に2間×2間の方形部が取り付き、その内部には1m四方の土坑SK05が掘削されている。SB01は桁・梁行ともほぼ2m等間である。また方形部の柱間も2m等間となる。柱穴の残存状況は比較的良好であり、中には柱根及び礎板が残るものも認められた。SB01に重複する形で方形土坑SK02・03が営まれている。またSK02は中央部に不整形土坑SK01が存在する。SK02内より灰釉系陶器がややまとめて出土している。SK03→SK02→SB01と変遷が窺われ、出土遺物からも14世紀代、藤澤編年N段階を中心とする変化が認められる。その他調査区北東隅の円形土坑SK04は、径4.8m・深さ0.14mを測り、中より重ね焼き状態で加工を加えた灰釉系陶器碗（図版16-176）が出土している。



第8図 91B区 北部 (1:200)

### III 遺物

#### 1 旧石器時代 (第10図)

7点の石器は、古墳時代の包含層掘削中に発見された1点(2)を除き、基盤面における古墳時代遺構精査中に出土した。尖頭器4点、剝片2点、チップ1点に分類される。石材はいずれもチャートである。

##### (1) 尖頭器

4点の尖頭器は、すべて両面調整された木葉形・広葉形の槍先形尖頭器で、長さ10センチメートル以下の中・小形品。形態から次の2類に分類される。

###### 1類………小形で、長さに対して幅が広く、すんぐりしている形態(1・2)

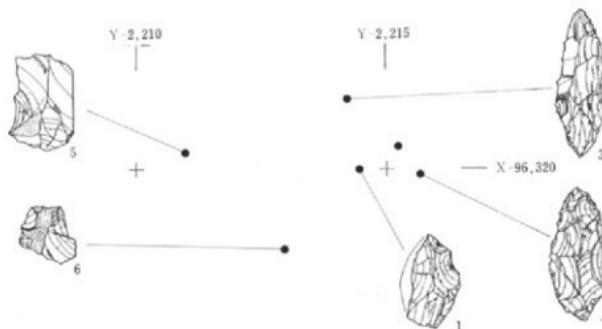
1は、縱方向に割れて、概ね半分が欠損している。製作途中で半分に割れてしまったものとみられる。基部周辺には未加工の節理面が残る。両面共に剥離は粗く、周縁に細部調整は施されていない。最大幅は中央部にあり、その断面形は偏平三角形状。推定長幅比は0.64。2も基部に一部節理自然面を残し、未加工または欠損部分をもつ。両面共に粗い剥離で整形されながら、均整に整えられている。剥離は、正面・裏面とも左側部分が先、右側部分が後に行われている。正面では、先端部分に細部調整が加えられて、先端部が鋭くされている状況が窺われる。最大幅は中央部にあり、その断面形は1と同様に偏平三角形状である。推定長幅比は0.60。

###### 2類………中形で、細長い形態(3・4)

3のみ小豆色を呈するチャートで作られている。正面左側には先端から縱方向に長さ4センチメートルほどの大きな撓状剥離が認められ、左右非対称の形態をなしている。この剥離は製作途中の偶発的な産物ではなく、最も古い段階の岩宿Ⅲと仮称される東内野型尖頭器に特有の剥離面と考えられる。両面共に粗い剥離のままであるが、基部周辺には一部リタッチが認められる。最大幅は下半部にあり、その断面形は両面凸レンズ状を示す。長幅比は0.35。4も3と同様完形品であるが、先端部と基部との区別がやや不明瞭な資料。ここでは未加工面が一部残る方を基部とした。先端角度は約90度と鈍い。両面共に周縁からの粗い剥離が目立つが、先端部近くの側縁には細部調整が施されている。最大幅は概ね中央部にあり、その断面形は両面凸レンズ状を呈す。長幅比は0.41。

##### (2) 剥片・チップ

5は急角度の稜線をもち、断面形が偏平な三角形状をなす縱長剝片である。正面に一部自然面が残る。横に折れていて、打面は欠損している。幅が2.3センチメートルもあり、や



第9図 石器出土位置関係（1:10）

や幅広の縱長剝片とみられる。6は両面加工の不定形な小形剝片。先端が折れ、片面の中央部分に自然面を残す。打面は削取されている。チップは長さ3.0センチメートル、幅1.6センチメートル、厚さ0.7センチメートル。両面に節理面がみられ、加工途中で節理面に沿って剥がれて飛び散ったものとみられる。

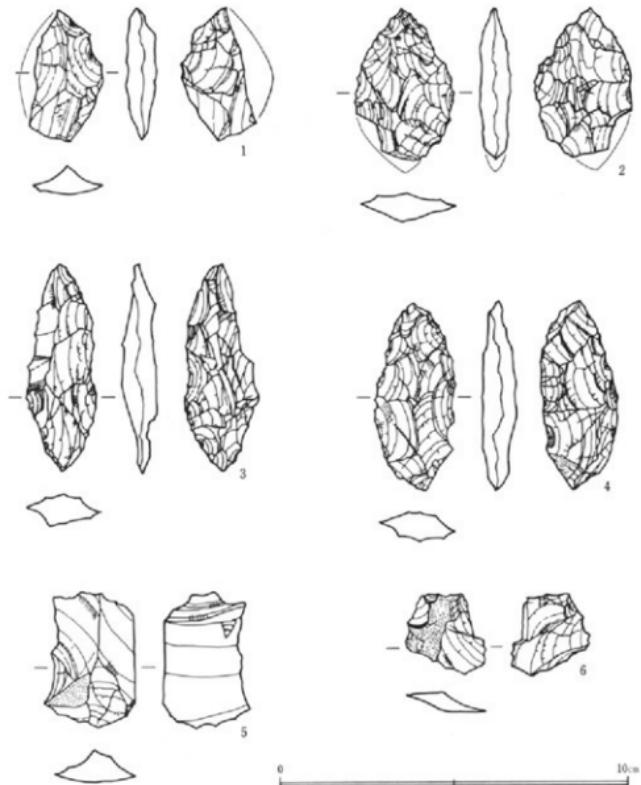
### (3) まとめ

1. 旧石器時代に属する槍先形尖頭器の出土は、今回の伊保遺跡の発掘調査の成果のうちでも特筆に値する事項である。尖頭器4点と剝片類との間には接合関係は認められなかつたが、径5メートル以内の狭い範囲で、しかも基盤直上の同一レベルにおいて出土した状況からみて、それらは一括性が高く、一つのブロックを構成していると考えられる。ただし、剝片・チップの類が量的にみて余りにも少量であり、かつ石核や素材が出土していない状況からして、当該地点を石器の製作場所とする積極的な根拠は見あたらぬ。

2. 尖頭器4点のうち、先端部に一条の穂状剝離面をもつ3は、東日本地域に分布する東内野型尖頭器に分類される形態である。したがって、他の3点の尖頭器もそれと同一の時期に製作されたものと考えられる。尖頭器を主体とする文化の最も古い段階から出現する東内野型尖頭器は、本県での出土はこれが初例であり、近隣では、静岡県沼津市広谷遺跡体場層からの出土が知られている。同例も大きさは中形品であるが、形態が最大幅を中央部やや上半に取る菱形に近い点で、伊保遺跡の資料とは異なっている。

しかし、今回の東内野型尖頭器の出土によって、尾張・三河地域、少なくとも三河地域へは、尖頭器を主体とする文化の最も古い段階から、その製作技術が伝わってきていることが判明した。また、併せて、その段階から、長幅比0.5以上の広葉形で荒い剝離により整形された長さ5センチメートル以下の小形製品が同時に作られていることも明らかとなった。

3. 石器素材に用いられたチャートは、基盤をなす三好層中に円礫として多量に含まれている。したがって、尖頭器類は、出土地点またはその付近において素材を探取し、製作されたものである。



第10図 石器

番号	器種	出土区	出土年月日	出土レベル (m)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	長幅比	石材	色調	備考
1	尖頭器	90A N H4q	910214	T1.309	3.8	(3.1)	0.8	(58)	(0.64)	†+→	10Y 4/2	半分欠損
2	尖頭器	90A N H6q	910129	表 溝	(4.3)	2.8	0.8	(103)	(0.60)	†+→	10Y 4/1	基部欠損
3	尖頭器	90A N H4q	910128	T1.324	6.1	2.1	1.0	96	0.34	†+→	7.5R 3/2	
4	尖頭器	90A N H5r	910128	T1.325	5.4	2.3	1.0	102	0.41	†+→	10G Y 4/1	
5	剥片	90A N H4q	910128	T1.322	(3.9)	2.6	0.9	(74)	—	†+→	N 6/0	半分欠損
6	剥片	90A N H5q	910214	T1.277	(2.3)	2.3	0.5	(32)	—	†+→	5G 2/1	
	チップ	90A N H4r	910128	T1.324	3.0	1.6	0.7	24	—	†+→	5G Y 5/1	

注1. 長幅比 幅/長さ

注2. 色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』による。

注3. ( ) は残存長

## 2 弥生時代後期から古墳時代初頭

弥生時代後期に所属するものはS D08及びN R02北掘り形の資料に認められる他は存在せず、調査区最南端に集中する傾向が見られる。一方、古墳時代初頭に所属する資料は90調査区中央部のN R01全体に散在し、特にS D03からまとまって出土している。

### N R02（第13図）

8～20は有段高杯で、8～14は脚部であるが10は中実で、8・9には横線文・刺突文の組み合わせが施される。9は透孔を3方向に穿ちその上部に1ヶ所のみ穿孔するものが組み合わされる。こうした組み合わせは山中式後期から廻間1式前半期にかけて見られる特色でもある。16・17は有段高杯の杯部で、外面タテミガキを施すものである。一方、15・18・19・20は杯部外面にヨコナデ調整を施し、19・20には波状文が見られる型式で、口縁端部には擬凹線を施す明確な面をもつ。22は器台の可能性が高い。25～30は甕ないし鉢と考えられる。27は穿孔があり、内面ケズリ調整。33は赤彩波線文を施す壺の体部であるが、横線文が確認できない。37は口縁部に幅広の平坦面をつくる広口壺で、平坦部から口縁外面にかけて赤彩塗布。38・39・40は口縁端部に文様を施す広口壺で、内外面に羽状文をもつものと竹管文40の違いが認められる。12・14・33・36を除いた多くは濃尾平野における山中式後期に併行する時期に所属するものと推定されようが、基本的には高杯における類似性のみに基づくものである。

### S D03（第14図）

42～57は有段高杯。脚部において横線文を施しやや柱状脚を残す資料42・43・44・45・48と、杯接合部よりただちに大きく開く46・47・50の2種が見られる。また同様に杯部においても外反する51～56と、外傾する57の2種が共伴する。甕は69・71・72の端部に刺突文をもち内面ケズリ調整をもつもの、70・73の「く」字状口縁をもつものの両者が主体を占めるようであり、その他として内彎口縁75・有段口縁68・跳ね上げ口縁74が見られる。なお74は鉢の可能性を残す。65は幅広の口縁端部に擬凹線を施し、口縁部内面に赤彩塗布が認められる。66・67は直口広口壺。

S D03出土資料の特色はまず高杯脚部の透孔が全体に1／2以上に穿かれる。甕口縁に多様な種類が登場する。壺に直口広口壺が存在する。甕台部に79のような内彎が認められる。壺底部が完全に突出する。こうした特色は廻間1式前半期に類似するようである。ただ高杯杯部の傾向はやや古相の特色を残し、地域的な問題であるものかもしれない。

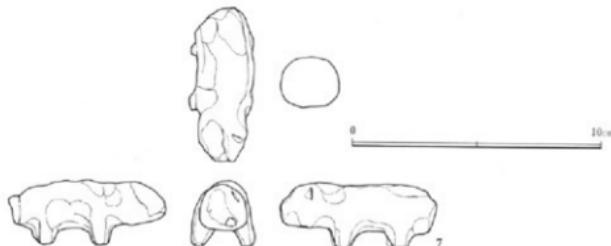
### N R01（第15図）

81は広口口縁をもつ台付甕で、口縁端部に刺突文が見られる。85・86はおそらく同一個体と思われるもので、内彎直口の中型壺であり、外面ミガキ調整を施す。83・88・91は有段高杯で、90は口縁内面に瘤状突起をもつ。81・90は西三河地域の土器の特色を残すものと考えられ、他の特色からは廻間1式前半期と併行する資料と考えられよう。

なお動物型土製品（第11図）がN R01上層より出土している。

S K06は、透孔が上部に穿かれた高杯脚部があり、直口広口壺が見られることより廻間Ⅰ式前半期の資料と考えられよう。S D08は、透孔が中央部に穿かれ、さらに外反する脚部が見られる高杯が存在し、こうした特色は山中式後期のものに類似する。

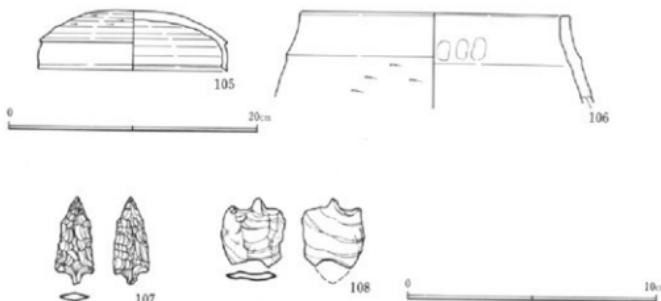
以上をまとめると、S D08及びN R02南掘り形部より出土した資料はおおむね濃尾平野での山中式後期の特色を残すものと理解できよう。そしてS D03は有段高杯にやや問題を残すものの、N R01・S K06を含めて廻間Ⅰ式前半期の中で捉えておいて大きな誤りはない。なお矢作川上流域の地域的な特色として考えられるものとしては、まずN R02の甕口縁部と、壺では羽状文に代表される文様の施し方にある。次にS D03では広口口縁部・瘤状突起を有する壺、全体的に古相を残存させる有段高杯とその影響と思われる脚部横線文の多角を加えておきたい。なおバレス壺・器台・内甕口縁を有する各種の中型壺は基本的に欠損し、地域的な様式を表しているものと考えられる。



第11図 動物型土製品（1:2）

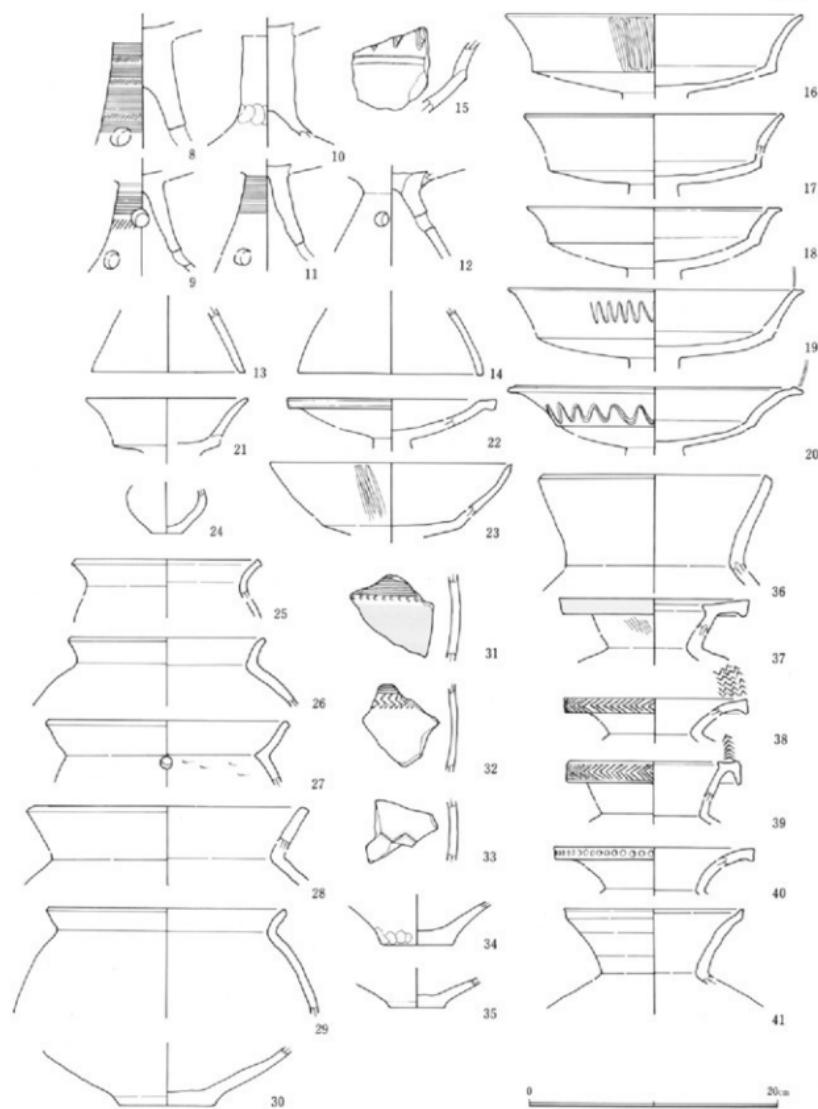
## その他の遺物

105はN R02上層より出土した須恵器杯蓋で、口径15.6cm・器高4.7cmを測る。6世紀前葉の形態を留める。106は口径21.7cmの繩文晩期の鉢で、N R01上層より出土した。107は91A区北側で出土した石鎚。有茎5角形を呈し、鐵長35mm・幅16mm・厚さ4mm、チャート。108は90区で出土した縦長削片。上部に加工痕があり石鎚の未製品とも考えられる。チャート製で下部を欠損。

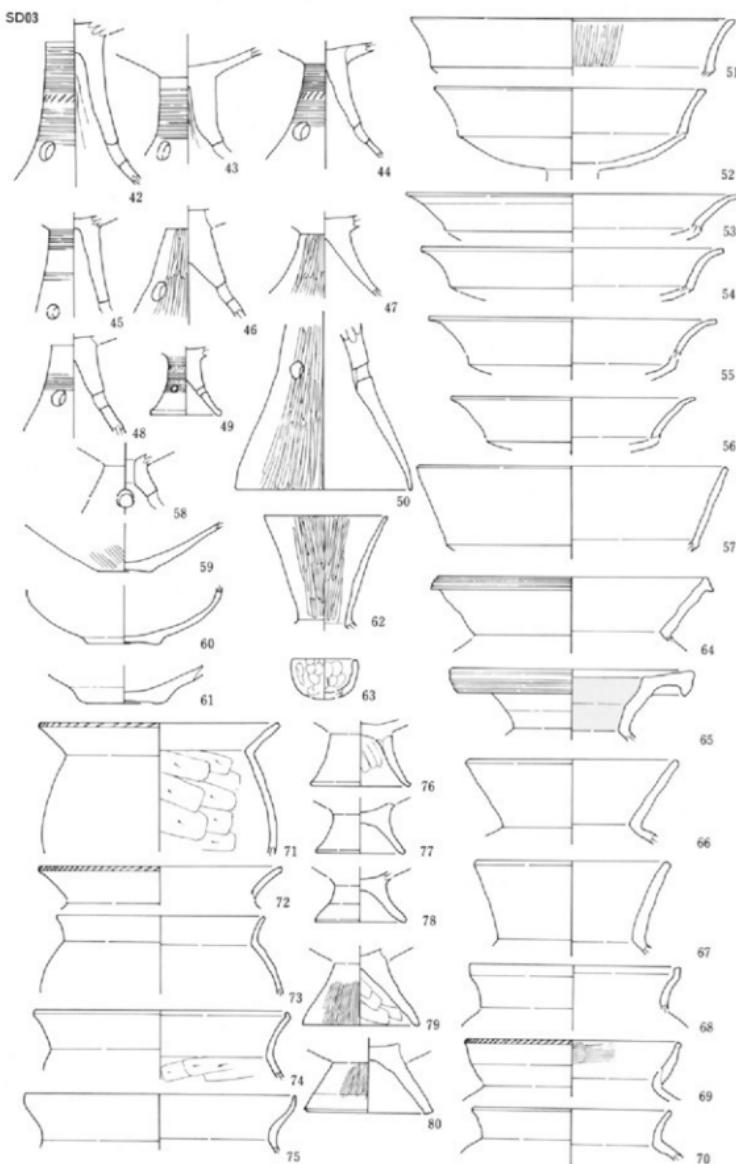


第12図 その他の遺物

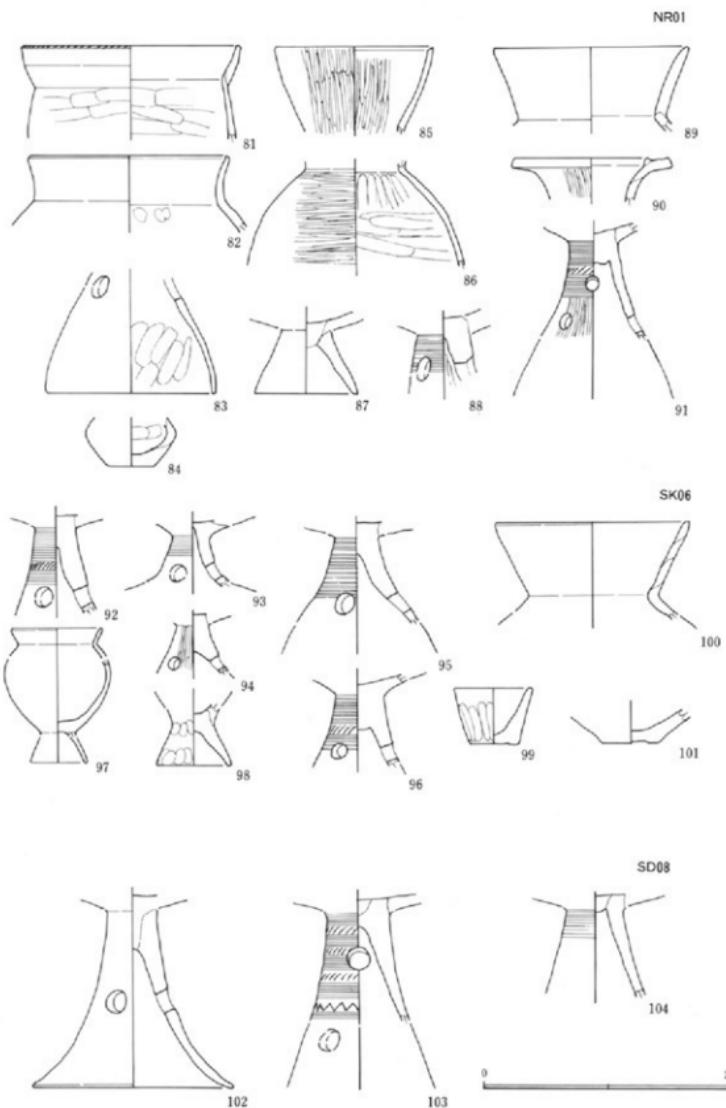
NR02



第13図 NR02 出土土器 (1:4)



第14図 SD03 出土土器 (1:4)



第15図 NR01・SD05・SD08 出土土器 (1:4)

### 3 室町時代

#### SK01・SK02・SK03（第16図）

S B01東に接して検出された土坑内より比較的まとまって灰釉系陶器が出土している。検出された遺構の重複関係に基づくと、SK03にはこの内では古い様相のものが認められる。椀は直線的に外傾するものが多く、端部には明確な面取りを行なうものが多数を占める。底部は削落した高台痕が目立ち、明確に高台を残す資料はSK03の110一点である。胎土には砂粒が多く、長石粒の噴き出しが目立つ。皿は128以外は全て同一の器形で、大きな底部から屈曲して小さく外反する口縁部をもつ。ヨコナデによる段が残るものも存在する。端部は明瞭な面を整える資料が多い。なお底径が5cm前後のもので、器高が2cm以下が多数を占める。椀と皿はほとんどが瀬戸地城における生産物と考えられ、東濃産は認められない。

118・119・140・141は陶丸で、加工円盤は認められない。147は球体に小孔を穿つ陶鍾。138は鉢口縁部で、端部が肥厚し、丸みをもつ1条の沈線が施されてるこの時期通有の特色を留めるものである。139は常滑産の甕で、口径23.5cmを測り、N字状の玉縁口縁となる。113・127は土師器皿の底部で、両者は糸切底であるが、113は突出底状を呈する。145・146は土師器皿で糸切底。142は「伊勢型鍋」で、内側折り返し口縁をもつものである。新田分類6類に相当しよう。全体として甕以外は瀬戸産の灰釉系陶器のみで占められ、藤澤編年の「山茶碗第Ⅳ段階」に所属する資料と考えられる。

#### SK04（第17図 172~176）

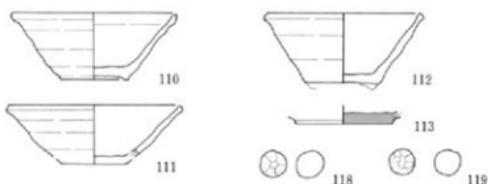
172は口径13.2cm・器高4.8cmで、無高台の椀。175は皿で、両者は瀬戸産と考えられるが、173は東濃Ⅲ期に所属する精製椀。器壁が薄く大きく外傾する東濃産。174は土師器椀で、口径11.7cm・器高3.7cmを測る。なお底部には糸切痕跡が残る。176は椀の重ね焼き状態の資料で、古窯跡から多く出土する資料と同様なものである。ただ外面には2次的な加工と思われる打ち搔き痕が認められる。

#### SB01（第17図 154・155・156・158・159）

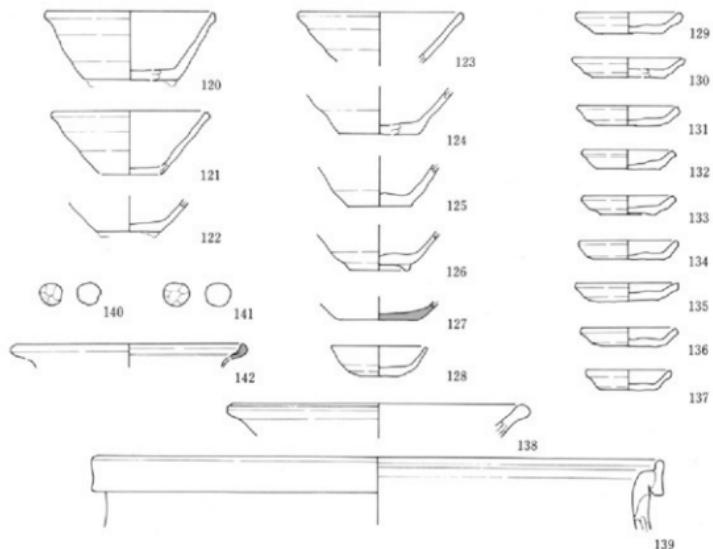
154・155はSB01東柱列北第4柱穴より出土した資料で、無高台で大きく外傾した形状を見せ、端部は肥厚する椀。156も同様な灰釉系碗で、北柱列東第2柱穴から出土している。158・159は東柱列北第2柱穴から出土し、159は常滑産甕底部。以上の資料からSB01は藤澤編年第Ⅳ段階に所属するものと考えられよう。

総合すると、土師器・甕を除くと一部の資料以外は全て瀬戸産と考えられる。それは伊保道跡の位置的な問題に還元できるようであるが、瀬戸尾平野における14世紀代の東濃産の圧倒的流入現象とは大きく異なる。また土師器の形態も異にすると考えてよい。しかし鍋は伊勢型が広く使用されていることは変わりがない。灰釉系碗の特色から14世紀中葉から後葉にかけてに中心を置く時期を想定できる。

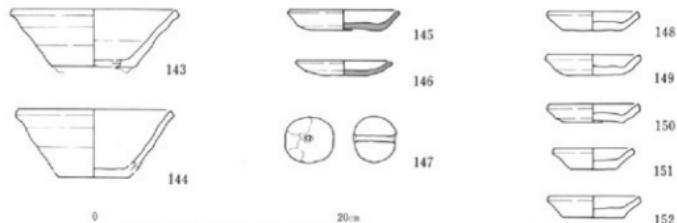
SK03



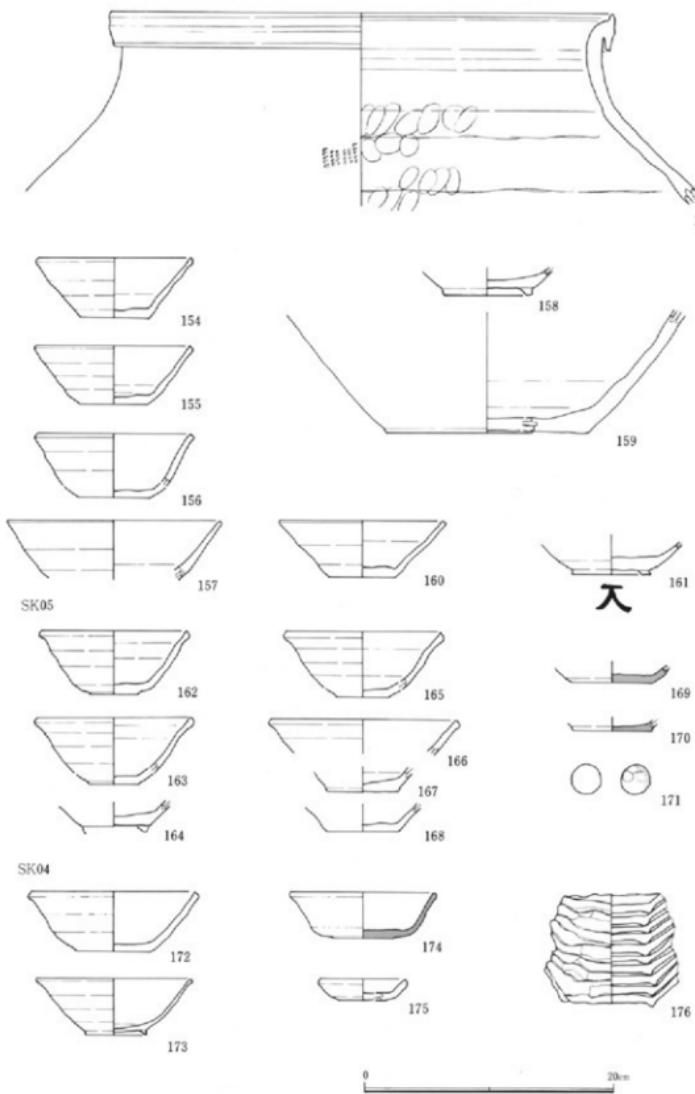
SK02



SK01



第16図 SK03・SK02・SK01 出土土器 (1:4)



第17図 SK05 - SK04 他出土土器 (1:4)

## IV まとめ

### 調査成果

今回の調査において以下の結果を得ることができた。

- 1 今回新たに90区北側にて尖頭器等の出土が見られた。明確な遺構は確認できていないが、径5cm以内の範囲で石器の分布が確認でき、さらに尖頭器4点の内1点は東内野型尖頭器で県内初例となつた。
- 2 従来の伊保遺跡出土遺物からは、古墳時代初頭（廻間Ⅰ式期併行）から始まる遺跡であるという認識であったが、今回の調査区より弥生時代後期（山中式後期併行）の遺物がSD08周辺から出土し、遺跡の開始時期が若干遡ることとなつた。
- 3 遺物の中心は古墳時代初頭、灘尾平野における廻間Ⅰ式前半期併行にあり、従来の櫛口地区出土土器（廻間Ⅱ式期併行）との間にやや開きが見られる。それは遺跡内での地区別の主要遺構の消長を表わすものと思われる。
- 4 調査区内では古墳時代初頭を中心とした遺構は極めて希薄であり、また出土遺物のほとんどが自然流路状の2次的な堆積土からであった。したがって今回の調査区は遺跡の東端に相当するものと推定することができる。
- 5 昭和44・45年調査では、櫛口地区以外から古墳時代後期の遺構・遺物が多く発見されているが、今回は確認できていない。
- 6 91B区より柱根が残存する掘立柱建物1棟と各種の土坑が検出された。これらは出土遺物より14世紀後半の室町時代初頭を中心と置く遺構群である。根川古墳群が存在する丘陵部下に当該期の集落遺跡の展開を類推せるものである。
- 7 91B区遺構内より出土した灰釉系陶器は、一部の器形を除き全て瀬戸産の碗・皿を中心とするものであった。これは灘尾平野の14世紀における東濃産の圧倒的流入と大きく異なるものである。

### させぐち 櫛口地区溝状遺構と伊保遺跡概観

伊保遺跡を全国的に著名にしているものは、櫛口地区溝状遺構出土のタタキ甕であろう。そこでここでは今回の伊保遺跡の調査成果を踏まえて、伊保遺跡全体の集落景観をまずは推定してみたい。ただしタタキ甕を始めとする第1次調査資料は公開されておらず、詳細な検討は不可能な状況である。

## 1 伊保遺跡における古墳時代時期区分とその性格

出土遺物によって大きく3つに区分できる。

**A期** 濃尾平野における山中式後期から廻間Ⅰ式期に併行する時期。遺構としては今回のN R01・02、第1次の四反田地区5・6・7・20号住居、六反田地区包含層等がある。遺構の広がりは最も広く、ほぼ遺跡全域にわたって遺物が分布する。集落の中心は確認できていないが、今回の調査区のN R01の在り方から、現在の東保見集落を中心とする丘陵部である可能性が高い。

**B期** 廻間Ⅱ式併行期である3世紀後半の時代。遺構としては櫛口地区溝状遺構に代表され、その他に同地区戸戸状遺構・排水路が所属しよう。遺構・遺物の確認はおおむね伊保遺跡内では櫛口地区周辺に限定される。伊保堂川上流である東保見集落から東保見団地に向かう谷地形を主要な生産域とした集落景観が推定できる。

**C期** 5世紀末から6世紀前半にかけての時期。遺構としては四反田地区的各住居を始め六反田地区では埴輪の出土が見られる。おおむね伊保堂川右岸の標高75mほどの盆地傾斜面に広く分布し、集落は伊保小学校の南を中心に戻展開しており、おそらくその東側である伊保堂川縦辺部には小規模な墳墓が形成されていたものと推定したい。それは須恵器系埴輪の出土に象徴されよう。なお須恵器には尾張型須恵器が見られる。

## 2 櫛口地区溝状遺構

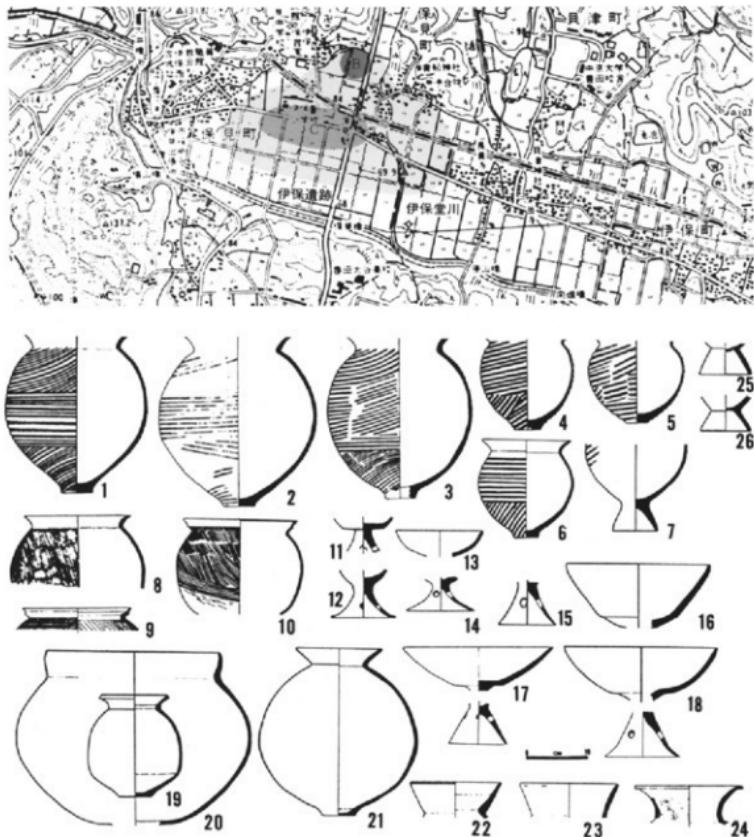
まず遺構の在り方であるが、溝状遺構は幅約1m・深さ約0.3mほどを測り、約30mにわたって東西に確認された。またその南50mほどの地点では「戸戸状遺構」「排水路」が検出されている。「戸戸状遺構」とされているものは木組を伴なう土坑状の施設で、内部より出土したものは鋤頭類の未製品を含めた木製品が多く、時代が異なるものの勝川遺跡等に見られる未製品貯蔵施設の可能性が高い。これらの遺構からは伊保遺跡B期に所属する資料が出土しており、集落周辺に展開する古墳時代初頭の生産遺跡を考えておいてよいであろう。

溝状遺構は第2層より多くの出土遺物が見られ、その内ほぼ半数近くが甕であり、他は高杯・壺となるようである。

所属時期の問題であるが、高杯は杯部が大きく外傾し、さらに深さが低い形状を呈する。また脚部は低く直線的で「八」字状になる。こうした特徴は濃尾平野における有段高杯の変化と異なる。S字甕はB類に所属するものが固定化されている。大型壺は頸部から大きく屈曲して低く聞く形状を呈する。甕は平底タタキ甕が主体を占め、有段口縁甕（西三河型）・「く」字甕が混在する。こうした各形式の特徴と組合せは濃尾平野・東三河の土器型式と異なるものである。高杯・壺の形状からみても廻間Ⅰ式期や欠山式土器に類似点を求めるることは不可能であろう。さらにその形状はこれらの形式より新しいものといわざるえない。それはS字甕B類の存在や西三河型有段口縁甕によっても傍証できよう。やはり廻間Ⅱ式期併行を考慮する必要がある。総合すると廻間Ⅱ式併行期（Ⅱ式後半期に中心

をおく庄内式末期)に位置づけておくことにしたい。東三河・西遠江の欠山式土器が、その中心を廻間I式後半期に置くことから、その後続期に併行する土器群と考えてよからう。

土器型式の特徴としては平底タタキ壺を主体におき、直線脚有段高杯をもち、中型壺・バレス壺が欠損し、さらに器台を欠く。こうした土器組成を持つ廻間II式併行期の当地域の土器群を「伊保櫛口期(B期)」としてまずは考えておきたい。すると伊保櫛口期の特徴をもつ土器が出土する範囲はおおむね矢作川中流域である岡崎市北部から豊田市にかけての西加茂郡一帯となる可能性が高い。因みに岡崎市高木遺跡30号土坑は伊保櫛口期の内に位置づけて考へてもよく、少なくとも廻間II式期においてタタキ壺が当地域内に定着していることが想定できる。ただしこうした畿内系の技法は壺のみにみられる現象であり、他の形式には認められない。つまり壺以外は矢作川流域の土器型式を基本的には踏襲した内での変化ということになる。直接的な畿内系土器の導入を論ずる前に、こうした諸点を見直す必要がある。



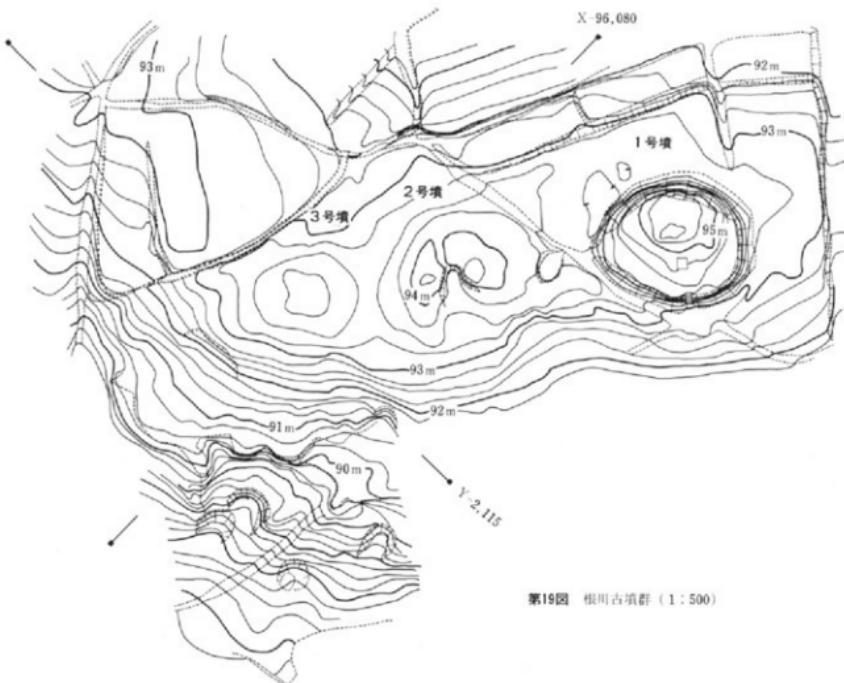
第18図 伊保櫛口期(櫛口地区溝状遺構出土土器、報告書より1:8)

# 根川3号墳

## 調査概要

根川3号墳は豊田市東保見町根川に所在し、調査は県道加納東保見線建設に伴なう事前調査として、1990年6月～8月にかけて実施した。その結果、径13mほどの円墳である根川3号墳の存在を確認することができた。なお東に所在する根川古墳（根川1号墳）は早くからその存在が知られており、明治18年に勾玉・管玉・劍・鐵讃・馬具・須恵器の出土が報告されている。現状では径16mほどの円墳状を呈し、埴輪片が散在している。しかしながら埴丘裾部は後世の改変をうけており正確な形状を留めているとは考えられないものであり、南斜面の状況からはむしろ西側の2号墳を含めて前方後円墳の可能性も否定できない。すると墳丘長40mの規模を想定することも可能である。なお2号墳は東西18mほどを測り、中央部には盗掘穴を確認できる。

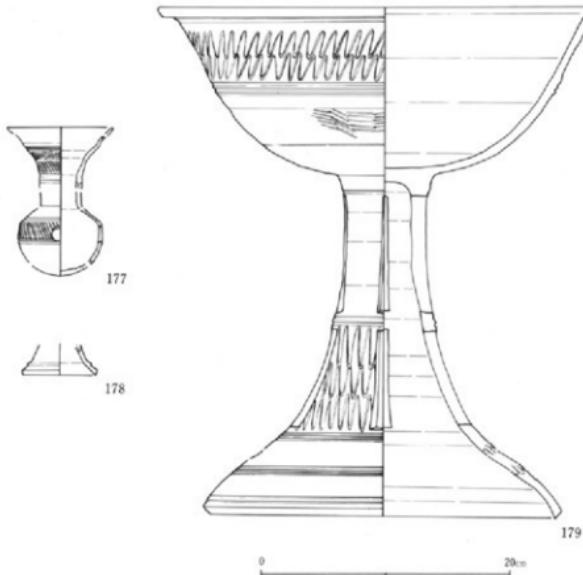
根川3号墳が所在する丘陵下には伊保遺跡が広がり、その比高差は約20mを測る。北には江古山遺跡ほか数基の古墳が点在している（第3図）。



第19図 根川古墳群（1:500）

## 根川3号墳

根川古墳（根川1号墳）の西に所在する古墳で、墳丘の流出が著しく、残存状況は極めて悪い。調査成果によれば、径13mほどの円墳と考えることができる。西側では幅3m・深さ0.3mの掘削り状の遺構が弧状に6mほど検出された。これを墳丘の西裾部とすると、現状では1mほどの高さを留めるのみとなる。墳丘は地山を成形して整えるのではなく、ほぼ盛土で構成されている。内部構造を知る手掛かりはなく、すでに消失したものと考えられる。ただ墳丘北斜面において小規模な土壤S X01を確認することができた。長さ1.2m・幅0.6mの長方形を呈し、深さ0.3mを測る。検出面より0.2mほどで土壤全体に粘土・炭化物層の船底状の広がりが認められた。出土遺物は認められない。その他の遺物の出土としては、北東斜面から10m×4mにわたって土器細片の分布が見られた。極めて細かく碎かれており、後世の開墾等による攪乱を想定することもできようが、むしろ意図的な破棄行為を類推することも可能である。器台・座・壺・高杯が確認でき、その内図化できたものは第20図である。179は器台で、脚部の一部を除いてほぼ全形を復元できた資料である。高さ41cmを測り、口径36cm・底径28cm。大きく開いた杯部にやや細く大きく聞く脚部がつけられており、脚部には2段4方透孔が穿たれる。杯部には2段の波状文が施され、端部は側方に拡張し、平坦部をつくる。脚部には下段に3段の波状文が施された文様区画が残る。縁は小型品で、口径部は細く大きく口縁に向かって外反する。頸部と体部には刺突文が施される。こうした形状は6世紀中葉段階の須恵器にその特徴を見ることができ、3号墳の造営をその時点に求めることができよう。

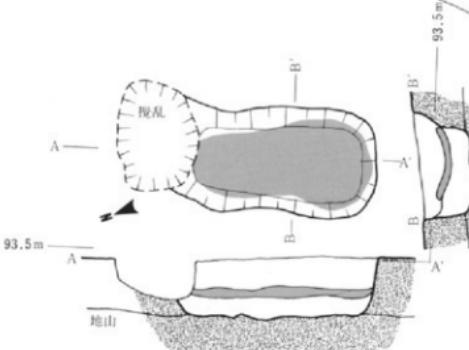


第20図 根川3号墳出土須恵器（1:4）

根川3号墳



第21図 横川古墳群位置図 (1:25000)



第22図 SX01 (1:30)



第23図 調査区位置図 (1:1000)

## 別 表

遺構一覽

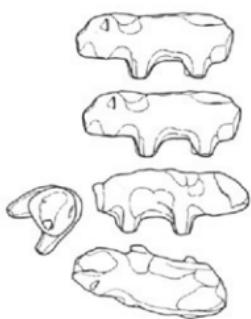
遺構番号	登録番号	大きさ	備考
S B 0 1	91B区 S B 0 1		3間×(3間)以上 内部に円形Pit
S K 0 1	91B区 S K 0 1	1 m × 1 m	深0.46m
S K 0 2	91B区 S E 0 1	0.9m × 0.85m	深0.25m
S K 0 3	91B区 S X 0 1	3.2m × 2.6m	深0.21m
S K 0 4	91B区 S B 0 2	4.8m	深0.14m
S K 0 5	91B区 S B 0 3	4.5m	深0.06m
S K 0 6	90区 S D 0 5	—	深0.25m
S D 0 1	90区 S D 0 1	幅0.9~0.6m	深0.20m
S D 0 2	90区 S D 0 2	幅1.2m	深0.11m
S D 0 3	90区 S D 0 3	幅1.0m	深0.10m
S D 0 4	90区 S D 0 4	—	深0.10m
S D 0 5	—	幅0.7~0.5m	深0.05m
S D 0 6	90区 S D 0 6	幅4.5~4.0m	深0.90m
S D 0 7	—	幅1.2m	深0.25m
S D 0 8	90区 S D 0 8	幅0.5m	深0.15m
S D 0 9	—	幅0.7~0.4m	深0.11m
S D 1 0	—	幅0.6m	深0.25m
S D 1 1	—	幅1.8m	深0.60m
N R 0 1	90区 N R 0 1	幅46~50m	深0.50m
N R 0 2	90区 N R 0 2	—	
N R 0 3	91A区 N R 0 1	幅6.0m	深1.80m

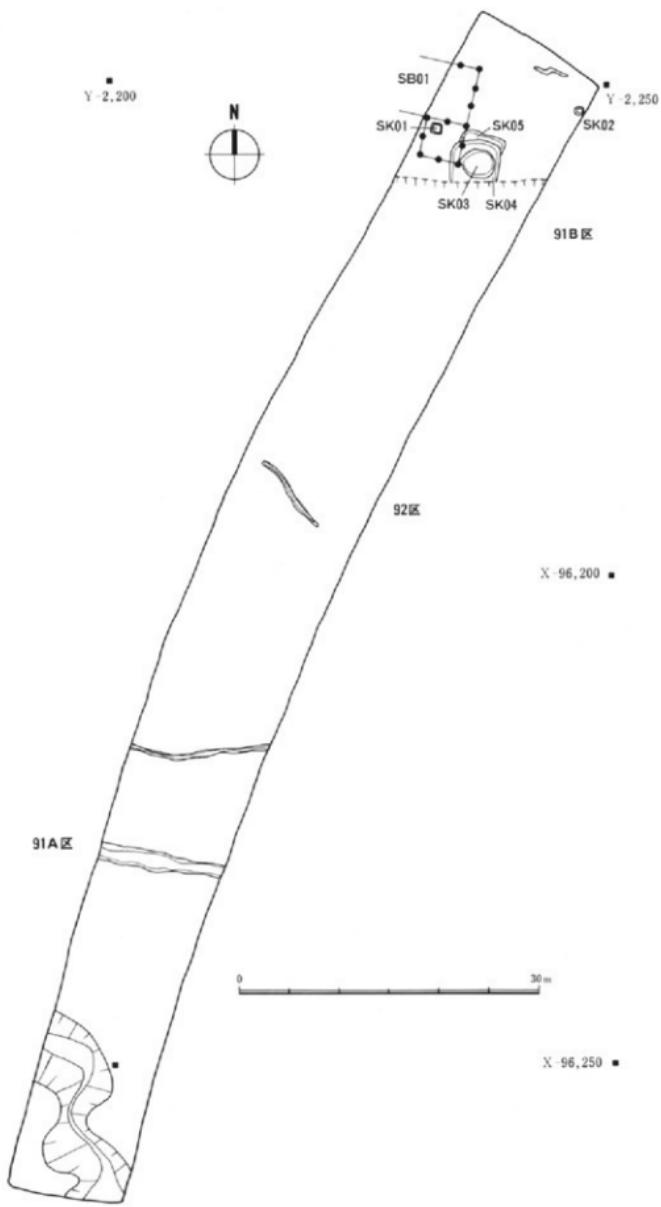
插図撮影遺物一覧

No.	登録番号	部	種	径(cm)	高さ(cm)	葉幅(cm)	備考	No.	登録番号	部	種	径(cm)	高さ(cm)	葉幅(cm)	備考
1	5.7	尖頭葉	3.8	3.1		チャート		26	E_179	葉	被	16			
2	5.1	尖頭葉	4.3	2.8		チャート		27	E_180	葉	被	19.4			
3	5.3	尖頭葉	6.1	2.1		チャート		28	E_177	葉	被	21.8			
4	5.2	尖頭葉	5.4	2.3		チャート		29	E_178	葉	被	18.2			
5	5.6	鋸片	(3.9)	2.6		チャート		30	E_183	葉	被				前面下位葉
6	5.5	鋸片	(2.3)	2.3		チャート		31	E_185	葉	被				体側下位葉
7	E_203	點葉葉	6.3	2.6		NR 0.1上層		32	E_186	葉	被				赤彩斑紋
8	E_186	高杯						33	E_200	葉	被				
9	E_188	高杯						34	E_201	底葉	底葉				5.5
10	E_187	高杯						35	E_191	底葉	底葉				4.5
11	E_189	高杯						36	E_194	葉	被	9.5			
12	E_171	高杯						37	E_195	葉	被	15.6			口端端部赤彩
13	E_173	高杯		12.5				38	E_196	葉	被	14.5			
14	E_174	高杯		14.8				39	E_198	葉	被	13.8			
15	E_170	高杯				口縫外面被状文		40	E_197	葉	被	17			口端端部背丈
16	E_189	高杯	12.2			杯部外面「ギ」		41	E_172	葉	被	14.5			口部高5 cm
17	E_181	高杯	10.4					42	E_106	高杯					
18	E_193	高杯	18.6					43	E_108	高杯					
19	E_190	高杯	23			口縫端部に斑		44	E_105	高杯					
20	E_192	高杯	23			口縫外面被状文、		45	E_100	高杯					
21	E_175	小型高杯	13.2			端部多裂化		46	E_103	高杯					
22	E_176	基台	17.0			端部多裂化		47	E_101	高杯					
23	E_199	高杯	19			端部多裂化		48	E_102	高杯					
24	E_184	小型葉				端部多裂化		49	E_107	小型高杯					端高4.5cm
25	E_182	葉	14.8					50	E_109	高杯					端部長4cm

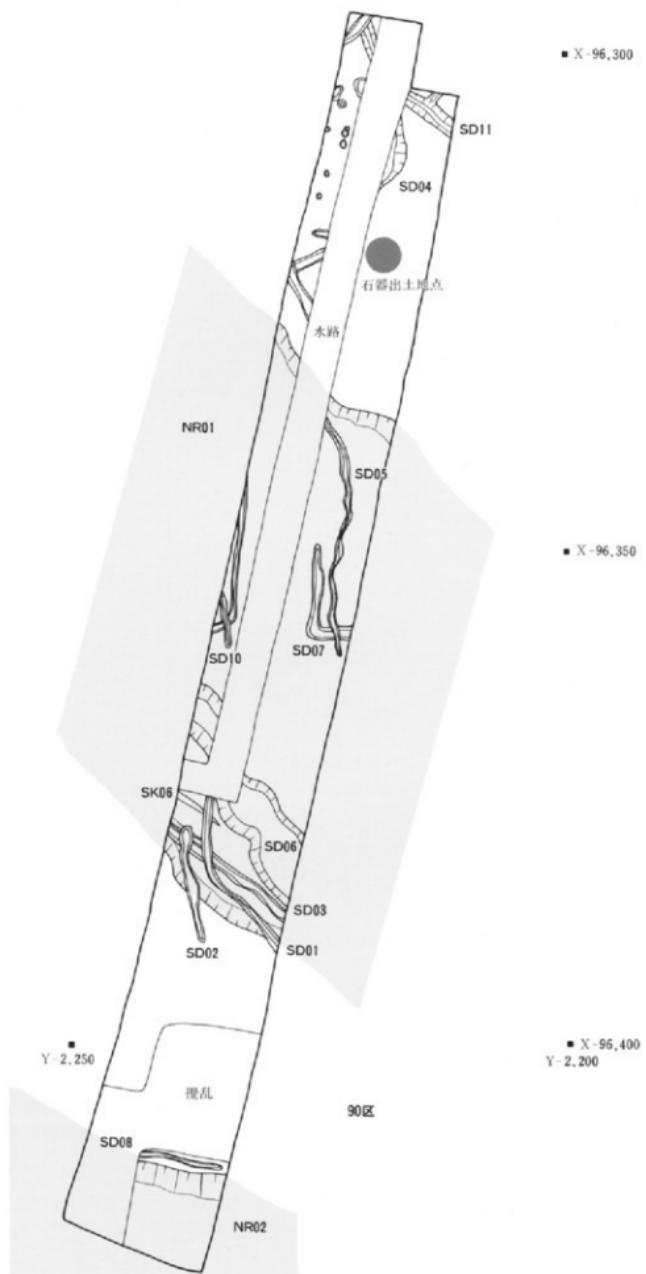
No.	登録番号	器種	口径cm	底径cm	高さcm	備考	No.	登録番号	器種	口径cm	底径cm	高さcm	備考
51	E_110	高杯	26.6				116	E_35	灰陶系皿	7.8	1.2	5	
52	E_111	高杯					117	E_36	灰陶系皿	7.6	1.6	4.3	
53	E_112	高杯	27				118	E_71	陶丸	2			
54	E_113	高杯	24.6				119	E_42	陶丸	2			
55	E_115	高杯	23.6				120	E_30	灰陶系碗	13.6	5.5	7.5	剝落高台
56	E_116	高杯	20				121	E_33	灰陶系碗	13	5	5	
57	E_114	高杯	25.4				122	E_63	灰陶系碗			5.3	
58	E_104	器台					123	E_32	灰陶系碗	13.6			
59	E_124	武器		4.5			124	E_62	灰陶系碗			6.5	
60	E_126	劍		6.0			125	E_31	灰陶系碗			5.2	
61	E_127	劍		6.0			126	E_64	灰陶系碗			5.4	
62	E_128	貝類甕	10			○腹周高8.5cm T-×C2	127	E_65	土師器			6	底部承切り
63	E_129	小型鉢	5.2	(3.3)		○腹周高4.7cm 口部直徑4.7cm 口部直徑5.0cm	128	E_68	灰陶系皿	7.6	2.3	3	
64	E_117	口口甕	21.5			○腹周高4.7cm 口部直徑4.7cm	129	E_24	灰陶系皿	8.6	1.8	5	
65	E_118	口口甕	20			○腹周高5.0cm	130	E_30	灰陶系皿	9.2	1.6	5.8	
66	E_119	口口甕	17			○腹周高5.0cm	131	E_25	灰陶系皿	8	1.6	5	
67	E_120	口口甕	16			○腹周高5.0cm	132	E_20	灰陶系皿	8	1.5	5	
68	E_121	有段甕	17.2				133	E_21	灰陶系皿	8	1.5	4.5	
69	E_122	便	17.6				134	E_22	灰陶系皿	8	1.5	5.5	
70	E_123	便	16.2				135	E_23	灰陶系皿	8	1.5	5	
71	E_130	便	19.6			端部刺突文	136	E_27	灰陶系皿	7.6	1.6	1.5	
72	E_131	便	19.8			端部刺突文	137	E_19	灰陶系皿	7.1	1.6	1.6	
73	E_132	便	15.8				138	E_66	灰陶系瓶	23.5			
74	E_133	鉢	20				139	E_24	灰陶系甕	46.8			
75	E_134	便	22				140	E_28	陶丸	1.8			
76	E_135	甕台部				台底部直徑8.2cm	141	E_29	陶丸	2			
77	E_136	甕台部				台底部直徑7.2cm	142	E_67	土師器蓋	18			伊勢型
78	E_137	甕台部				台底部直徑7.4cm	143	E_56	灰陶系碗	13	4.6	6.2	剝落高台
79	E_138	甕台部				台底部直徑9.6cm	144	E_58	灰陶系碗				
80	E_139	甕台部				台底部直徑10.6cm	145	E_50	土師器蓋	9.2	1.6	6	底部承切り
81	E_142	便	18			端部刺突文	146	E_49	土師器蓋	8	1.2	4	底部承切り
82	E_149	便	16				147	E_57	陶罐	3.8			
83	E_143	高杯					148	E_54	灰陶系皿	7.6	1.5	4.8	
84	E_152	小型甕					149	E_55	灰陶系皿	8	1.7	5	
85	E_144	内側直口甕	13			○腹周高7cm	150	E_53	灰陶系皿	7.8	1.5	5	
86	E_145	便				E_144の体連か	151	E_52	灰陶系皿	6.8	1.7	3.8	
87	E_151	甕台部				台底部直徑8.4cm	152	E_31	灰陶系皿	7.8	1.7	5	
88	E_148	高杯					153	E_4	灰陶系甕	63.6			
89	E_149	店口甕	16			○腹周高5.5cm	154	E_5	灰陶系碗	12.5	4.8	5.5	
90	E_150	店口甕	12.8			内形直文	155	E_6	灰陶系碗	12.5	4.7	5.4	
91	E_147	高杯				上段1穿孔	156	E_8	灰陶系碗				
92	E_153	高杯					157	E_7	灰陶系碗	17.6			
93	E_154	高杯					158	E_9	灰陶系碗			7.3	
94	E_157	高杯					159	E_10	灰陶系甕			18.4	
95	E_155	高杯				内側脚	160	E_11	灰陶系碗	13.2	4.5	5.2	
96	E_159	高杯					161	E_18	灰陶系碗			6	墨書
97	E_160	小型甕					162	E_12	灰陶系皿	11.7	5.1	4	
98	E_158	甕台部					163	E_14	灰陶系碗	12.3			
99	E_180	小型鉢	6.2	4.5			164	E_18	灰陶系碗			3.5	剝落高台
100	E_161	店口甕	15.5			○腹周高6cm	165	E_15	灰陶系碗	12.5			
101	E_162	甕台部					166	E_13	灰陶系碗	15.8			
102	E_162	高杯					167	E_17	灰陶系碗			6	
103	E_164	高杯				上段1穿孔	168	E_60	灰陶系碗			5.7	
104	E_165	高杯					169	E_69	土師器			6.2	底部承切り
105	E_72	杯蓋	15.6	4.7		須地器	170	E_81	土師器			6.2	底部承切り
106	E_202	鉢	21.7			圓文土器	171	E_59	陶丸	2.2			
107	S.9	石罐	3.6	1.6		チャコト・有茎 チャコト・石籠木	172	E_47	灰陶系碗	13.2	4.8	5.8	
108	S.8	削片				製品	173	E_45	灰陶系碗	12.9	4.5	4.8	東濃產
109	E_39	灰陶系碗	13.5	5.5	5.4		174	E_46	灰陶系碗	11.7	3.7	4.9	
110	E_40	灰陶系碗	13.7	(5)			175	E_43	灰陶系皿	8.1	1.7	4	
112	E_41	灰陶系碗	12.2	5.7	6.0		176	E_44	灰陶系碗				須地器再加工品
113	E_70	土師器					177	E_2	須地器				
114	E_37	灰陶系皿	7.6	1.3	5	底部承切り	178	E_3	須地器高杯			6	
115	E_38	灰陶系皿	7.4	1.6	5		179	E_1	須地器蓋	37	41	28	

## 図 版





図版1 伊保遺跡主要遺構 1:500



図版2 伊保遺跡



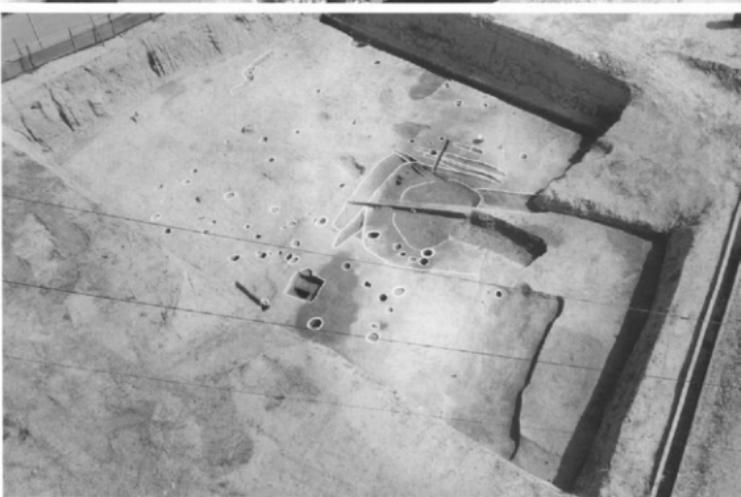
90区



90区 NR02 (西から)

図版3 伊保遺跡

90区 SD03  
(南から)



91A区 NR03  
(西から)

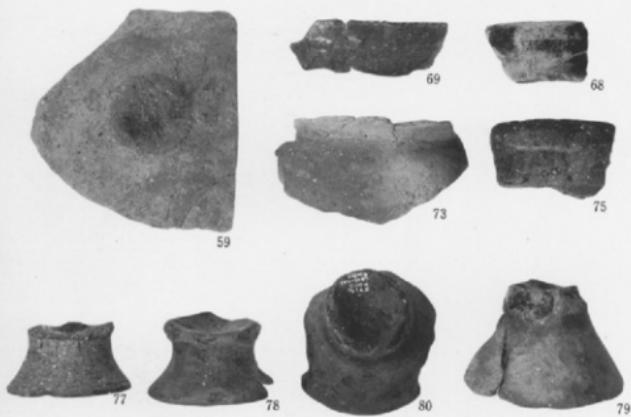


図版4 伊保遺跡

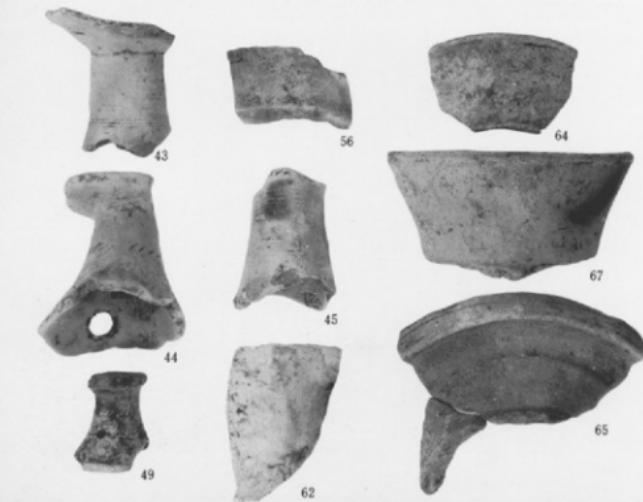
NR02



SD03



SD03



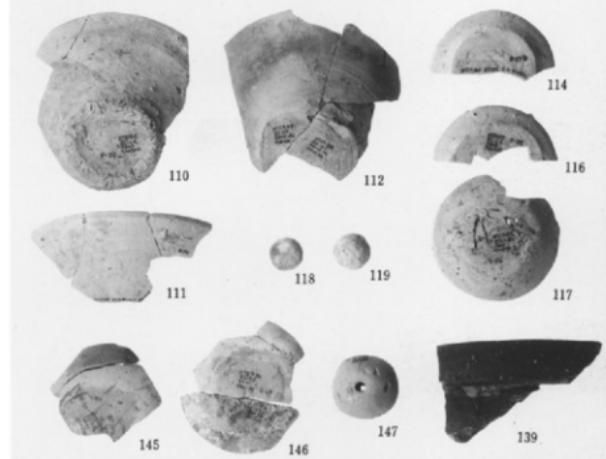
1 : 3



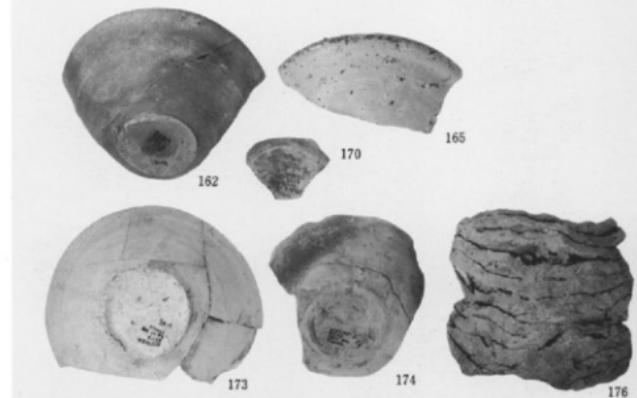
NR01 (90-91)  
SK06 (92-96-100)  
SD08 (102-103)

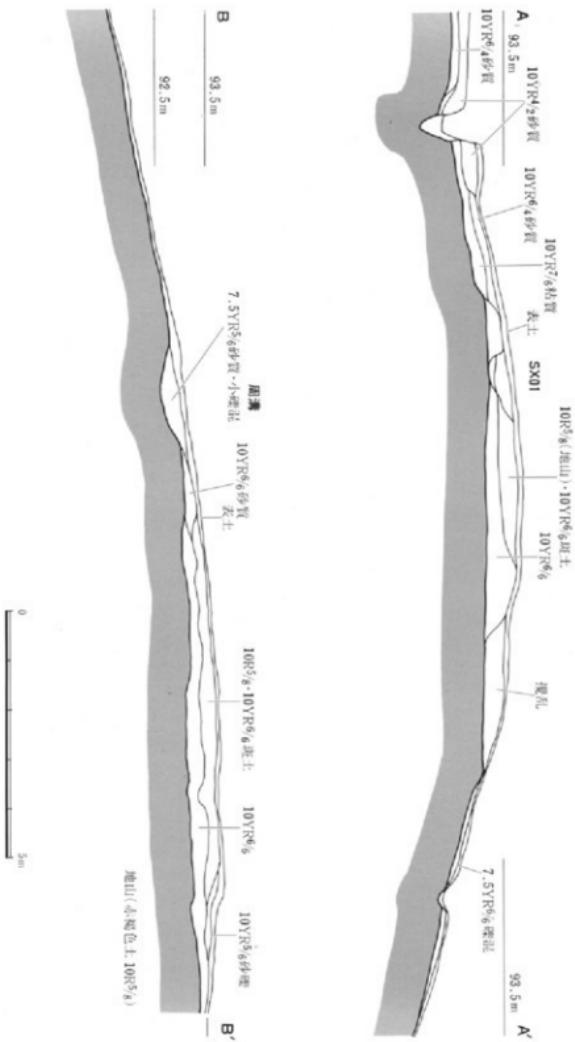


SK03 (110-111-112  
114-116-119)  
SK02 (139)  
SK01 (145-146-147)



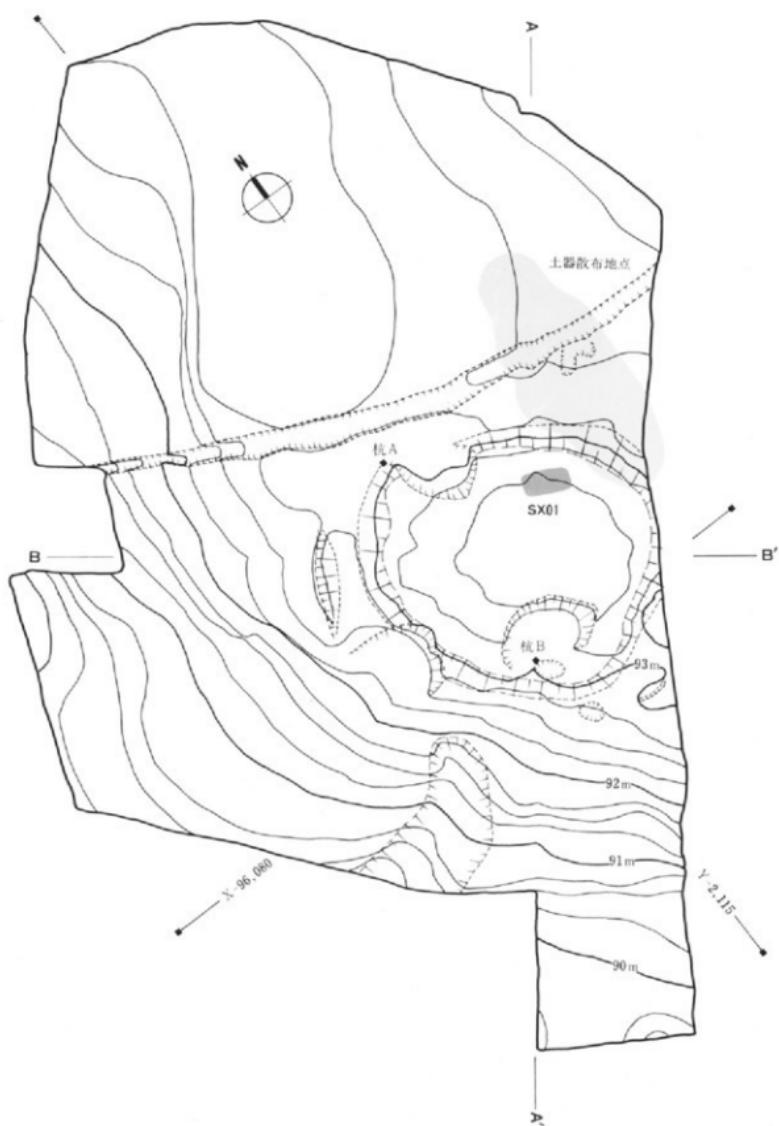
SK05 (162-165-170)  
SK04 (173-174-176)





(图川 3 号剖面圖)(1:100)

図版6 横川3号墳 1:200





表土除去



墳丘



SX01

根川3号墳

器台

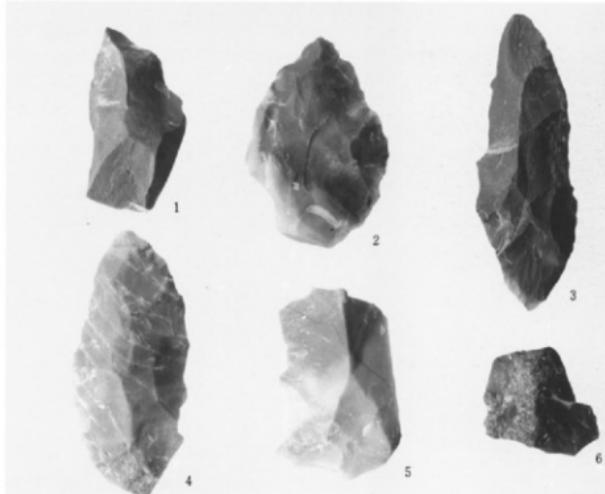
1 : 5



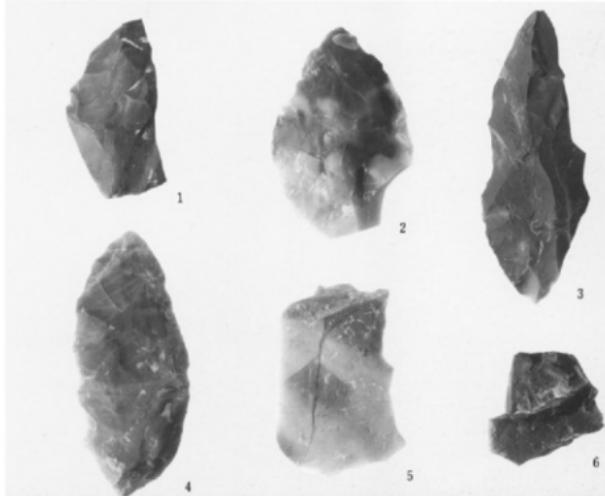
伊保遺跡

石器 1 : 1

(表面)



(裏面)



# 坂 口 遺 跡

## 例　　言

1. 本編は愛知県東加茂郡旭町大字池嶋字坂口に所在する、坂口遺跡の発掘調査報告である。
2. 調査は、愛知県土木部道路建設課による県道島崎豊田線拡幅工事に伴う事前調査として、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じた委託を受け、平成3年10月から平成4年1月・平成4年4月から8月にかけて行った。調査面積はそれぞれ366m<sup>2</sup>・455m<sup>2</sup>である。
3. 現地調査は、地元住民の方々の参加を得て、本センター調査課主査野本欽也、同都築暢也、調査研究員松田訓が担当した。
4. 調査にあたっては、次の各関係機関の御協力を得た。  
　　愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県土木部道路建設課、旭町教育委員会
5. 本編の編集は、松田訓が担当し、執筆分担は次のとおりである。

I～II-1・III～V・VI 松田 訓

II-2 都築暢也

VI 杉山真二（パリノ・サーヴェイ株式会社）

服部俊之（本センター調査研究員）

なお、遺構、遺物の写真撮影は松田訓が行った。

6. 遺物整理作業については次の方々の協力を得た。  
　　棚木えみ子、蔽田久子、山本章子、西山朋子、中島由美子
7. 本編に示す座標数値は、建設省告示に定められた平面直角座標第VI系に準據する。また、本編に示す海拔表記は、東京湾標準（T. P.）の数値である。
8. 遺物の整理番号と登録番号の対照は、表として本文中に示した。
9. 調査記録、出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。
10. 本編の執筆にあたり次の諸機関、諸氏に御指導・御助言をいただいた。記して感謝したい。（敬称略）

内野 正、梅村清春、大參義一、斎藤基生、立松 宏、寺内隆夫、中井さやか、永井宏幸、野口哲也、平林 彰

旭町教育委員会、東京都埋蔵文化財センター、長野県埋蔵文化財センター

# 目 次

第Ⅰ章 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	
1 遺跡の位置	2
2 歴史的環境	4
第Ⅲ章 調査の概要	
1 調査区	6
2 調査の方法	6
第Ⅳ章 遺構	
1 基本層序	7
2 遺構	10
第Ⅴ章 遺物	
1 土器・土製品	14
2 石器	30
第Ⅵ章 自然科学的分析	34
第Ⅶ章 まとめ	39
付 表	40

## 挿図・表目次

### 挿 図 目 次

第1図 愛知県位置図.....	2	第30図 試料顕微鏡写真②.....	38
第2図 旭町位置図.....	2	第31図 Ⅲ A S 91第Ⅰ群土器垂直分布図.....	41
第3図 遺跡周辺位置図.....	3	第32図 Ⅲ A S 91第Ⅱ群土器垂直分布図.....	41
第4図 周辺遺跡位置図.....	5	第33図 Ⅲ A S 91第Ⅲ群土器垂直分布図.....	42
第5図 調査区位置図.....	6	第34図 Ⅲ A S 91第Ⅳ群土器垂直分布図.....	42
第6図 調査区基本層序模式図.....	7	第35図 Ⅲ A S 91第Ⅴ群土器垂直分布図.....	43
第7図 91年度調査区土層断面図.....	8	第36図 Ⅲ A S 91石器垂直分布図.....	43
第8図 92年度調査区土層断面図.....	9	第37図 Ⅲ A S 91 '92石器平面分布図.....	44
第9図 91年度調査区遺構位置図.....	10		
第10図 92年度調査区遺構位置図.....	11		
第11図 鉢形土器(305)出土状況.....	13		
平・断面図			
第12図 S K103平・断面図 .....	13		
第13図 集石平・側面図.....	13		

### 表 目 次

第14図 土器実測図①.....	18	第1表 調査日程表.....	1
第15図 土器実測図②.....	19	第2表 周辺遺跡一覧表.....	4
第16図 土器実測図③.....	20	第3表 植物珪酸体分析結果.....	16
第17図 土器実測図④.....	21	第4表 主な分類群の推定生産量.....	16
第18図 土器実測図⑤.....	22	第5表 坂口遺跡南壁セクションに.....	16
第19図 土器実測図⑥.....	23	おける植物珪酸体分析結果	
第20図 土器実測図⑦.....	24	第6表 土器一覧表(1) .....	46
第21図 土器実測図⑧.....	25	第7表 土器一覧表(2) .....	47
第22図 土器実測図⑨.....	26	第8表 土器一覧表(3) .....	48
第23図 土器実測図⑩.....	27	第9表 土器一覧表(4) .....	49
第24図 土器実測図⑪・土製品実測図.....	28	第10表 石器一覧表.....	50
第25図 土器実測図⑫.....	29	第11表 土器出土地点一覧表(1) .....	51
第26図 石器実測図①.....	31	第12表 土器出土地点一覧表(2) .....	52
第27図 石器実測図②.....	32	第13表 土器出土地点一覧表(3) .....	53
第28図 石器実測図③.....	33	第14表 土器出土地点一覧表(4) .....	54
第29図 試料顕微鏡写真①.....	37	第15表 石器出土地点一覧表.....	55

# 第Ⅰ章 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

坂口遺跡は、愛知県遺跡分布地図に散布地として記載された遺跡（遺跡番号69022）で、東加茂郡旭町大字池嶋字坂口地内に所在する。この記載範囲内に愛知県土木部道路建設課によって、県道島崎豊田線拡幅工事が行われることとなった。この地は既に愛知県教育委員会文化財課及び旭町教育委員会が、土地改良整合整備事業に先立ち、予定地内の埋蔵文化財の包蔵状況、遺跡の広がりを確認するための調査を、平成元年9月20～25日に行っており、試掘坑からは縄文土器片などの出土をみた。この調査時に確認された遺跡範囲内に県道拡幅予定地が入っていたため、事前に発掘調査が必要と判断された。

（財）愛知県埋蔵文化財センターではこのような事前協議を経て、愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、旭町教育委員会の協力のもと、平成3年10月から発掘調査を実施した。

## 2 調査の経過

調査区は県道の南側の拡幅予定地に、一括して設定した。この調査区に平成3年10月から表土剥ぎを実施し、資材搬入を行い、発掘作業を開始したのは10月7日であった。調査地には80～100cmという予想以上の厚さで黒色土が堆積しており、こうした包含層の掘り下げに時間を要した。調査期間は3ヶ月強を要し、測図、写真撮影、補足調査を含めて1月10日に現地調査を終了した。この調査の結果、調査区の西側に統く拡幅予定地にも遺跡の広がる可能性が認められた。このため試掘調査を実施して遺物包含層の広がり確認し、この部分についても発掘調査が必要と判断されたため、平成4年4月20日より調査を開始し、8月14日に終了した。

出土遺物の整理作業は、調査終了後、洗浄・注記作業を本センター西尾事務所で行い、引き続き同三河事務所において、調査報告書作成までの作業を行った。

	平成3年 10月	11月	12月	平成4年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
■AS91											
■AS92											

第Ⅰ表 調査日程表

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の位置



第1図 愛知県位置図



第2図 旭町位置図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置する。坂口遺跡の所在する東加茂郡旭町は、愛知県の北端、矢作川上流部に属し、その東境は北設楽郡稻武町、南境は東加茂郡足助町、西境は西加茂郡小原村、北境は岐阜県恵那郡明智町・同郡中原村と接する。これら山間部に所在する三河高原は、日本を代表する大断層である中央構造線の内帯にあり、この大断層に斜交していくつかの小断層が走り、複雑な地質構造を形成している。したがって河川によって形成された谷地形も複雑な様相を呈しているが、これらは矢作川水系に属している。遺跡の立地する旭町周辺は、地質構造からは古期沖積世の下位堆積層に属し、矢作川上流からの土砂の堆積と、南側の山地から崩れ落ちた土砂の堆積によって生まれた地形である。

遺跡は矢作川が右岸の急峻な斜面に当たって大きく蛇行する右側（左岸）に発達した河岸段丘上に立地し、周辺には幾筋もの沢が矢作川に向かって流れ落ちている。この地は旭町の中では矢作川の最下流に位置するため、同町内でも最も標高が低い。調査地は標高約114メートルを測り、矢作川との比高差は約10メートルで、周囲は杉、檜を中心に、植林が丁寧に施されている。調査地のある矢作川左岸は北向きの緩斜面であるが、この傾斜が南側の山裾まで広く続いているため陽当たりは比較的良好である。右岸では川岸から急な斜面が続いたため、左岸の北向き緩斜面に集落が形成されたと思われる。さらにこの地の東西には沢が幾筋も展開していることから、生活するための条件は比較的良好であったと思われ



第3図 遺跡周辺地形図（国土地理院 1/20万地勢図「豊橋」）

る。こうした立地から、調査地の旧態は畠地として利用され、野菜、穀類、植木が栽培されていた。

坂口遺跡の所在する東加茂郡の気候は、表日本式気候に属しているとはいえ山間部にあるため、名古屋、豊橋など県内の平野部と比べるとやや冷温である。しかし降水量に関しては山間部特有の地形性降雨はあまり見られないようで、年間の降水量は名古屋市のそれとほぼ同じである。暖候期には南から南東向きの斜面では、海からの湿った空気が巻き込むために地形性降雨が起こりやすいのであるが、平野部に近いことからこうした降水量に留まっているものと思われる。

## 2 歴史的環境

『愛知県遺跡分布地図(Ⅱ)一知多・西三河ー』によれば、矢作川本流上流部(行政区で言えば藤岡町・足助町・小原村・旭町)に分布する縄文時代の遺跡は、22ヶ所が確認されている。加えて、矢作川の支流部及び丘陵部には、地域によって分布調査の粗密はあるが、数多くの遺跡が分布している。

本項ではこの地域の縄文期の遺跡を中心に概観してみよう。草創期の遺跡はいまだ発見されてはいないが、桑田・小渡広畑遺跡などでは砾石器、越田遺跡では尖頭器が検出されている。押型文土器を出土する遺跡は、柳野広見・大水口岩陰・御堂遺跡など各所で確認されている。続く前期の遺跡は、遺跡数は増加するが、遺物の検出状況からみて、早期の遺跡と同じく、基本的にキャンプサイト的な短期間に断続的に存続した遺跡と考えられる。それに対し、中期から後期にかけての遺跡は、定住傾向を示す安定した遺跡となる。大砂・番城垣内・万場垣内・久保田遺跡(以上中期)・寺ノ下遺跡(後期)からは、1棟から数棟の堅穴住居跡が検出され、遺物の量も豊富に出土することがそれを示している。また、同時期は、石棒・石劍などの遺物も含め、当時の精神世界を窺わせるような遺構が明らかになっている。大砂遺跡(中期)・木汲遺跡(後期)の円形配石遺構がそれである。続く晩期は前半と後半では様相が異なる。前半の半截竹管文の土器を検出する遺跡は後期から継続するのに対し、次の条痕文の土器を出土する遺跡は断絶し、かつ遺跡の規模も小さくなる傾向が見られるが、これは愛知県下全域と同じ傾向である。

### 引用・参考文献

愛知県教育委員会 1988 『愛知県遺跡分布図(Ⅱ)一知多・西三河ー』

旭町教育委員会 1981 『旭町誌』

足助町誌編纂委員会 1975 『足助町誌』

	遺跡名(県遺跡番号)	時期			遺跡名(県遺跡番号)	時期		
		先	早	中		後	晚	
1	坂口遺跡(6 9 0 2 2)	○	○	○	21	市場遺跡(6 7 0 2 3)	○	○
2	岸ヶ原遺跡(6 9 0 2 3)	○	○	○	22	木本遺跡(6 7 0 2 2)	○	○
3	竹ノ下遺跡(6 9 0 1 3)	○	○	○	23	森下遺跡(6 7 0 2 1)	○	○
4	桑田遺跡(6 9 0 7 3)	○	○	○	24	大貝津遺跡(6 7 0 2 0)	○	○
5	原堂遺跡(6 9 0 3 5)	○	○	○	25	畠中遺跡(6 7 0 1 7)	○	○
6	子戸遺跡(—)	○	○	○	26	長沢遺跡(6 7 0 1 6)	○	○
7	小樽遺跡(6 9 0 1 1)	○	○	○	27	寺ノ下遺跡(6 7 0 1 3)	○	○
8	島崎遺跡(6 9 0 1 2)	○	○	○	28	東田面遺跡(6 7 0 0 8)	○	○
9	南貝津遺跡(6 9 0 1 0)	○	○	○	29	西田面遺跡(6 7 0 0 9)	○	○
10	小渡広畑遺跡(6 9 0 8 0)	○	○	○	30	ヤゲ西遺跡(6 7 0 1 0)	○	○
11	鯨戸遺跡(6 9 0 0 7)	○	○	○	31	井ノ元遺跡(6 7 0 0 6)	○	○
12	小渡戸遺跡(6 9 0 7 9)	○	○	○	32	御堂遺跡(6 7 0 0 5)	○	○
13	大砂遺跡(6 9 0 3 7)	○	○	○	33	川畑遺跡(6 7 0 0 3)	○	○
14	篠の上遺跡(6 9 0 0 4)	○	○	○	34	木汲遺跡(6 5 0 8 1)	○	○
15	下洞遺跡(6 9 0 0 5)	○	○	○	35	高士屋遺跡(6 5 0 9 7)	○	○
16	上方夢遺跡(6 9 0 3 2)	○	○	○	36	大倉遺跡(6 6 0 3 0)	○	○
17	ホシゴ遺跡(6 9 0 1 5)	○	○	○	37	馬場遺跡(6 6 0 2 0)	○	○
18	大水口岩陰遺跡(—)	○	○	○	38	大福寺遺跡(6 6 0 1 9)	○	○
19	柳野広見遺跡(—)	○	○	○	39	宮口遺跡(6 6 0 2 1)	○	○
20	油田遺跡(6 9 0 3 0)	○	○	○	40	大田遺跡(6 6 0 2 8)	○	○

第2表 周辺遺跡一覧表(縄文時代)

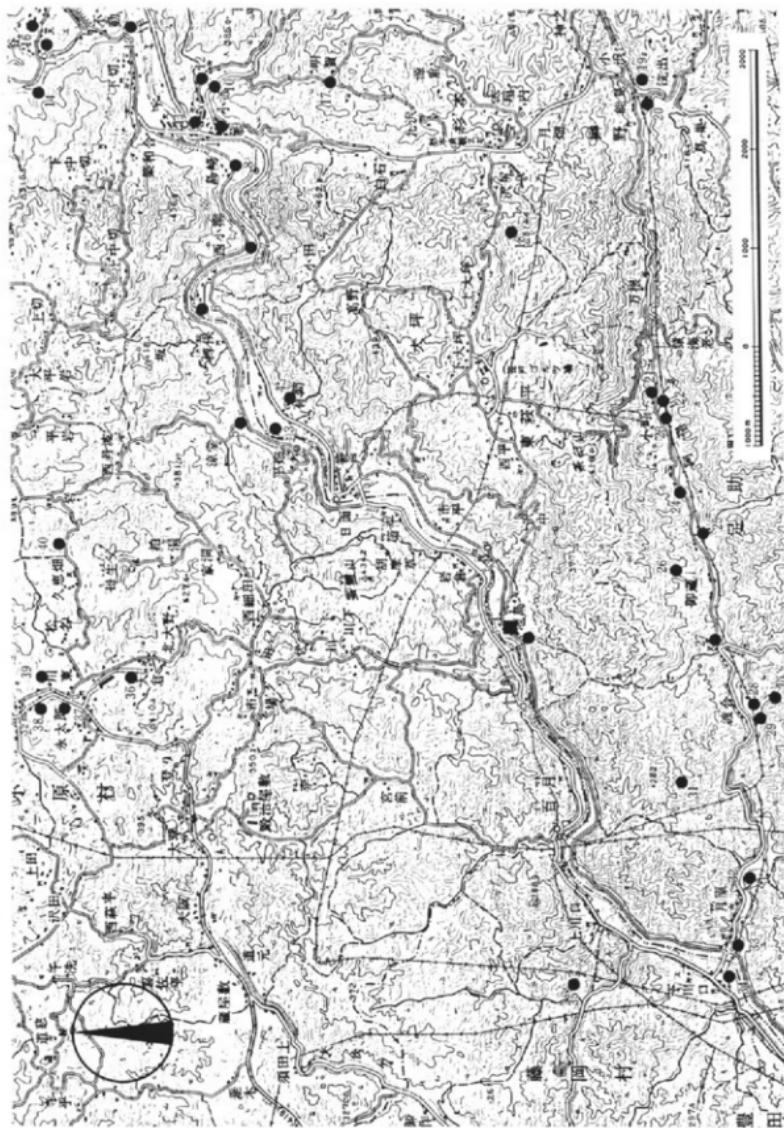


図4 四辺道路幹線図(国土地盤院 1:5万地形図「明智」)

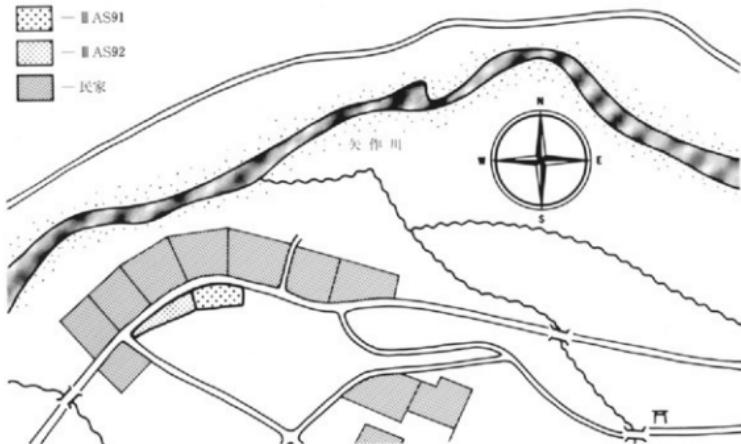
## 第Ⅲ章 調査の概要

### 1 調査区

本調査に先立って行われた確認調査の結果から、坂口遺跡は現県道面よりも高い位置に遺物包含層が展開している可能性が考えられたため、畠地として利用されている拡幅予定地に91年度調査区を設定した。遺物包含層はこの調査によって、予想された高さより低い位置に存在することが判明し、さらに西側の拡幅予定地にも展開していることが確認できた。92年度調査区はこうした調査結果から、西隣の消防小屋敷地及びさらに西側の畠地に設定した。両調査区は北向きの緩やかな斜面に立地しており、この斜面は矢作川によって形成された河岸段丘に展開する池鶴集落の南側に広がっている。両調査区とも北向き斜面ではあるが傾斜が緩やかなため、陽あたりは良好で、乾燥した水はけのよい土地である。

### 2 調査の方法

両調査区内の表土の除去は、機械（バックホウ）掘削によって行った。この調査地に排水処理のためにベルトコンベヤーを配し、91年度調査では排水をすべて持ち出し、92年度調査では排水置場を91年度調査地に充て、これをまとめた。両区共に50cm幅のトレンチを壁面に沿って入れたが、遺物包含層は予想以上に厚く、さらにその分層が肉眼観察では不可能であった。そこでこの遺物包含層を任意（約10cm）に分層し、実質的にはサブグリッド（250cm方眼）毎に検出作業を繰り返して基盤層に到達する方法をとった。



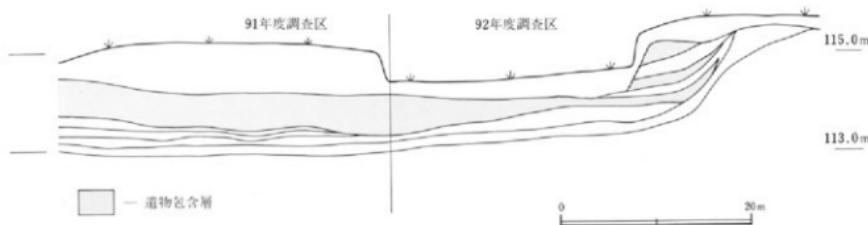
第5図 調査区位置図

## 第Ⅳ章 遺構

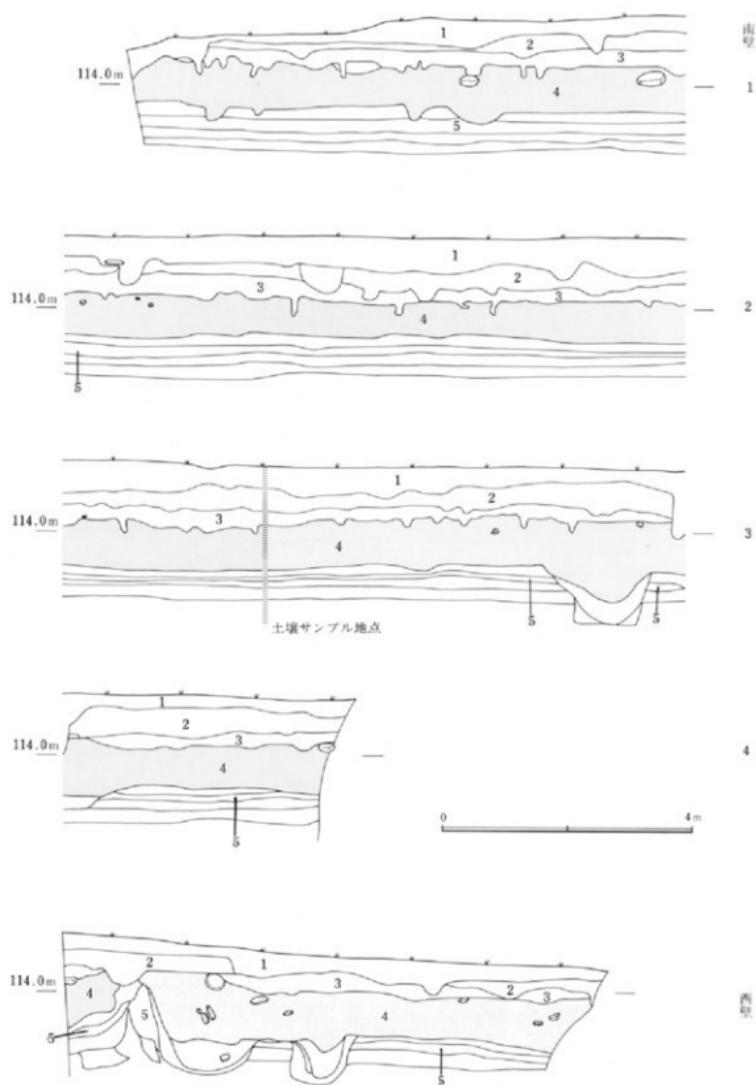
### 1 基本層序

板口遺跡の基本層序を概観すると、遺物包含層については第6図のような状況がみてとれる。91・92年度両調査区は、南北方向に延びる傾斜の緩やかな浅い谷状の旧地形に、東西方向に調査区を設置した。91年度調査区ではこの遺物包含層が厚く均一に堆積しているが、92年度調査区では80年ほど前に大きく削平された部分もあり、地形も西に向かうにしたがい上昇っているため薄くなり、さらに間層によってこれが分かれている。以下に各土層の堆積状態を説明するが、層名については第7・8図に明記する。

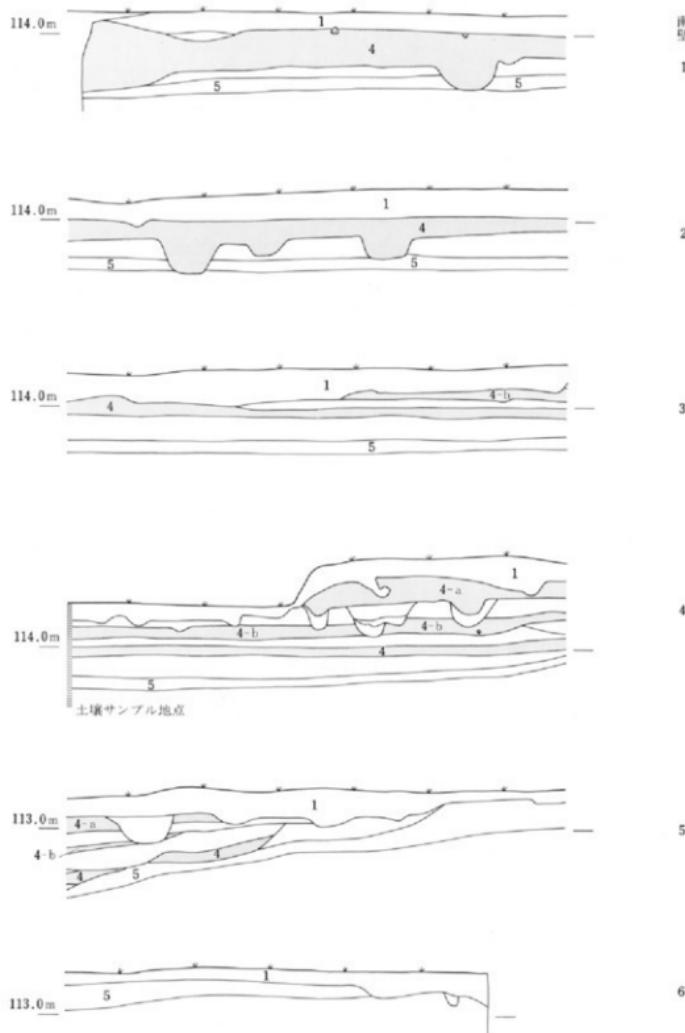
地表面は標高約115mで、地表直下には耕作土である褐色砂質シルト（第1層）が10～50cm程堆積し、この下には91年度調査区のみに明褐色灰色粗粒砂層（第2層）が10～30cm、さらにこの下に第2層のブロックを多量に含む灰褐色シルト層（第3層）が約30cm堆積していた。この第3層はローリングを受けたものと思われるが、土器の混入がみられたため、表土除去作業はこの層の直上までとした。両区にわたって最も厚く堆積するのは黒褐色砂質シルト（第4層）で、91年度調査区では第3層の下に、92年度調査区では第1層の下に堆積しており、この層には縄文時代早期から晩期までの遺物が含まれ、本遺跡の遺物包含層にあたる。92年度調査区では第3層が削平等によって存在しなかったため、表土除去作業はこの第4層直上とした。この第4層は先にも述べたように、92年度調査区の西側の、地形の傾斜が急になる部分で間層が入って分かれている（第4-a・b層）。この分かれた層からはわずかな量の遺物しか出土していないが、いずれも縄文早期から前期のものであり、東側の低い部分の遺物包含層の上方から出土するものよりも古い。この逆転現象は、斜面堆積している部分が平面的に削平されたため、第4層の上方部分は低いところで残ったと解釈したい。なお、この第4層の下には間層（褐色細粒砂）をはさんで火山灰を含む褐色細粒砂（第5層）が確認できた。



第6図 調査区基本層序模式図



第7図 91年度調査区土層断面図



第8図 92年度調査区土層断面図

## 2 遺構

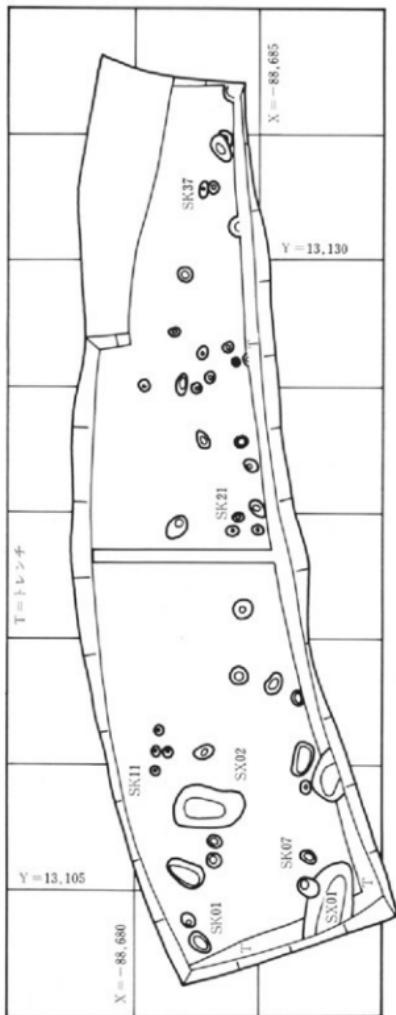


図9 91年度調査区遺構位置図

本遺跡で検出した遺構は、91年度調査区では土坑（SK）42基、不定形な掘り込み（SX）2ヶ所、92年度調査区では土坑43基である。

遺構検出面は、概ね標高114～115mである。この検出面は、基本層序の項でも述べたように、削平された部分も含まれていたため、縄文時代の早・前期のみ残る部分と、早期から晩期にわたって残る部分とがみられた。

両調査区で検出された遺構の埋土は、いずれも縄文時代遺物包含層である黒褐色砂質シルトであった。よってこれらの遺構の時期は、いずれも縄文時代と考えることができる。しかし、時期を判定し得る遺物をともなった遺構は僅かであった。包含層中の遺構は両調査区共に検出が困難で、各検出段階で、面的な広がりを窺わせる遺物の出土状況も確認できたが、明確な遺構としては検出できなかった。

縄文時代のものと思われるこれらの遺構は、それぞれ一定の規格性、方向性を持たず、相互関係、空間的特質などについては窺い得ない。但し、91年度調査区西端で確認できた集石については、出土レベル、付近の土層断面と照合の上、慎重な検討が必要と思われる。

以下に主要遺構について説明をするが、遺構番号は両年度にわたる通番ではなく、各年度毎に付けた。

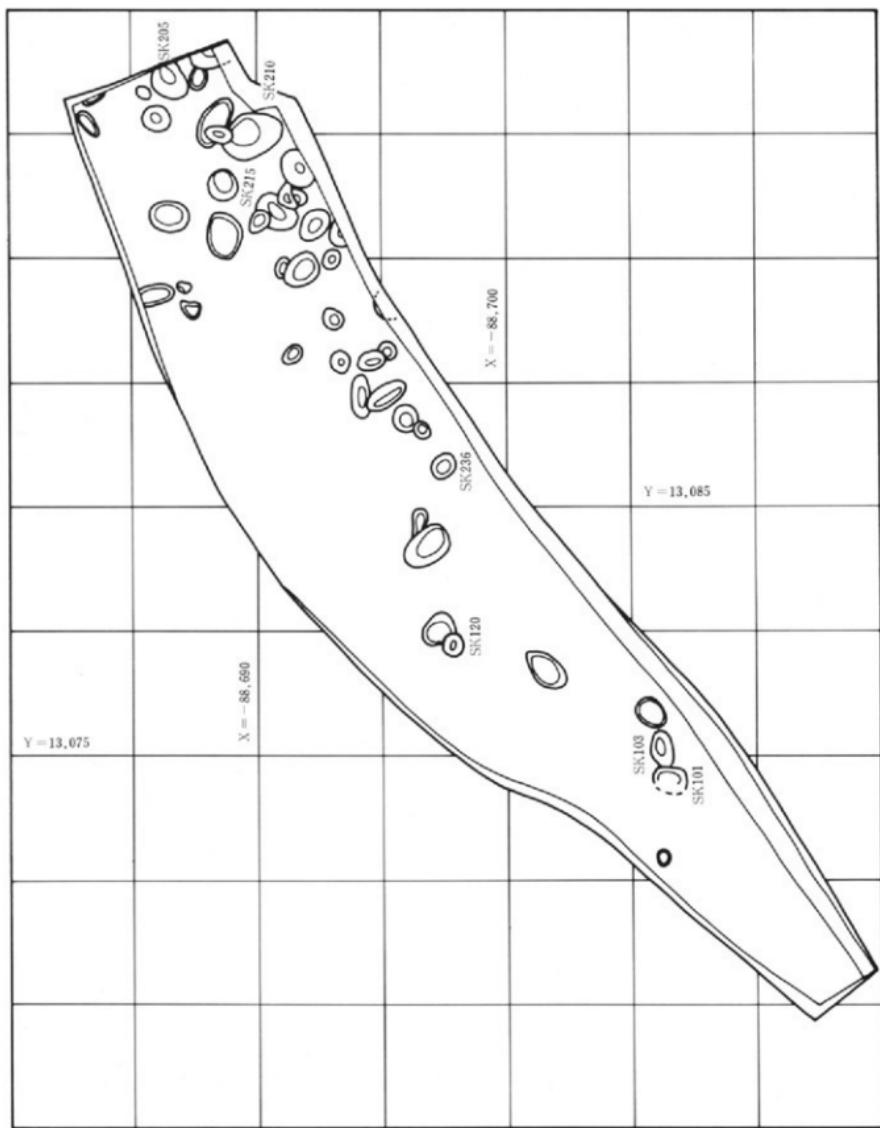


圖10 92年度調查區道路位置圖

## 91年度調査区

S K01 調査区北西隅に位置する。検出高は113.1mを測り、平面形態は楕円形を呈し、長径1.0m、短径0.6m、深さ0.25mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、縄文早期（茅山期併行）と思われる深鉢形土器の体部片が出土している。

S K07 調査区西側に位置する。検出高は113.2mを測り、平面形態は楕円形を呈し、長径0.6m、短径0.45m、深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、縄文早期と思われる繊維を多く含む土器片が出土している。

S K11 調査区西側北寄りに位置する。検出高は113.1mを測り、平面形態は不整円形を呈し、長径0.35m、短径0.32m、深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、縄文早期と思われる繊維を多く含む土器片が出土している。

S X02 調査区西側北寄りに位置する。検出高は113.1mを測り、平面形態は不整方形を呈し、長径2.8m、短径1.7m、深さ0.7mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、縄文早期と思われる深鉢形土器の口縁部片が3点出土している。

集石 調査区南西隅に位置する。検出高は113.6～114.3mを測り、平面構成からは特に規則性は窺えない。遺物包含層である黒褐色シルト層の上方から直上の高さに、径0.15～1.5mの河原石が集まっている。第11図A地点では、石圓い状に配石されている可能性も窺えるが、この地点も含めて全ての石は被熱を受けておらず、その性格は判定し得ない。

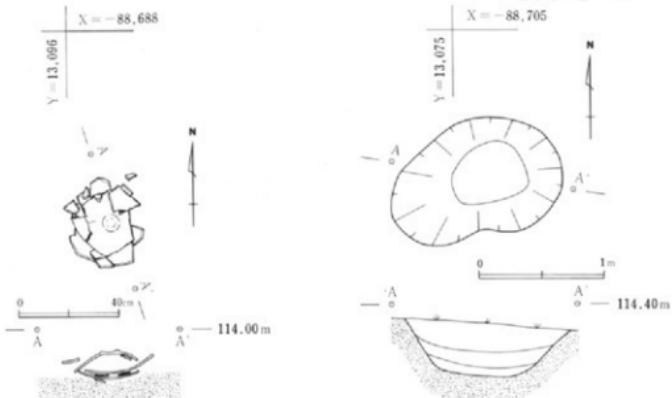
## 92年度調査区

S K120 調査区ほぼ中央に位置する。検出高は113.9mを測り、平面形態は不整円形を呈し、長径0.9m、短径0.8m、深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、縄文早期と思われる深鉢形土器の口縁部片が出土している。

S K205 調査区東端に位置する。検出高は113.3mを測り、平面形態は不整楕円形を呈するものと思われ、短径1.0m、深さ0.4mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、縄文早期と思われる深鉢形土器の口縁部片が出土している。

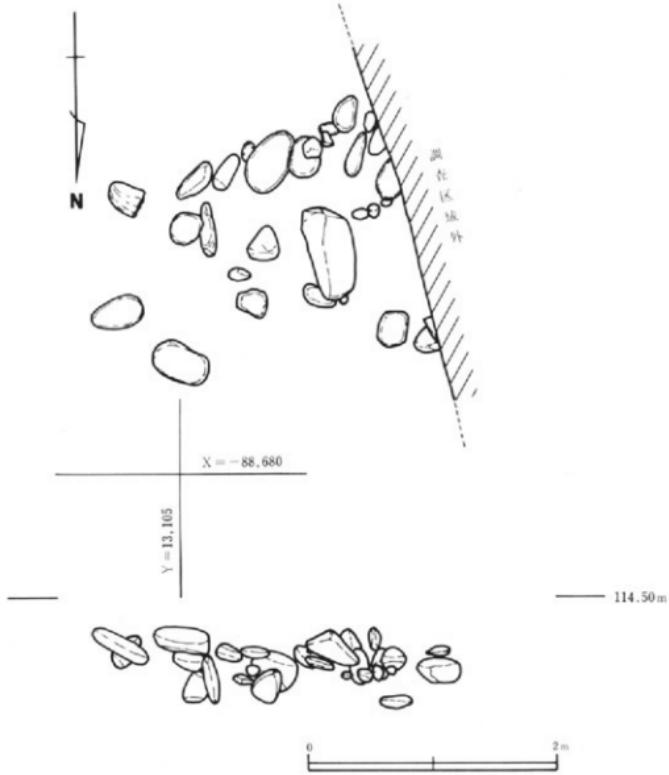
S K215 調査区東側南寄りに位置する。検出高は113.5mを測り、平面形態は楕円形を呈するものと思われ、長径1.8m、深さ0.45mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、縄文早期と思われる深鉢形土器の体部片が出土している。

S K236 調査区中央南寄りに位置する。検出高は113.8mを測り、平面形態は隅丸方形を呈し、長径1.05m、短径0.9m、深さ0.3mを測る。埋土は黒褐色砂質シルトを基調とし、縄文後～晩期のものと思われる深鉢形土器が出土している。



第11図 体形土器(305)出土状況平・断面図

第12図 SK103平・断面図



第13図 集石平・断面図

## 第Ⅴ章 遺物

### 1 土器・土製品

91・92年度両調査区共に、出土した土器は縄文時代のものに限られた。これらの土器の出土状態は、遺構に伴うものはほとんどみられず、面的なまとまりも僅かであり、一括性はほとんど認められなかった。厚く堆積した黒褐色砂質シルトの包含層は、基本層序の項でも述べたように肉眼での分層是不可能であり、任意に分層を行って取り上げた遺物も、時期に新旧逆転現象が認められるものもあった。遺物の遺存度も数点を除いて小片がほとんどであり、底部がほとんど出土しないなど部位による偏りもみられた。したがって調査地点が斜面であることも考慮すると、出土遺物は二次的な堆積の可能性が考えられる。器種は深鉢、鉢、注口土器、土偶などがみられた。時期は早期から晩期までの各時期のものが出土しているが、後期が主体をなすかと思われる。出土遺物には西日本・東日本それぞれに祖源が求められる土器がみられ、当該期における地理的環境、交流などを考える上で興味深い。

土器の器種分類は基本的には早～晩期の各時期を大枠で群として捉え、施文の種類によってそれを類別する方法を取った。以下に各群について説明を加える。

#### 第1群

縄文時代早期の様相が認められるものを、第1群とした。この群を施文を中心としてさらに5類に分けた。

##### 1-1類（5）

撚糸文が施されているもの。口唇部外側がやや肥厚し、その直下からやや傾きながら縱走する撚糸文が施されている。

##### 1-2類（1～4）

押型文が施されているもの。1は横方向の山形押型文で、波長は約12mmで鋭角ではなくやや崩れた山形である。2、3はポジティブな楔円形の押型文で、3の方が楔円形が大きい。4は格子目状の押型文が施されている。

##### 1-3類（6～28）

爪形文が施されているもの。6～8は口縁部に管状突起を持つもので、口唇部、突起、体部内外側に爪形文が施されている。口唇部が刺突などによって刻まれているものが多く、口縁部内側に爪形文がみられるものと施文されていないものとが認められる。

##### 1-4類（29～39）

条痕文が施されたもの。口唇部には貝または櫛状工具による刺突が施されているものが

多くみられる。46のように口縫部下方から体部にかけて僅かな段が認められるものもある。底部には37のような膨らみ底に条痕が施されているものと、僅かに窪んでいるものがみられる。

#### I - 5 類 (40~55)

条痕文が施された後、刺突（爪形文状のものも含む）が施されたもの。口唇部、口唇部外側、口唇部を面取りした部分に刺突が施されているものが多くみられる。

第Ⅰ群は3・4・5類が主体をなすと思われるが、これらの土器群は早期でも後半の茅山下層式または柏原式などと近接関係にあるものと思われる。

#### 第Ⅱ群

縄文時代前期的様相が認められるものを、第Ⅱ群とした。この群を施文を中心としてさらに2類に分けた。

##### Ⅱ-1 類 (77~83)

横位に羽状縄文が施され、その後に細い隆帯を貼り付け、ヘラ状工具による刻みを施していると思われるもの。80の外側屈曲部には、横方向に梯子段状の隆帯が貼り付けられている。

##### Ⅱ-2 類 (56~76)

半截竹管状の工具による施文が施されていると思われるもの。竹管文を施した後、押引をしているものが多く認められる。61は口縫部を「く」の字状に折り返した後、内側断面の鋭角的な部分に粘土を詰めて補強がなされており、面取りされた口唇部の外側には、赤彩が施されている。63には口縫部に孔列文が穿たれている。

第Ⅱ群は1類・2類がそれぞれ、前期中葉～後葉にかけての北白川下層式及び諸磯式などと近接関係にあるものと思われる。

#### 第Ⅲ群

縄文時代中期的様相が認められるものを、第Ⅲ群とした。この群を施文を中心としてさらに3類に分けたが、この範囲には入らないものもみうけられる。

##### Ⅲ-1 類 (88~95)

縦方向の沈線・磨消滑などが施されていると思われるもの。

##### Ⅲ-2 類 (96~101)

燃糸文が施されているもの。地文に燃糸文が施されたのも、半截竹管状の工具によって施文が行われているものが多く認められる。96はキャリバー形の口縫を持ち、外側口縫部下に波状文が施されている。98は深鉢の体部片と思われるが、外側に細かいジグザク文が施されている。101は口唇部まで燃糸文が施されている。

## III-3類 (102~111)

隆帯及び沈線で施文が行われている、いわゆる「唐草文系土器」。粘土組を貼り付けて区画しているものが多く認められる。103は棒状工具による施文ではないかと思われる。105は粘土組を貼り付けた後、隆帯にする処理がやや難である。

## III-その他

112~115は軸になる沈線を中心として、枝状（羽状）に施文が行われている。117は口唇部内外側及び、外側くびれ部下方に隆起線を持ち、これに刻み目が付けられている。121は深鉢の口縁部突起片で、押引状の施文が行われている。

第3群は類別したものが主体をなすものと思われ、1・2・3類は中期後半の一級階に位置するものと考えられるが、1・2類はそれぞれ加曾利E式、里木式と近接関係にあるものと思われる。しかし類別外のものの中には、中期前半の船元式、北屋敷式と近接関係にあるもの（117・121）もみられる。

## 第IV群

繩文時代後期の様相が認められるものを、第IV群とした。この群を施文を中心としてさらに4類に分けた。

## IV-1類 (124~140)

無文と思われるもの。精製で丁寧な磨きが施されているものが多く認められる。

## IV-2類 (142~272)

口縁部外側下方に、水平か口縁部と平行して沈線が施されるもの。これらはさらに4型に分かれる。

## IV-2-a型 (142~167)

沈線のみ施すもの。口縁部の断面形は「く」の字状を呈するもの、ゆるやかに内側するもの、玉縁状のものなどが認められる。

## IV-2-b型 (168~171)

沈線直下に刻み目または刺突を施すもの。

## IV-2-c型 (172~187)

沈線直下に擬繩文を施すもの。擬繩文の原体には巻貝を使用した可能性のあるものも認められる。

## IV-2-d型 (188~272)

繩文を施し、口縁に平行または水平に沈線を施したもの。口縁部は波状を成すもの、突起を持つものなどが多く認められる。沈線によって無文帯と施文帯が区画されているものが多く、無文帯は地文を施し沈線で区画した後、磨消されている場合が多い。191の口唇部における圧痕部には繩文が施されている。211のように半截竹管状の工具による施文も認められる。255は突起部の欠損した波状口縁部片であるが、口縁部外側には面取りが成さ

れており、そこに棒状工具による刺突が施されている。

N-3類 (273~275)

縦帶文が施されているもの。

N-4類 (277~284)

注口土器。注口は軸長5~10cmを測り、外側には丁寧なミガキ調整が施されているものが多く認められる。

N-その他 (285)

土偶の足の可能性を持つ土製品で、1点のみ出土している。

第Ⅵ群は2類が主体を成すものと思われる。縄文時代後期中葉の加曾利B式と近接関係にあるものが多いものと思われるが、その先行段階である堀之内式と近接関係にある可能性を有するもの（188~191）もいくつか認められる。

#### 第Ⅴ群

縄文時代晩期的様相が認められるものを、第Ⅴ群とした。この群を施文を中心としてさらに3類に分けたが、この範疇に入らないものもみうけられる。

V-1類 (292・293・295・297~299・301~305)

無文と思われるもの。305は全体的に粗製で、体部を見てなでた可能性が認められ、底部にはへこみをつけている。

V-2類 (308~312)

半截竹管状工具を使用して施文を行っているもの。308~310・312には半截竹管状工具を用いて押引が施されている。311にはこの工具の先端を加工したもので押引が施されている。

V-3類 (286~291)

条痕を施しているもの。口縦部片が多いが口唇部に刺突や刺み目が施されているものが多く、外側口縦部下には横方向に条痕が施されている。287は条痕を施した後、口縦部下に沈線が施されている。

V-その他

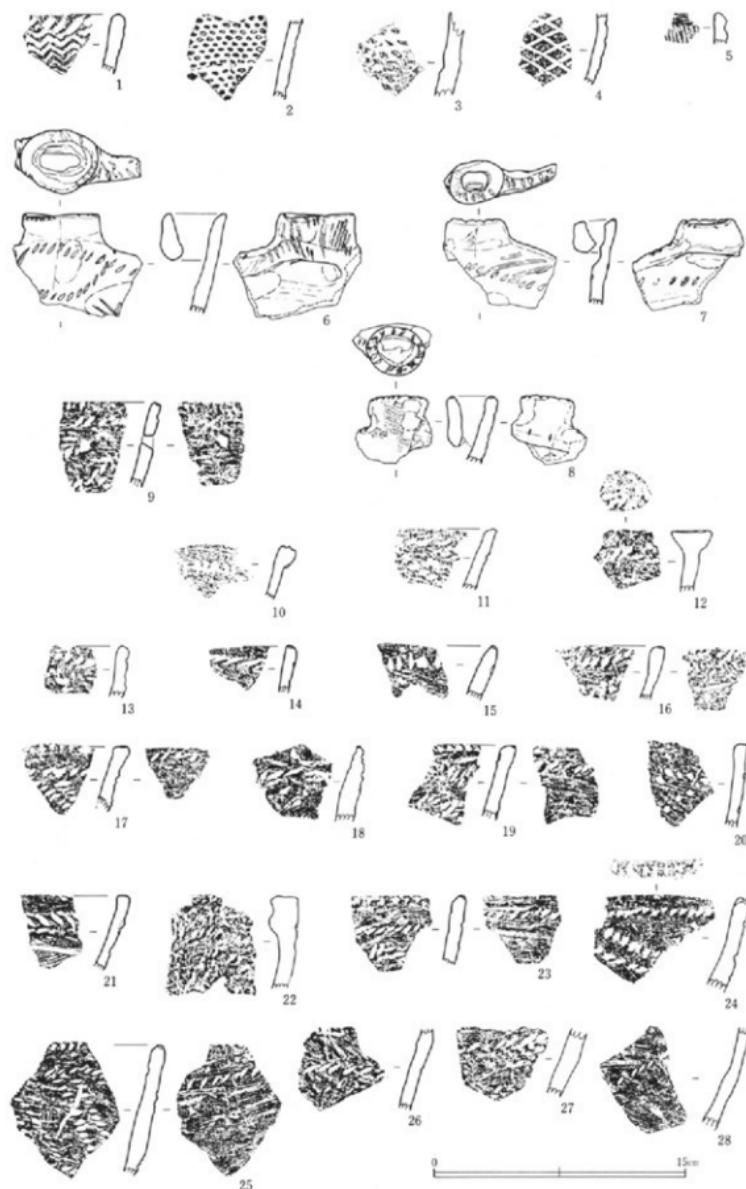
307は口縦部の断面形態が「く」の字状を呈し、球形の体部を持つ浅鉢で体部外面には凹線によるモティーフが施されている。大洞C式と近接関係にあるものと思われる。

第Ⅴ群は縄文晩期前半の元刈谷式と近接関係にあるものが主体を成すと思われる。

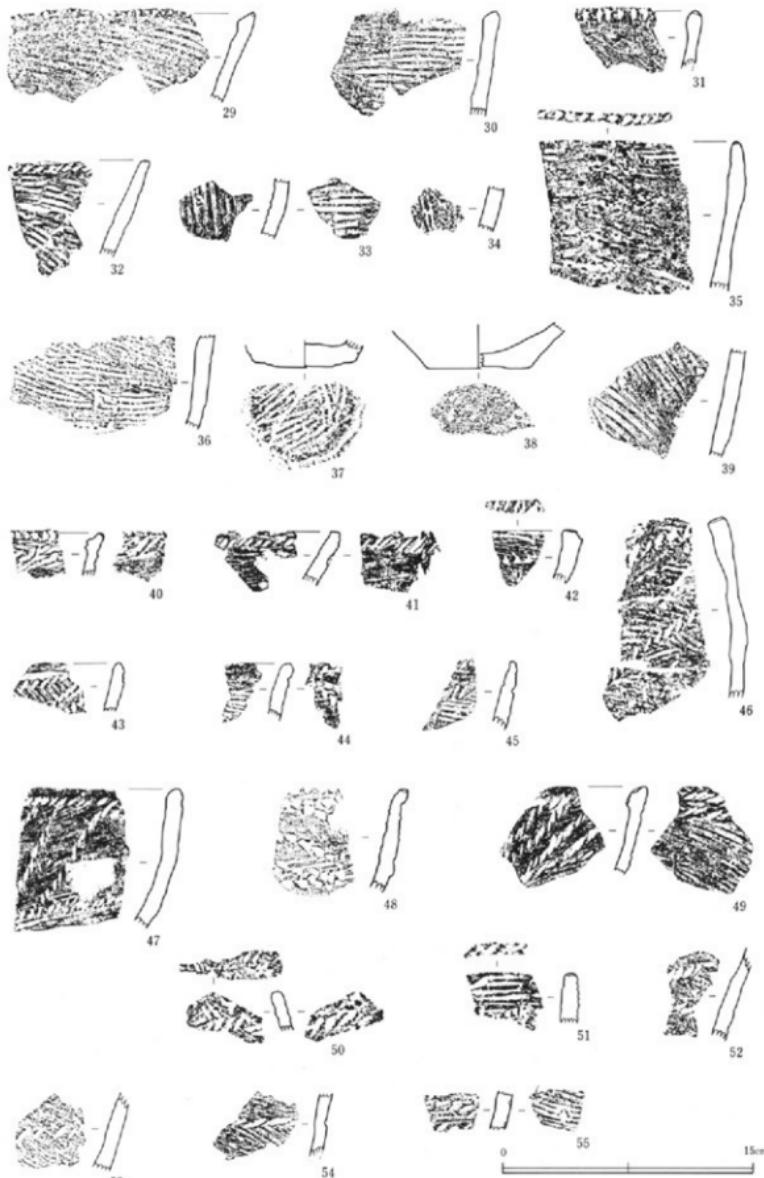
#### 参考文献

芹沢長介・坪井清足他 1982 『縄文土器大成』 1

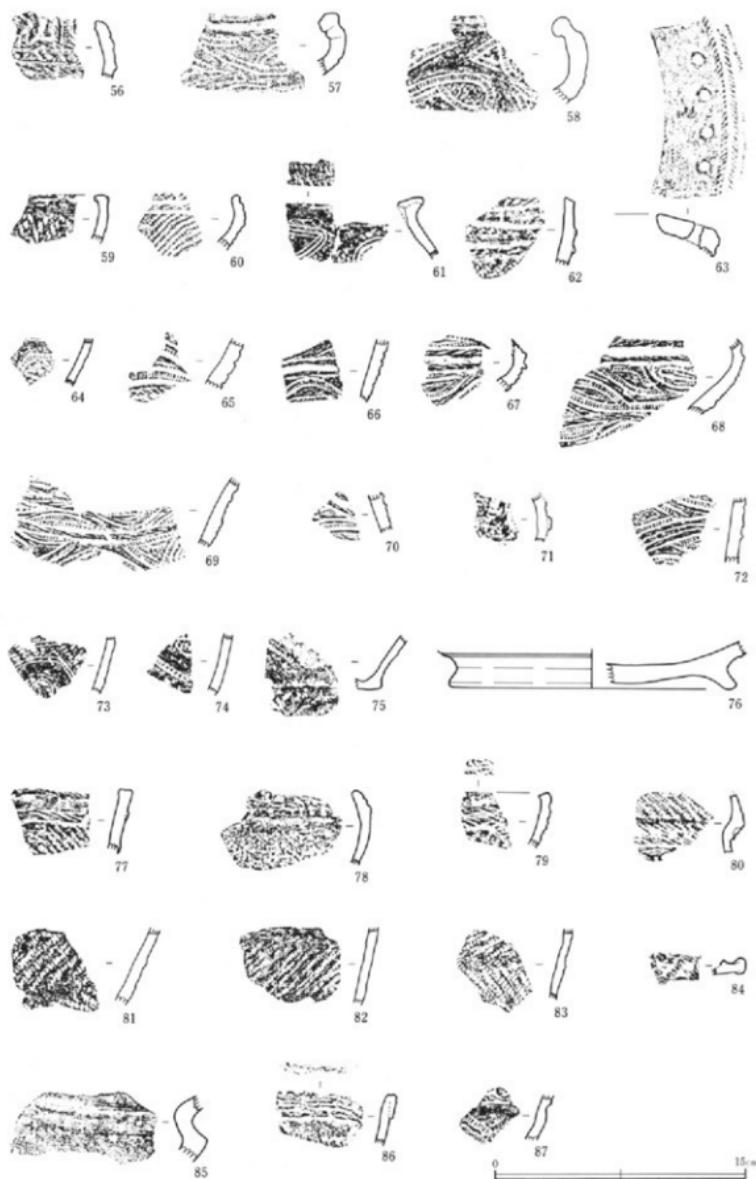
〃 1981 『 〃 』 2~4



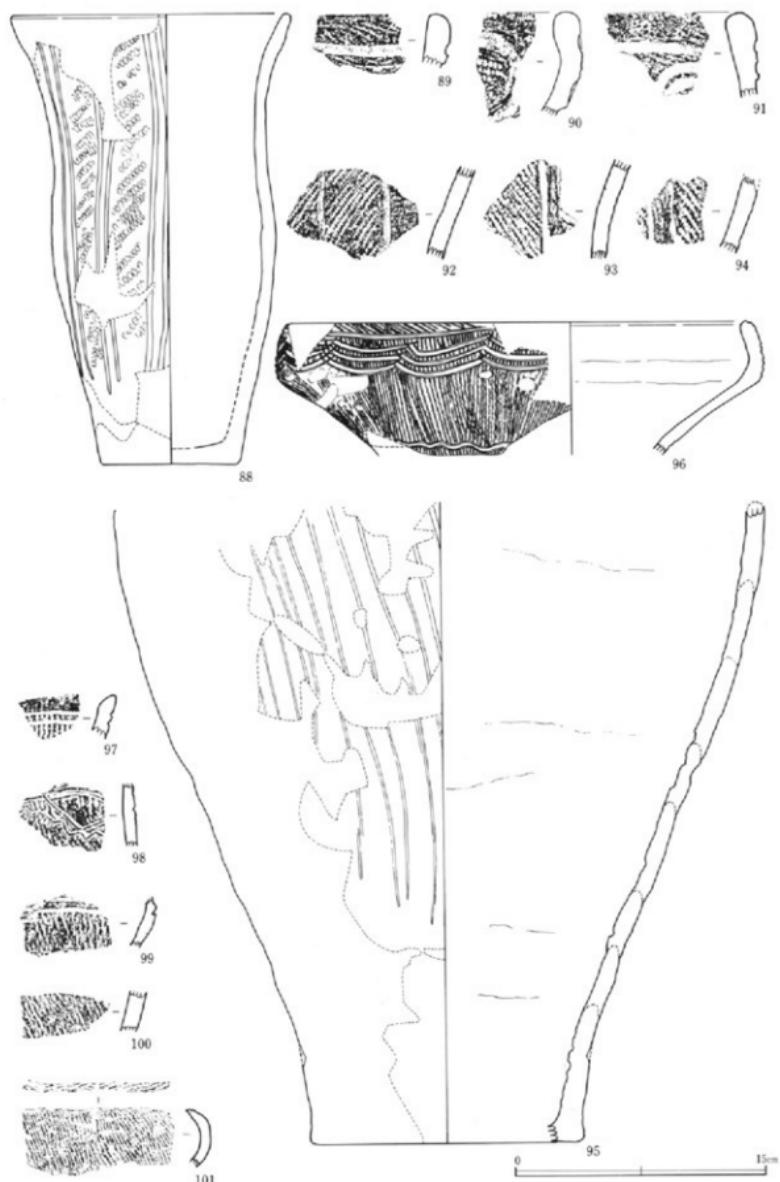
第14図 土器実測図①



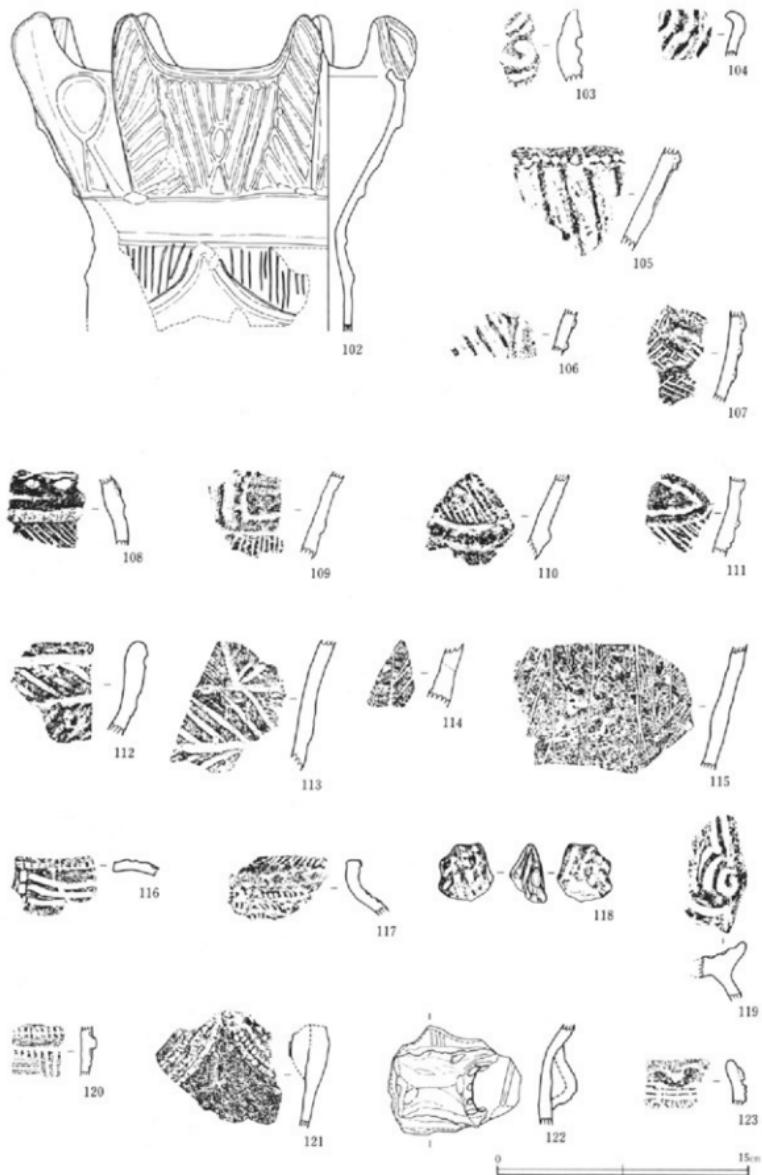
第15圖 土器実測図②



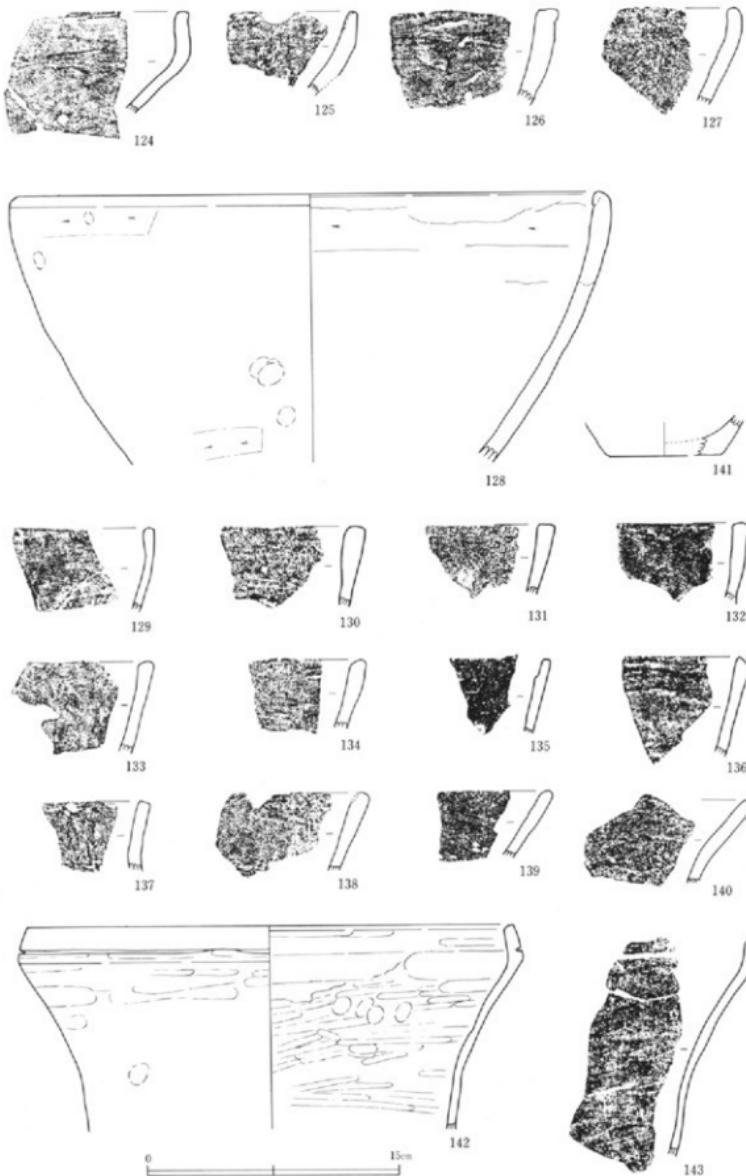
第16図 土器実測図③



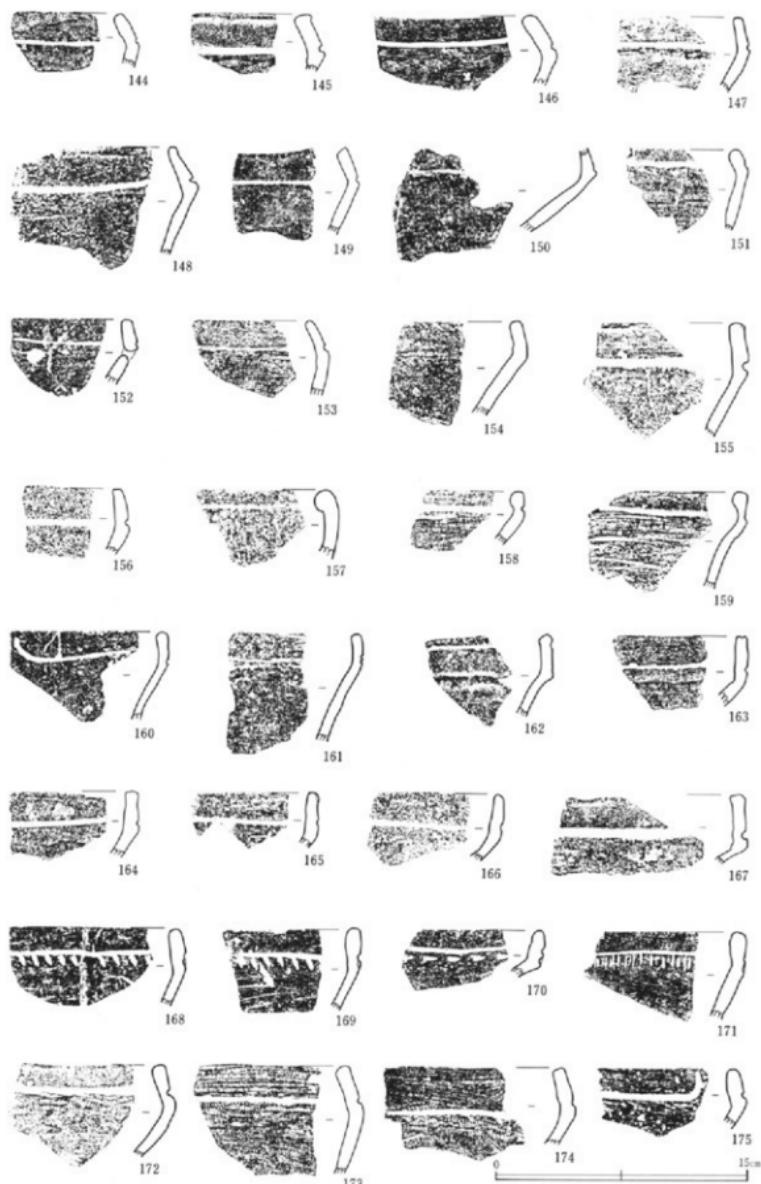
第17図 土器実測図④



第18図 土器実測図⑤



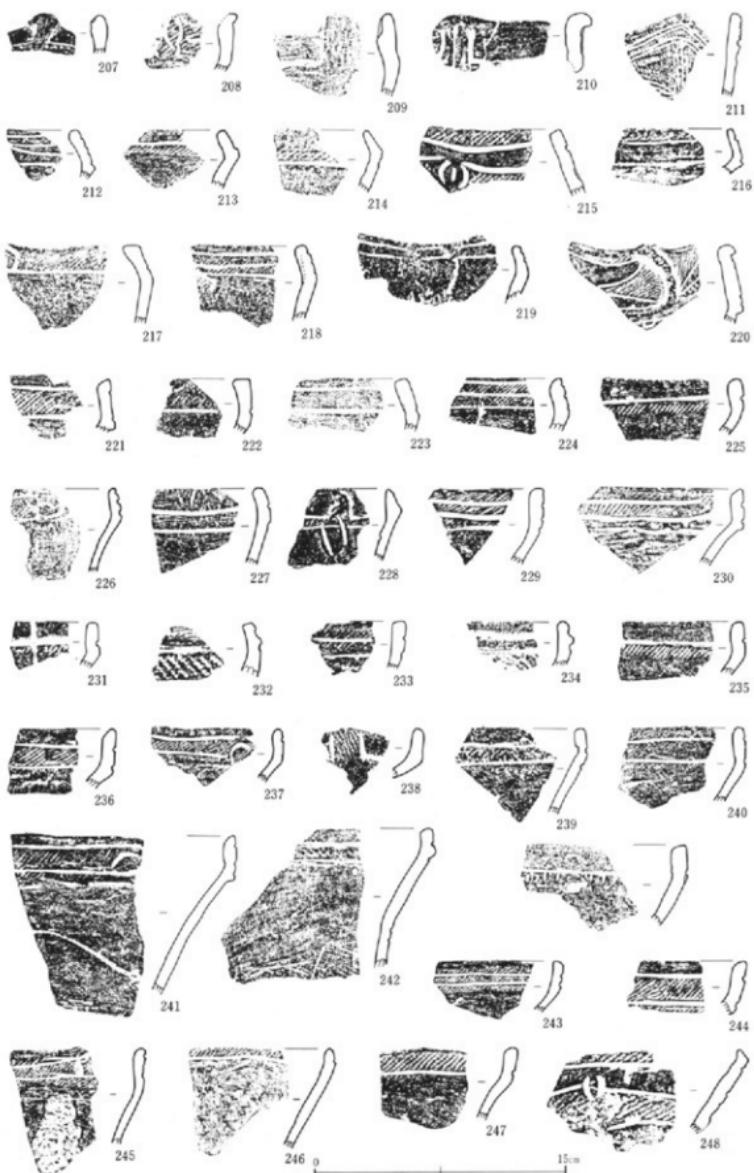
第19図 土器実測図⑥



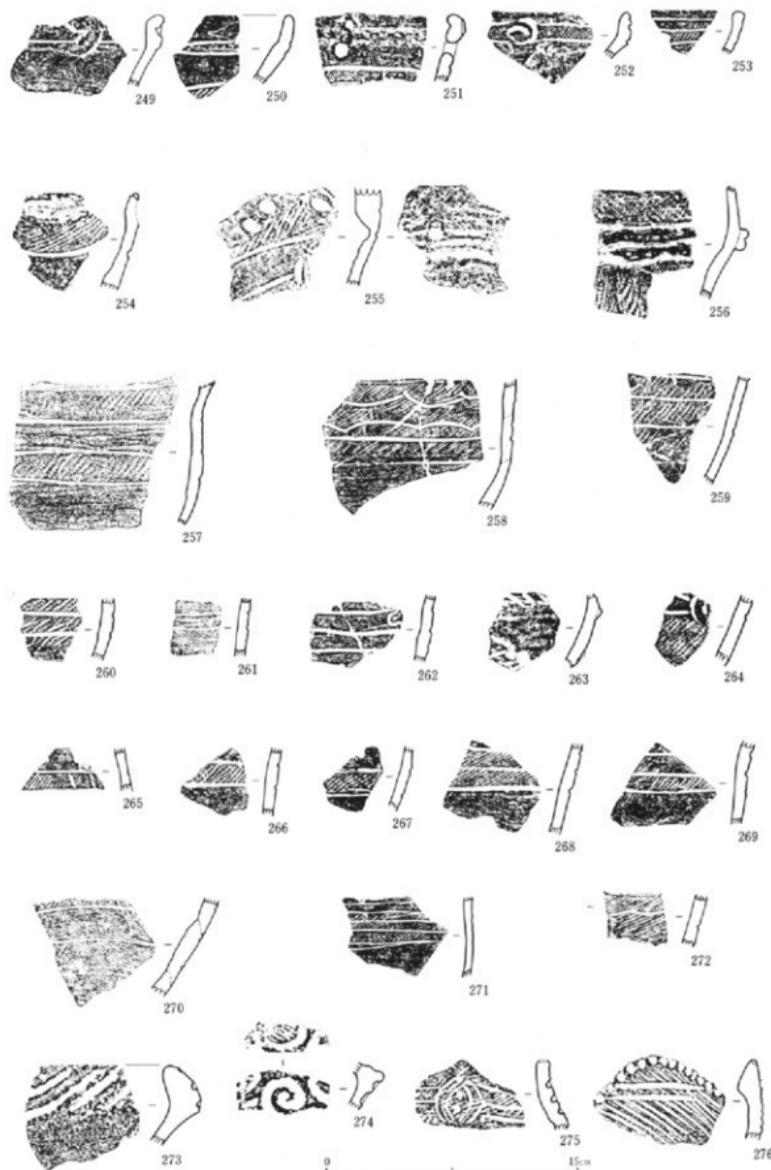
第20図 土器実測図⑦



第21圖 土器実測図⑧



第22图 土器実測図③



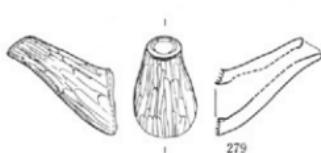
第23図 土器実測図②



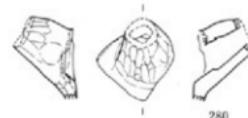
277



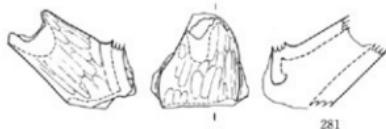
278



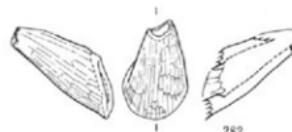
279



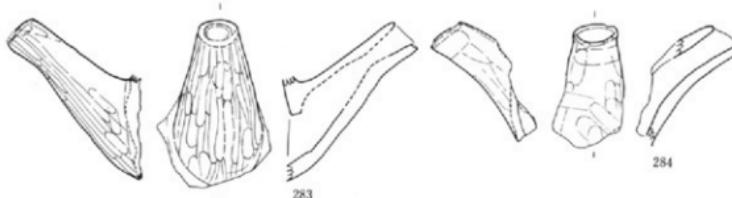
280



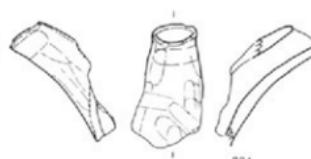
281



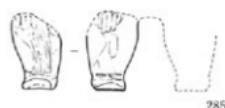
282



283



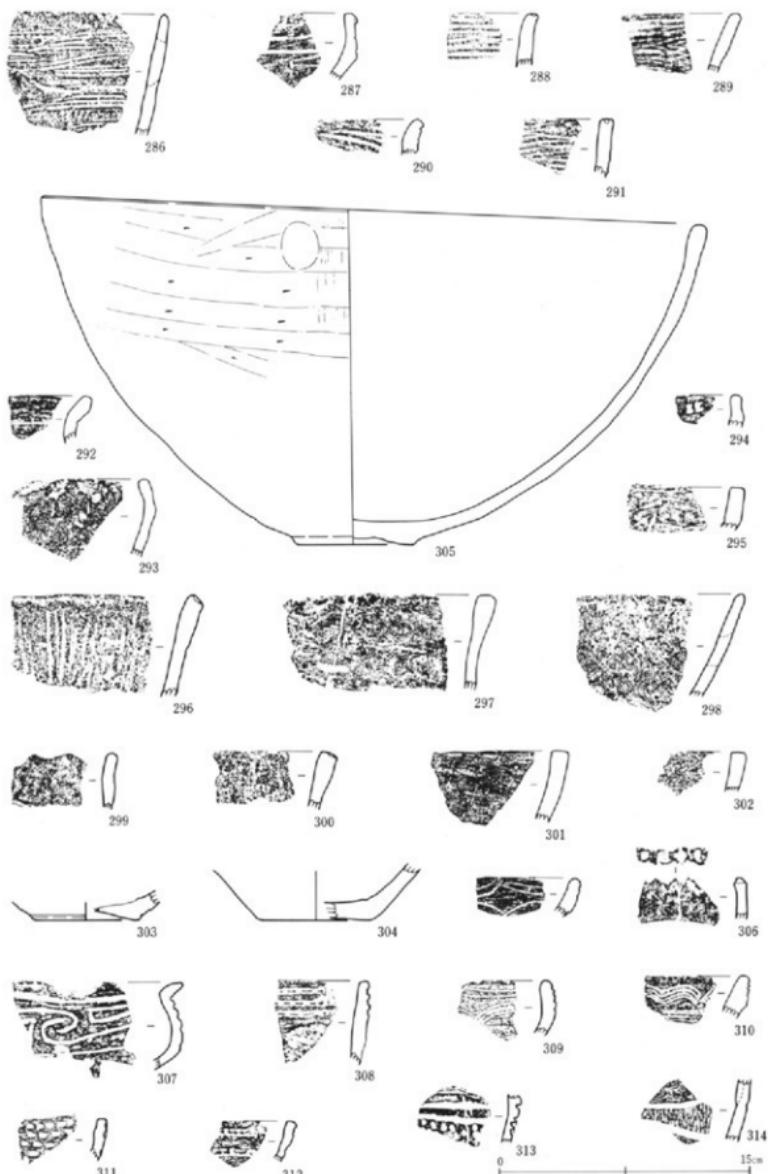
284



285



第24図 土器実測図⑪・土製品実測図



第25図 土器実測図⑧

## 2 石 器

坂口遺跡から出土した石器は、土器の出土量に比べると相対的に少なく、出土地点も調査区全体に散在して分布する。器種としては打製石斧、磨製石斧、スクレーパー、石錐、石鏟、石匙、石刀などがみられた。

これらの石質については、ガラス質石英安山岩、安山岩、黒曜石、チャート、片岩、結晶片岩、塩基性凝灰岩、溶結凝灰岩、流紋岩質溶結凝灰岩、変成岩などがみられた。なお石質については、本センターの橋真美子が鑑定を行った。

1001～1014は打製石斧である。形態的には短冊形と撥形とに分けられ、分銅形はみられない。形態が判別可能な14点の内では、短冊形が9点、撥形と思われるものが3点を占める。1001～1009・1011・1012は短冊形打製石斧である。石質は1001・1007の片岩以外は全て安山岩で占められる。大きさは長さ8～13cm、幅3～5cm、厚さ1～2cm、重さは25～150gを測る。側面観は縱断面が蒲鉾状を呈し、側縁部が直線状を成すものが多く、反り身のものはほとんどみられない。刃部に摩耗痕がみられるものも少ない。1010・1013・1014は撥形打製石斧である。

1017・1018は磨製石斧の頭部片で、いずれも刃部は欠損している。形態的には稜がつくれられるほどの極端な側縁部の研磨は認められず、断面形態が梢円形を呈する乳棒状磨製石斧である。石質は塩基性凝灰岩である。

1028～1051は石錐である。形態的には有茎石錐と無茎石錐に大別できるが、基部は有茎石錐が凹・平・凸基に、無茎石錐が平・凹基にさらに分かれる。石質はガラス質石英安山岩とチャートで大半が占められ、黒曜石製は僅か2点である。

1019～1024はスクレーパーである。石質はチャートが半数以上を占め、安山岩、溶結凝灰岩製も認められる。使用痕のある剝片と思われるものは掲載しなかったが、30点ほど出土している。

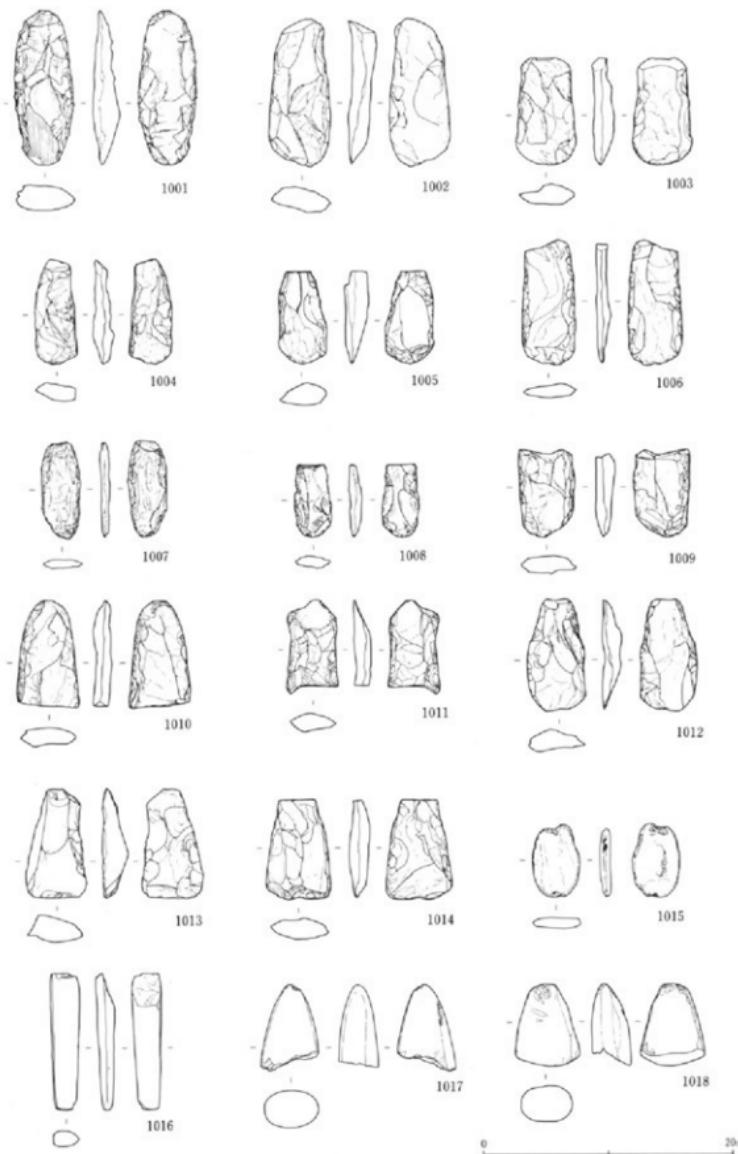
1015は疊石錐で1点のみ出土しており、偏平な河原石の長軸部を打ち欠いている。打ち欠き部の幅は上部が14mm、下部が12mm、打ち欠き間の最短距離は54mmを測る。石質は変成岩である。

1016は石刀で1点のみ出土している。頭部は欠損しており残存部から内反りの状況は判断し得ない。石質は塩基性凝灰岩である。

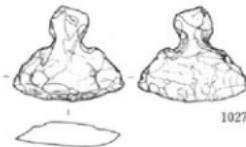
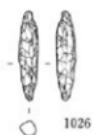
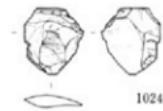
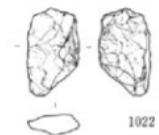
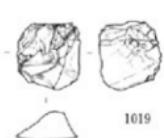
1025・1026は石錐である。断面形態は三角形に近く、つまみ状の頭部は持たず細身棒状である。石質はいづれもガラス質石英安山岩である。

1027は石匙で1点のみ出土している。形態としては横型で、つまみの位置はほぼ中央である。石質は流紋岩質溶結凝灰岩である。

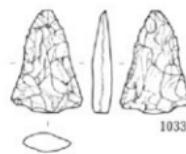
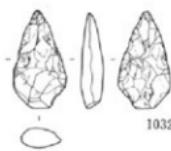
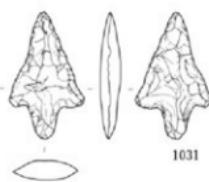
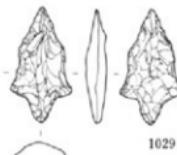
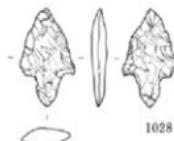
本遺跡出土の石器は、推定できる土器の時期から考えると、縄文時代早期から晩期に至るまでの長い時間幅に亘る。しかし、土器、石器とともに遺構からの伴出例が少ないため、時期の判定は困難となっている。



第26図 石器実測図①

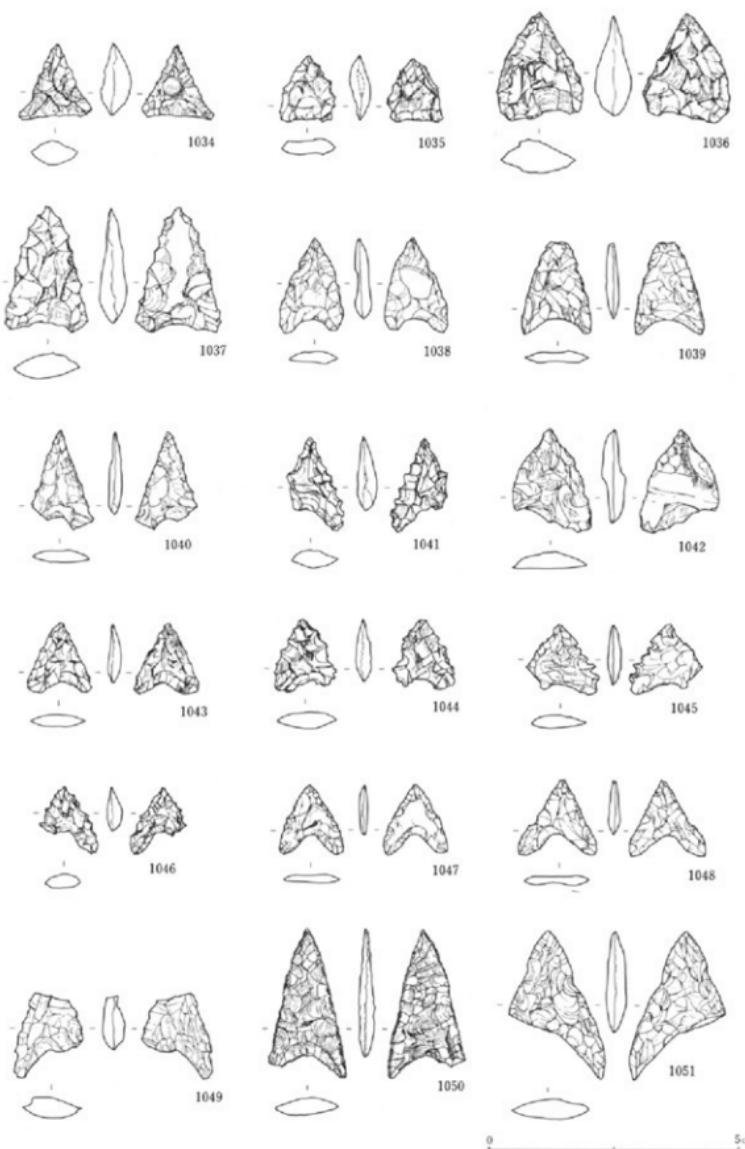


0 10cm



0 5cm

第27図 石器実測図②



第28図 石器実測図③

# 第VI章 自然科学的分析

## 植物珪酸体分析

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物体内で形成されたガラス質の細胞であり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体（プラント・オパール）分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定、および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、1987）。

本調査は、同分析を用いて坂口遺跡における古植生・古環境の推定を試みたものである。

### 2. 試料

試料は、西三河山間部に位置する坂口遺跡において、始良田火山灰（AT）起源と思われる地層上に堆積する縄文時代の土層を対象に採取された。試料数は計5点である。

### 3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料の絶乾（105°C・24時間）
- (2) 試料約1 g を秤量、ガラスピース添加（直径約40 μm、約0.02 g）  
※電子分析天秤により1万分の1 g の精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（300W・42kHz・10分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20 μm以下）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1 gあたりのガラスピース個数に、計数された植物珪酸体とガラスピース個数の比率をかけて、試料1 g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}$  g）をかけて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。換算計数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、ウクサ族はススキの値を用いた。その値はそれぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、1.24である（杉山・藤原、1987）。タケ亜科については数種の平均値を用いて葉身重を算出した。ネザサ節の値は0.24、クマザサ属

は0.22である（杉山，1987）。

#### 4. 結果および考察

縄文時代前期の遺物包含層（試料4、5）、縄文時代早期の遺物包含層（試料2、3）、およびその下位層（試料1）について分析を行った。その結果、いずれの試料からもタケ亜科Alaタイプ（ネザサ節など）およびその他のタケ亜科が大量に検出された（図29・30）。その他の分類群では、タケ亜科B1タイプ（タマザサ属など）や同B2タイプ（メダケ節など）、不明Bタイプ（ウシクサ族類似）、株状柱酸体などが見られたが、いずれも少量である。

これらの結果から、縄文時代早期～前期はネザサ節などのタケ亜科植物が多く生育するイネ科植生が継続されたものと推定される。

なお、縄文時代前期の遺物包含層上部（試料5）からはイネが検出されたが、直上に擾乱層が認められることや、古墳時代以前にはほとんど検出例のないマダケ層が検出されていることから、上層から後代の植物柱酸体が混入した可能性が考えられる。

#### 5. 遺跡周辺の古環境

以上のように、坂口遺跡の縄文時代早期～前期の土層では、ネザサ節などのタケ亜科植物が多く生育するイネ科植生が継続されたものと考えられ、それ以外のイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったものと推定される。

ネザサ節などのタケ亜科植物は比較的乾いた土壤条件を好むことから、当時は比較的乾いた土壤条件で推移したものと推定される。また、ネザサ節は森林の林床では生育しにくいくことから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく、比較的開かれた環境であったものと推定される。

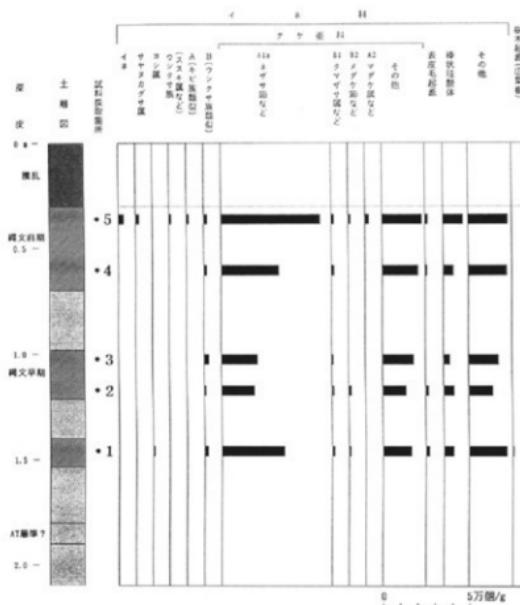
なお、ネザサ節などのタケ亜科植物はその有用性から燃料や道具、住居の屋根材や建築材などとして盛んに利用されていたものと考えられ、また鹿などの草食動物の食料としても重要であったものと考えられる。

#### 参考文献

- 杉山真二、1987. 遺跡調査におけるプラント・オパール分布の現状と問題点、植生史研究、第2号：27-37.
- 杉山真二、1987. タケ亜科植物の機動細胞柱酸体、富士竹類植物園報告、第31号：70-83.
- 杉山真二・藤原宏志、1987. 川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析、赤山一古環境編一、川口市遺跡調査会報告、第10集、281-298.
- 藤原宏志、1976. プラント・オパール分析法の基礎的研究(I)－数種イネ科栽培植物の柱酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9:15-29.
- 藤原宏志、1979. プラント・オパール分析法の基礎的研究(II)－福岡、板付遺跡（夜白式）水田および郡馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ (*O. sativa* L.) 生産総量の推定－、考古学と自然科学、12:29-41.

分類群	坂口遺跡					（単位：ha./ml·cm）				
	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
イネ科										
イネ	36									
サヤシカグサ属	21									
ヨシ属					6					
ウシクサ属(33属など)	7									
不明サバ(キビ草類など)	7									
不明サバ(ウツボ草類など)	21	13	29	7	19					
タケモ科										
A1サバ(ネザサ属など)	597	342	213	202	363					
B1サバ(カマザ属など)	7	13	7	13	13					
B2サバ(アダケ属など)	7				13	6				
A2サバ(マダケ属など)	14									
その他	242	206	183	144	166					
表皮毛起原	14	6		13	19					
棒状丘體	121	64	44	65	57					
その他	235	226	176	144	217					
樹木起源(広葉樹)					6					
植物種類別総数	1329	871	653	600	873					

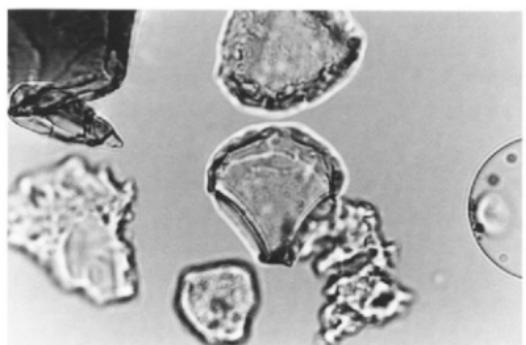
第3表 植物珪酸体分析結果



第5表 坂口遺跡(IIAS92)南壁セクションにおける植物珪酸体分析結果

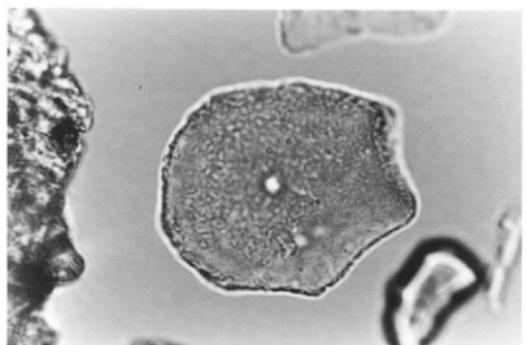
No.1 (試料番号5)

サヤヌカグサ属 (アシカキ)



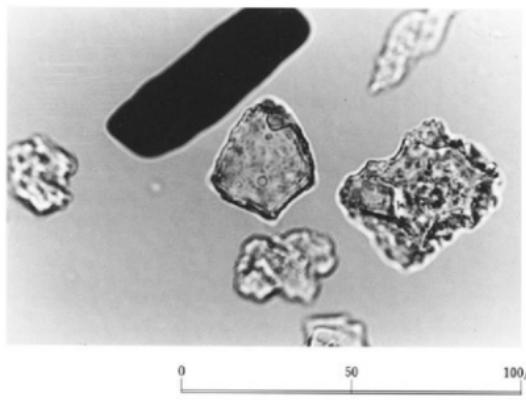
No.2 (試料番号1)

ヨシ属



No.3 (試料番号3)

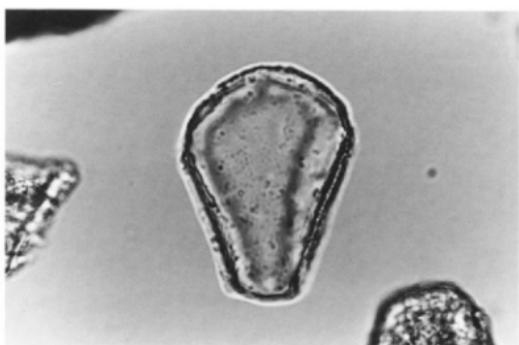
タケ亞科B1タイプ (クマザサ属)



第29図 試料顕微鏡写真①

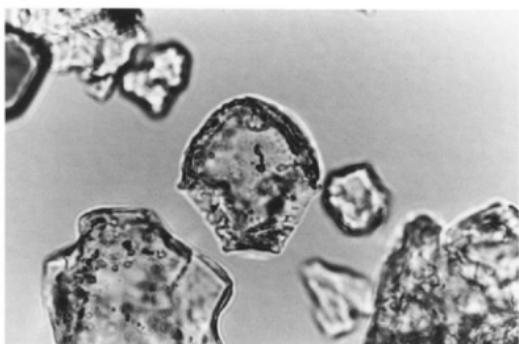
No.4 (試料番号1)

タケ亜科B2タイプ(メタケ属など)



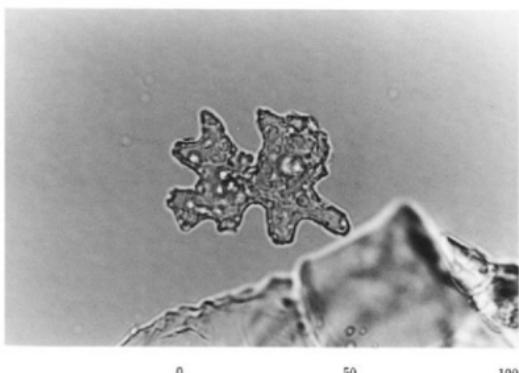
No.5 (試料番号5)

タケ亜科A2タイプ(マダケ属など)



No.6 (試料番号1)

樹木起源(広葉樹起源)



0 50 100  $\mu\text{m}$

第30図 試料顕微鏡写真②

## 第Ⅳ章 まとめ

本遺跡では調査の結果、遺物の一括性はあまり認められなかつたものの、縄文時代の人々の足跡が印されていることが判つた。ここに今回の発掘調査の意義、問題点について簡単に触れておく。

本遺跡の周辺地域で確認されている遺跡の大半は、坂口遺跡の例のみならず、分布調査などによる表面採集資料の確認のみであり、遺構など遺跡の実体が確認できているものはほんの数例である。

本遺跡の調査区は、愛知県遺跡分布地図に記載されている「坂口遺跡」(遺跡番号69022)の範囲における北西端にあたる。今回の調査で、縄文時代の遺構、遺物は調査区の東側においてより密に分布する状況が認められた。

91・92年度調査区は、結果的に矢作川に向かう南北方向の浅い谷を北東から南西に掘り下げたことになった。谷の中心軸は遺物包含層がより厚く堆積している91年度調査区中に求められそうであるが、この中から出土した遺物にはいくつかの点で片寄った状況が窺える。出土土器には口縁部、体部などの部位はみられるが、底部が極端に少なく、土器の出土量に比べて石器の出土量が少ないなどの点がそれらの状況である。さらに、住居跡状の掘り込みなど居住空間を思わせる遺構や、遺物は未検出のままに留った。旧地形、出土遺物の構成及び出土状況、検出遺構などの点から考えると、調査区の設定地点は居住空間とは考えにくく、出土遺物についても二次的な堆積の可能性が考えられる。したがって遺跡の中心は、旧地形の谷筋をさらに登った方向に求められよう。

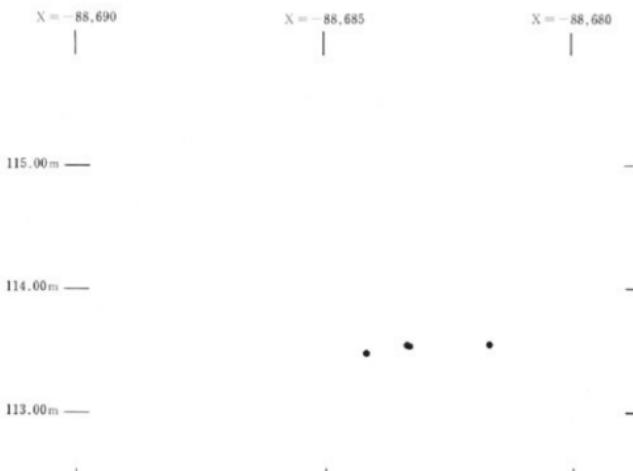
坂口遺跡における時間軸上の位置確認を出土土器片に求めると、縄文時代早～晩期までの各時期のものが認められる。その遺物を時期別に垂直分布図として図示したのが第31～35図である。これらの図は旧地形の変化が少ない91年度調査区を、南北座標軸の西側調査区外から東方向に向かって見通したものである。したがって図の中では、左側が南（山側）、右側が北（矢作川側）方向となる。但し、旧地形の変化が少ないとあっても緩やかな谷であるため、東西方向に見通した場合、南北軸に対して均一な堆積とはなり得ない。第Ⅲ群（中期）の分布が第Ⅱ群（前期）と比較して低い位置に分布するかのように見えるのは、出土地点が谷の中心近くに集まっていたためと思われる。

出土した石器については遺構内からの土器伴出がないため、時期を決定することができなかつた。したがって時期別ではなく、91年度調査区全体の出土石器を垂直分布図にしたのが第36図である。垂直分布状況のみから判断すると3グループに分かれそうであるが、標高114.5m前後の一群（1012・1026・1029・1030・1051）は土器の垂直分布とは全く重ならないため、後世の擾乱によるものかもしれない。出土地点はいずれも91年度調査区の南東側で、この調査区内の旧地形がやや高まる部分である。

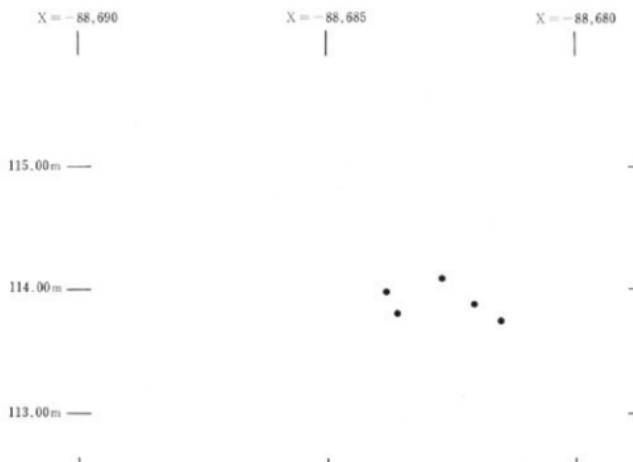
91・92年度両調査区の出土石器平面分布を求めたものが、第37図である。出土地点の密度としては、91年度調査区の方がやや多いが、両調査区全体に散在しており器種別の片寄りも認められなかった。

出土土器については全体を各時期ごとに群として捉え、それぞれの時期の中で前後関係を考えるに留めたが、早期から晩期まで数千年の間の継続関係は判じ得なかった。しかし、早～晩期という長期において掲載したような出土遺物が認められる以上、遺跡の中心が存在したであろう場所は、狩猟・採集生活を営んだ縄文人にとって生活条件の整った場所であったはずである。本遺跡の所在する矢作川に近い緩やかな斜面の広がりは、植物珪酸体の分析結果からネザサ節などのタケ亜科植物が生育する、開かれた（森林で覆われていない）比較的乾いた土壤条件の土地であったと推定されている。タケ亜科植物は燃料や道具、屋根材、建築材、草食動物の食料として有用とされる。こうした自然環境と、時間幅の広い遺物の出土は無関係ではないであろう。

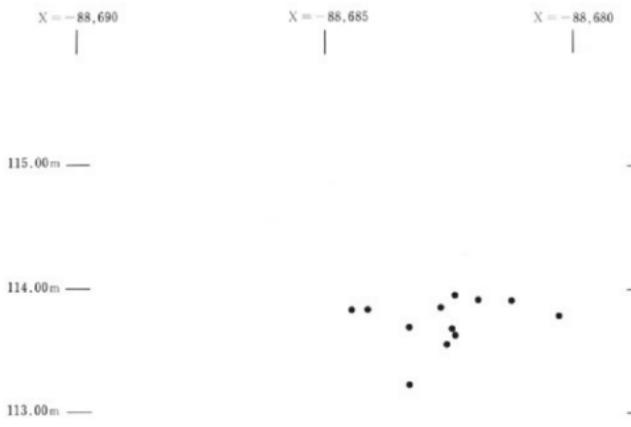
本遺跡の調査により確認できた遺構、遺物は、当地域の縄文時代の人々の足跡を考えるとき、有効な資料となるであろう。さらに検出された各時期の遺物は幅広い時間幅に収まるが、当該期における様相が未解明であるこの地域にあっては、こうした資料の増加がさらに望まれるところである。



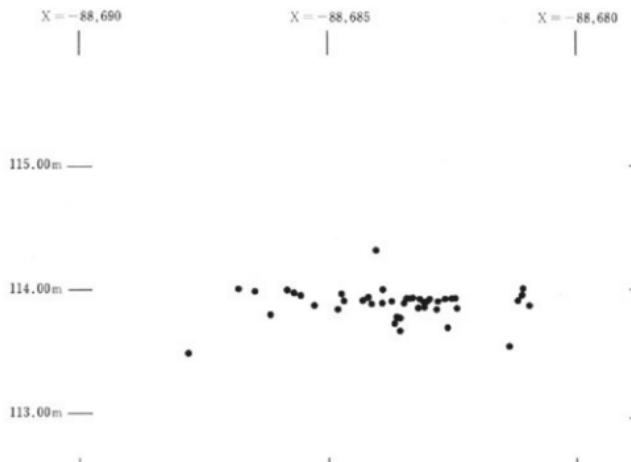
第31図 II AS91第I群土器垂直分布図



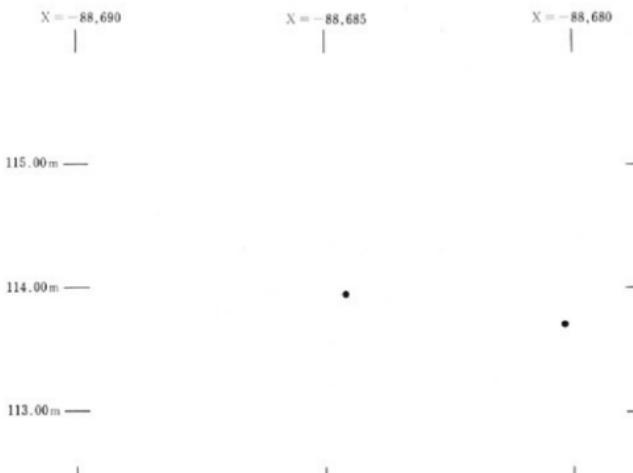
第32図 II AS91第II群土器垂直分布図



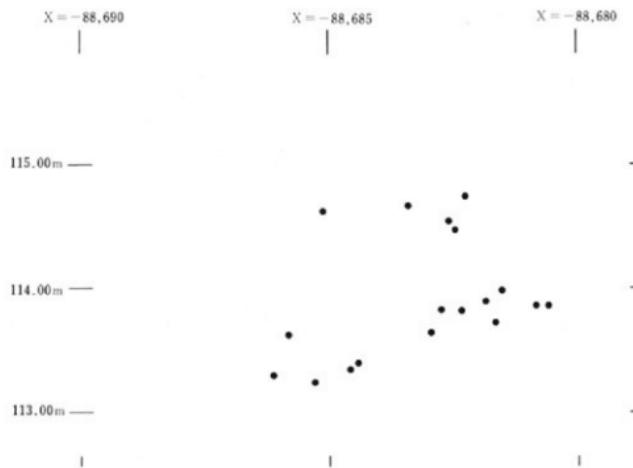
第33図 ⅡAS91第Ⅱ群土器垂直分布図



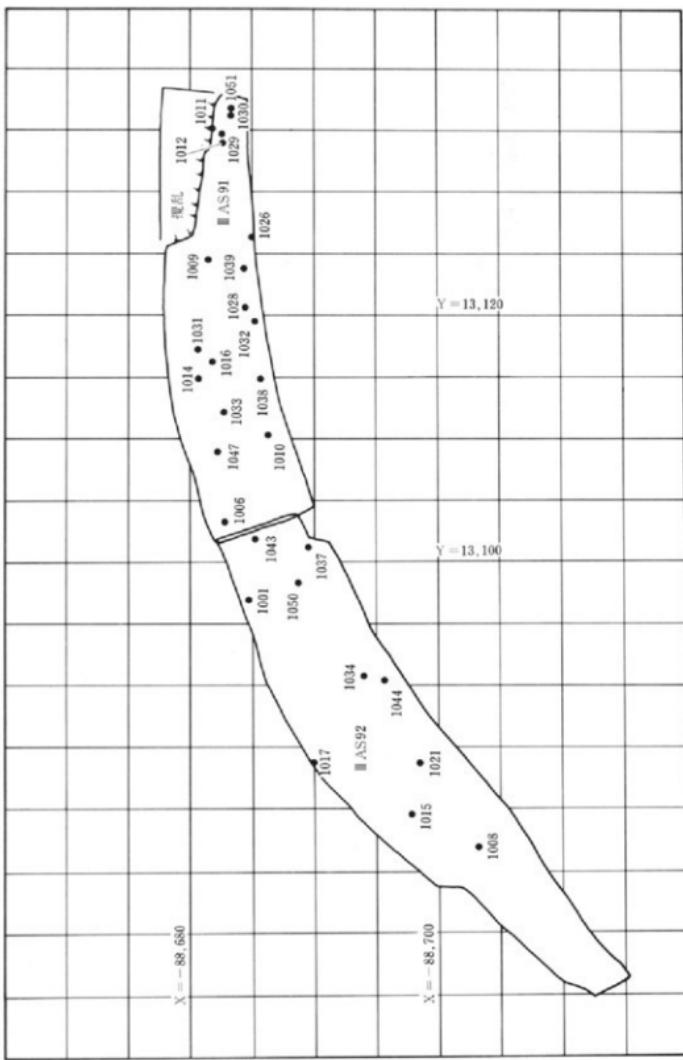
第34図 ⅡAS91第Ⅲ群土器垂直分布図



第35図 II AS91第Ⅴ群土器垂直分布図



第36図 II AS91石器垂直分布図



第37回 ■ AS91-92界面分布圖

付

表

## 付 表

遺物番号	挿 図	遺構など	器 種	登 錄番 号	遺物番号	挿 図	遺構など	器 種	登 錄番 号
1	14	SK120	深鉢	E-1	41	15		深鉢	E-41
2			深鉢	E-2	42			深鉢	E-42
3		検出	深鉢	E-3	43		黒色土	深鉢	E-43
4			深鉢	E-4	44	SX02		深鉢	E-44
5		黒色土	深鉢	E-5	45		黒色土	深鉢	E-45
6		SK205	深鉢	E-6	46		黒色土	深鉢	E-46
7			深鉢	E-7	47			深鉢	E-47
8			深鉢	E-8	48			深鉢	E-48
9		南壁トレンチ	深鉢	E-9	49		検出	深鉢	E-49
10		黒色土	深鉢	E-10	50		黒色土	深鉢	E-50
11			深鉢	E-11	51		黒色土	深鉢	E-51
12			深鉢	E-12	52		黒色土	深鉢	E-52
13		黒色土	深鉢	E-13	53			深鉢	E-53
14		検出	深鉢	E-14	54			深鉢	E-54
15			深鉢	E-15	55	SK01		深鉢	E-55
16		黒色土	深鉢	E-16	56	16	黒色土	深鉢	E-56
17		検出	深鉢	E-17	57			浅鉢	E-57
18		黒色土	深鉢	E-18	58			浅鉢	E-58
19			深鉢	E-19	59	南壁トレンチ		深鉢	E-59
20		黒色土	深鉢	E-20	60		黒色土	深鉢	E-60
21		検出	深鉢	E-21	61		黒色土	深鉢	E-61
22			深鉢	E-22	62		黒色土		E-62
23			深鉢	E-23	63			浅鉢	E-63
24		黒色土	深鉢	E-24	64		黒色土	深鉢	E-64
25			深鉢	E-25	65			深鉢	E-65
26		黒色土	深鉢	E-26	66	南壁トレンチ		深鉢	E-66
27		黒色土	深鉢	E-27	67		黒色土	浅鉢	E-67
28			深鉢	E-28	68		黒色土	深鉢	E-68
29	15	検出	深鉢	E-29	69		黒色土	深鉢	E-69
30		黒色土	深鉢	E-30	70		黒色土	浅鉢	E-70
31		検出	深鉢	E-31	71			深鉢	E-71
32		検出	深鉢	E-32	72		黒色土	深鉢	E-72
33		SK215	深鉢	E-33	73		検出	深鉢	E-73
34		SK11	深鉢	E-34	74		黒色土	深鉢	E-74
35		SX02	深鉢	E-35	75			深鉢	E-75
36			深鉢	E-36	76			浅鉢	E-76
37			深鉢	E-37	77		黒色土	深鉢	E-77
38		検出		E-38	78		黒色土	深鉢	E-78
39			深鉢	E-39	79			深鉢	E-79
40		検出	深鉢	E-40	80			深鉢	E-80

第6表 土器一覧表(1)

遺物 番号	挿 図	遺構など	器 種	登 錄 番 号	遺物 番号	挿 図	遺構など	器 種	登 錄 番 号
81	16	検出	深鉢	E-81	121	18		深鉢	E-121
82		検出	深鉢	E-82	122			深鉢	E-122
83			深鉢	E-83	123		黒色土	深鉢	E-123
84		黒色土	深鉢	E-84	124	19		深鉢	E-124
85			深鉢	E-85	125		検出	深鉢	E-125
86		黒色土	深鉢	E-86	126			深鉢	E-126
87		黒色土	深鉢	E-87	127			深鉢	E-127
88	17	トレンチ	深鉢	E-88	128			深鉢	E-128
89		黒色土	深鉢	E-89	129		黒色土	深鉢	E-129
90			深鉢	E-90	130			深鉢	E-130
91		中央トレンチ	深鉢	E-91	131		黒色土	深鉢	E-131
92		表土ハギ	深鉢	E-92	132			深鉢	E-132
93		黒色土	深鉢	E-93	133			深鉢	E-133
94		黒色土	深鉢	E-94	134			深鉢	E-134
95		西壁トレンチ	深鉢	E-95	135		検出	深鉢	E-135
96			深鉢	E-96	136		検出	深鉢	E-136
97			深鉢	E-97	137			深鉢	E-137
98		黒色土	深鉢	E-98	138			深鉢	E-138
99			深鉢	E-99	139		黒色土	深鉢	E-139
100			深鉢	E-100	140			深鉢	E-140
101			深鉢	E-101	141		黒色土	深鉢	E-141
102	18		深鉢	E-102	142			深鉢	E-142
103		黒色土	深鉢	E-103	143			深鉢	E-143
104		黒色土	深鉢	E-104	144	20		深鉢	E-144
105			深鉢	E-105	145		黒色土	深鉢	E-145
106		黒色土	深鉢	E-106	146			深鉢	E-146
107		黒色土	深鉢	E-107	147		検出	深鉢	E-147
108		西壁トレンチ	深鉢	E-108	148			深鉢	E-148
109			深鉢	E-109	149			深鉢	E-149
110		黒色土	深鉢	E-110	150			深鉢	E-150
111		中央くぼ	深鉢	E-111	151			深鉢	E-151
112		黒色土	深鉢	E-112	152		検出	深鉢	E-152
113			深鉢	E-113	153			深鉢	E-153
114		黒色土	深鉢	E-114	154			深鉢	E-154
115			深鉢	E-115	155		検出	深鉢	E-155
116		黒色土	深鉢	E-116	156			深鉢	E-156
117		黒色土	深鉢	E-117	157		黒色土		E-157
118			深鉢	E-118	158			深鉢	E-158
119			深鉢	E-119	159			深鉢	E-159
120			深鉢	E-120	160		南壁トレンチ	深鉢	E-160

第7表 土器一覧表(2)

## 付 表

遺物番号	挿 図	遺構など	器 種	登録番号	遺物番号	挿 図	遺構など	器 種	登録番号
161	20	検出	深鉢	E-161	201	21		深鉢	E-201
162			深鉢	E-162	202			深鉢	E-202
163			深鉢	E-163	203		黒色土	深鉢	E-203
164			深鉢	E-164	204		検出	深鉢	E-204
165			深鉢	E-165	205			深鉢	E-205
166		黒色土	深鉢	E-166	206			深鉢	E-206
167			深鉢	E-167	207	22	検出	深鉢	E-207
168		検出	深鉢	E-168	208		検出	深鉢	E-208
169			深鉢	E-169	209			深鉢	E-209
170			深鉢	E-170	210		黒色土	深鉢	E-210
171			深鉢	E-171	211			深鉢	E-211
172			深鉢	E-172	212			深鉢	E-212
173			深鉢	E-173	213		検出	深鉢	E-213
174		検出	深鉢	E-174	214			深鉢	E-214
175		黒色土	深鉢	E-175	215			深鉢	E-215
176	21		深鉢	E-176	216			深鉢	E-216
177		検出	深鉢	E-177	217			深鉢	E-217
178		検出	深鉢	E-178	218			深鉢	E-218
179		黒色土	深鉢	E-179	219			深鉢	E-219
180			深鉢	E-180	220		検出	深鉢	E-220
181		検出	深鉢	E-181	221		黒色土	深鉢	E-221
182			深鉢	E-182	222		黒色土	深鉢	E-222
183		黒色土	深鉢	E-183	223			深鉢	E-223
184			深鉢	E-184	224			深鉢	E-224
185			深鉢	E-185	225		黒色土	深鉢	E-225
186		検出	深鉢	E-186	226			深鉢	E-226
187			深鉢	E-187	227		黒色土	深鉢	E-227
188			深鉢	E-188	228		検出	深鉢	E-228
189			深鉢	E-189	229		黒色土	深鉢	E-229
190		検出	深鉢	E-190	230			深鉢	E-230
191			深鉢	E-191	231		黒色土	深鉢	E-231
192		黒色土	深鉢	E-192	232		黒色土	深鉢	E-232
193		検出	深鉢	E-193	233		黒色土	深鉢	E-233
194			深鉢	E-194	234		検出	深鉢	E-234
195		検出	深鉢	E-195	235		検出	深鉢	E-235
196		黒色土	深鉢	E-196	236		検出	深鉢	E-236
197			深鉢	E-197	237		黒色土	深鉢	E-237
198		南壁レンチ	深鉢	E-198	238		黒色土	深鉢	E-238
199		黒色土	深鉢	E-199	239			深鉢	E-239
200		検出	深鉢	E-200	240			深鉢	E-240

第8表 土器一覧表(3)

遺物番号	挿図	遺構など	器種	登録番号	遺物番号	挿図	遺構など	器種	登録番号
241	22		深鉢	E-241	281	24		注口土器	E-281
242		検出	深鉢	E-242	282			注口土器	E-282
243			深鉢	E-243	283			注口土器	E-283
244			深鉢	E-244	284			注口土器	E-284
245			深鉢	E-245	285		黒色土	土鍋の足?	E-285
246			深鉢	E-246	286	25	検出	深鉢	E-286
247		南壁レンガ	深鉢	E-247	287		検出	浅鉢	E-287
248		黒色土	深鉢	E-248	288		黒色土	深鉢	E-288
249	23		深鉢	E-249	289		検出	深鉢	E-289
250		黒色土		E-250	290		検出	深鉢	E-290
251		黒色土	深鉢	E-251	291		黒色土	深鉢	E-291
252		黒色土	深鉢	E-252	292		黒色土	深鉢	E-292
253		黒色土	深鉢	E-253	293		黒色土	深鉢	E-293
254		中央べり	注口?	E-254	294		黒色土	深鉢	E-294
255			深鉢	E-255	295		検出	深鉢(精製)	E-295
256			深鉢	E-256	296			深鉢	E-296
257			深鉢	E-257	297		黒色土	深鉢	E-297
258			深鉢	E-258	298		検出	深鉢	E-298
259			深鉢	E-259	299		黒色土	深鉢	E-299
260			深鉢	E-260	300		検出	深鉢	E-300
261		黒色土	深鉢	E-261	301		黒色土	深鉢	E-301
262		黒色土	深鉢	E-262	302		黒色土	浅鉢	E-302
263		黒色土	深鉢	E-263	303		南壁レンガ		E-303
264		黒色土	深鉢	E-264	304		検出	深鉢	E-304
265		黒色土	深鉢	E-265	305			鉢	E-305
266		黒色土	深鉢	E-266	306		黒色土	深鉢	E-306
267		検出	深鉢	E-267	307			鉢	E-307
268			深鉢	E-268	308			深鉢	E-308
269			深鉢	E-269	309		黒色土	深鉢	E-309
270			深鉢	E-270	310			深鉢	E-310
271			深鉢	E-271	311		黒色土	深鉢	E-311
272		黒色土	深鉢	E-272	312		黒色土	深鉢	E-312
273		検出	深鉢	E-273	313		南壁レンガ	深鉢	E-313
274		南壁レンガ	深鉢	E-274	314		黒色土	深鉢	E-314
275			深鉢	E-275	315	22	検出	深鉢	E-315
276		検出	深鉢	E-276	316	25	黒色土	深鉢	E-316
277	24		注口土器	E-277					
278			注口土器	E-278					
279			注口土器	E-279					
280			注口土器	E-280					

第9表 土器一覧表(4)

## 付 表

遺物 番号	種 別	石 質	器 種	重さ (g)	比重	登録 番号	遺物 番号	種 別	石 質	器 種	重さ (g)	比重	登録 番号
1001	26	變成岩	打製石斧	148.6	2.67	S-1	1027	塊狀岩質磨製灰岩	石匙		11.9	2.48	S-27
1002		安山岩	"	156.6	2.80	S-2	1028	ガラス質石英安山岩	石鏟		0.5	2.5	S-28
1003		"	"	100.4	2.80	S-3	1029	チャート	"		0.9	2.25	S-29
1004		"	"	57.4	2.68	S-4	1030	安山岩	"		0.6	3	S-30
1005		"	"	69.7	2.69	S-5	1031	ガラス質石英安山岩	"		1.2	2	S-31
1006		"	"	67.0	2.70	S-6	1032	チャート	"		0.9	2.25	S-32
1007		片岩	"	24.2	2.69	S-7	1033	ガラス質石英安山岩	"		1.0	2.5	S-33
1008		安山岩	"	20.6	2.64	S-8	1034	28	チャート	"	0.7	2.33	S-34
1009		"	"	73.4	2.81	S-9	1035	ガラス質石英安山岩	"		0.5	2.5	S-35
1010		"	"	88.0	2.75	S-10	1036	"	"		1.9	2.71	S-36
1011		"	"	59.5	2.81	S-11	1037	チャート	"		1.8	2.57	S-37
1012		"	"	84.5	2.73	S-12	1038	"	"		0.7	2.33	S-38
1013		"	"	96.8	2.72	S-13	1039	"	"		0.7	2.33	S-39
1014		"	"	103.2	2.77	S-14	1040	ガラス質石英安山岩	"		0.4	2	S-40
1015		變成岩	石鍬	32.7	2.64	S-15	1041	"	"		0.5	2.5	S-41
1016		塩基性凝灰岩	石刀	59.2	2.92	S-16	1042	黒曜石	"		0.8	2.67	S-42
1017		"	磨製石斧	130.1	2.98	S-17	1043	ガラス質石英安山岩	"		0.3	3	S-43
1018		"	"	145.0	2.97	S-18	1044	"	"		0.4	4	S-44
1019	27	層結凝灰岩	スクレーパー	8.5	2.5	S-19	1045	チャート	"		0.4	4	S-45
1020		安山岩	"	7.7	2.66	S-20	1046	ガラス質石英安山岩	"		0.2	2	S-46
1021		チャート	"	3.4	2.62	S-21	1047	チャート	"		0.2	2	S-47
1022		"	"	6.2	2.58	S-22	1048	塊狀岩質磨製灰岩	"		0.3	1.5	S-48
1023		"	"	1.9	2.71	S-23	1049	チャート	"		0.7	2.33	S-49
1024		"	"	3.4	2.62	S-24	1050	黒曜石	"		0.9	2.25	S-50
1025		ガラス質石英安山岩	石鍬	2.2	1.16	S-25	1051	"	"		1.2	2.4	S-51
1026		"		1.6	2.67	S-26							

第10表 石器一覧表

遺物番号	X (m)	Y (m)	絶対高 (m)	サンプル番号
1	-88697.945	13079.401	113.792	9 2 - 6 3
2	-88702.965	13079.422	114.222	9 2 - 2 3
4	-88687.171	13093.241	113.678	9 2 - 2 3 3
7	-88689.476	13093.159	113.774	9 2 - 2 9 3
8	-88684.970	13097.678	113.408	9 2 - 3 3 8
11	-88689.405	13093.840	113.754	9 2 - 2 9 4
12	-88681.687	13104.377	113.582	9 1 - 6 2
15	-88688.885	13092.131	113.695	9 2 - 2 2 5
19	-88688.626	13092.613	113.748	9 2 - 2 2 7
22	-88683.362	13103.469	113.545	9 1 - 6 0
23	-88689.058	13095.257	113.761	9 2 - 2 3 8
25	-88689.999	13094.357	113.768	9 2 - 1 2 1
28	-88691.757	13094.930	113.989	9 2 - 1 2 4
36	-88686.845	13098.448	113.523	9 2 - 3 0 7
37	-88693.599	13087.187	113.688	9 2 - 2 0 5
39	-88685.527	13101.392	113.550	9 2 - 3 1 7
41	-88702.365	13074.222	114.183	9 2 - 1 8
42	-88696.230	13082.830	113.865	9 2 - 5 0
47	-88686.229	13102.006	113.220	9 2 - 3 1 6
48	-88684.168	13106.259	113.484	9 1 - 1 4 7
53	-88683.273	13103.623	113.540	9 1 - 6 1
54	-88688.741	13096.067	113.566	9 2 - 3 0 3
57	-88682.070	13134.021	113.879	9 1 - 1 2 4
58	-88683.645	13131.072	113.820	9 1 - 1 1 8
63	-88681.520	13132.640	113.759	9 1 - 1 2 3
65	-88683.831	13133.068	113.983	9 1 - 1 2 0
71	-88683.831	13133.068	113.983	9 1 - 1 2 0
75	-88684.054	13098.322	113.639	9 2 - 2 6 3
76	-88682.710	13119.516	114.094	9 1 - 1 4 4
79	-88687.247	13091.064	113.711	9 2 - 2 2 8
80	-88687.149	13099.225	113.742	9 2 - 2 5 8
83	-88688.313	13097.753	113.756	9 2 - 2 5 4
85	-88682.710	13119.516	114.094	9 1 - 1 4 4
88	回	回	回	9 1 - 5 7
90	-88682.918	13126.875	113.956	9 1 - 1 1 3
95	-88683.331	13102.370	113.231	9 1 - 2

第11表 土器出土地点一覧表(1)

## 付 表

遺物番号	X (m)	Y (m)	絶対高 (m)	サンプル番号
9 6	-88684.863	13122.364	113.839	9 1 - 1 0 6
9 7	-88689.357	13093.031	113.921	9 2 - 1 1 6
9 9	-88703.076	13079.985	114.612	9 2 - 2 1
1 0 0	-88686.641	13096.181	113.807	9 2 - 1 4 7
1 0 1	-88682.570	13122.482	113.558	9 1 - 1 5 1
1 0 2	-88682.465	13124.999	113.685	9 1 - 1 0 9
1 0 5	-88680.313	13123.234	113.789	9 1 - 1 0 7
1 0 9	-88681.269	13127.475	113.904	9 1 - 1 1 5
1 1 3	-88681.929	13135.190	113.917	9 1 - 1 2 9
1 1 5	-88682.690	13135.608	113.855	9 1 - 1 3 0
1 1 8	-88699.665	13078.041	114.458	9 2 - 6
1 1 9	-88689.559	13093.145	113.930	9 2 - 1 1 7
1 2 0	-88682.420	13102.274	113.623	9 1 - 5 8
1 2 1	-88683.330	13116.588	113.692	9 1 - 9 9
1 2 2	-88684.154	13131.425	113.835	9 1 - 1 1 9
1 2 4	-88687.961	13090.382	113.832	9 2 - 9 6
1 2 6	-88680.958	13116.366	113.868	9 1 - 3 0
1 2 7	-88685.184	13112.751	113.968	9 1 - 9 5
1 2 8	-88681.363	13110.442	113.548	9 1 - 1 0 5
1 3 0	-88684.060	13110.969	114.319	9 1 - 1 4 1
1 3 2	-88688.599	13093.577	113.764	9 2 - 2 3 1
1 3 3	-88683.616	13107.061	113.783	9 1 - 7 2
1 3 4	-88683.118	13108.836	113.848	9 1 - 8 2
1 3 7	-88684.140	13107.436	113.889	9 1 - 7 0
1 3 8	-88686.186	13105.666	113.801	9 1 - 6 7
1 4 0	-88681.126	13124.920	113.951	9 1 - 4 1
1 4 2	-88685.301	13100.324	113.703	9 2 - 3 3 7
1 4 3	-88692.302	13092.056	113.922	9 2 - 7 4
1 4 4	-88683.731	13108.586	113.910	9 1 - 7 6
1 4 6	-88686.558	13090.656	113.750	9 2 - 1 9 5
1 4 8	-88686.239	13098.448	113.812	9 2 - 1 6 2
1 4 9	-88684.218	13113.452	113.932	9 1 - 2 4
1 5 0	-88691.838	13091.262	113.879	9 2 - 7 2
1 5 1	-88684.727	13112.624	113.950	9 1 - 9 4
1 5 3	-88682.604	13109.027	113.694	9 1 - 8 0
1 5 4	-88685.921	13098.840	113.799	9 2 - 1 6 4

第12表 土器出土地点一覧表 (2)

遺物番号	X (m)	Y (m)	絶対高 (m)	サンプル番号
1 5 6	-88684.140	13107.436	113.889	9 1 - 7 0
1 5 8	-88684.727	13112.624	113.950	9 1 - 9 4
1 5 9	-88686.459	13097.734	113.834	9 2 - 1 6 0
1 6 2	-88682.453	13110.288	113.930	9 1 - 1 3 2
1 6 3	-88686.454	13101.343	113.886	9 2 - 1 7 6
1 6 4	-88685.563	13107.037	113.956	9 1 - 1 4
1 6 5	-88687.174	13091.626	113.827	9 2 - 1 0 7
1 6 7	-88683.782	13105.926	113.832	9 1 - 7 9
1 6 9	-88687.616	13098.057	113.859	9 2 - 1 6 1
1 7 0	-88685.153	13100.546	113.821	9 2 - 1 6 9
1 7 1	-88685.263	13100.644	113.808	9 2 - 1 7 0
1 7 2	-88685.364	13099.173	113.662	9 2 - 3 0 9
1 7 3	-88683.118	13108.836	113.848	9 1 - 8 2
1 7 6	-88690.403	13094.855	113.841	9 2 - 1 2 5
1 8 0	-88685.395	13102.407	113.775	9 2 - 1 8 5
1 8 2	-88683.937	13101.683	113.804	9 2 - 1 8 1
1 8 4	-88683.349	13110.831	113.921	9 1 - 1 3 9
1 8 5	-88684.748	13108.639	113.906	9 1 - 1 8
1 8 7	-88685.692	13100.176	113.858	9 2 - 1 6 8
1 8 8	-88681.102	13127.722	114.043	9 1 - 4 5
1 8 9	-88686.930	13098.634	113.756	9 2 - 2 5 7
1 9 1	-88689.517	13094.458	113.862	9 2 - 1 2 0
1 9 4	-88687.803	13103.639	113.481	9 1 - 9 2
1 9 7	-88686.157	13099.191	113.833	9 2 - 2 6 0
2 0 1	-88683.484	13108.608	113.889	9 1 - 7 5
2 0 2	-88682.427	13108.766	113.854	9 1 - 2 0
2 0 5	-88685.292	13107.498	113.877	9 1 - 6 9
2 0 6	-88683.907	13108.207	113.898	9 1 - 1 7
2 0 9	-88686.841	13092.033	113.501	9 2 - 2 9 2
2 1 1	-88683.912	13127.395	114.043	9 1 - 4 8
2 1 2	-88683.084	13108.767	113.857	9 1 - 1 9
2 1 4	-88682.645	13111.245	113.921	9 1 - 8 7
2 1 5	-88686.471	13112.892	113.992	9 1 - 2 1
2 1 6	-88686.952	13092.024	113.713	9 2 - 2 3 6
2 1 7	-88682.951	13111.093	113.928	9 1 - 8 9
2 1 8	-88683.091	13110.788	113.904	9 1 - 1 3 6

第13表 土器出土地点一覧表(3)

## 付 表

遺物番号	X (m)	Y (m)	絶対高 (m)	サンプル番号
2 1 9	-88684.694	13112.357	113.922	9 1 - 9 3
2 2 3	-88682.847	13110.845	113.931	9 1 - 8 5
2 2 4	-88691.565	13088.744	113.621	9 2 - 2 1 0
2 2 6	-88690.524	13092.169	113.884	9 2 - 7 9
2 3 0	-88683.567	13105.335	113.673	9 1 - 6 4
2 3 9	-88684.306	13113.460	113.918	9 1 - 2 3
2 4 0	-88683.155	13110.898	113.919	9 1 - 1 3 7
2 4 1	-88683.587	13106.981	113.779	9 1 - 7 1
2 4 3	-88691.696	13091.013	113.793	9 2 - 2 1 4
2 4 4	-88691.838	13091.262	113.879	9 2 - 7 2
2 4 5	-88691.894	13090.737	113.838	9 2 - 7 0
2 4 6	-88687.532	13092.375	113.830	9 2 - 1 1 2
2 4 9	-88681.198	13112.991	113.901	9 1 - 2 6
2 5 5	-88682.531	13111.123	113.938	9 1 - 8 6
2 5 6	-88684.863	13122.364	113.839	9 1 - 1 0 6
2 5 7	-88697.516	13086.709	113.746	9 2 - 2 8 3
2 5 8	-88690.135	13091.780	113.908	9 2 - 8 0
2 5 9	-88683.057	13111.248	113.900	9 1 - 1 3 5
2 6 8	-88689.131	13091.929	113.794	9 2 - 2 2 3
2 6 9	-88689.940	13092.073	113.896	9 2 - 8 3
2 7 0	-88683.390	13111.150	113.925	9 1 - 9 1
2 7 1	-88691.953	13090.847	113.834	9 2 - 6 9
2 7 5	-88692.048	13092.073	113.955	9 2 - 7 3
2 7 7	-88686.313	13102.331	113.820	9 2 - 1 8 8
2 7 8	-88683.374	13110.939	113.925	9 1 - 1 4 0
2 7 9	-88689.617	13090.241	113.714	9 2 - 2 1 6
2 8 0	-88685.827	13107.845	114.032	9 1 - 1 5
2 8 1	-88686.829	13111.305	114.028	9 1 - 7 7
2 8 2	-88682.805	13110.365	113.901	9 1 - 8 4
2 8 3	-88685.041	13096.586	113.664	9 2 - 2 5 3
2 8 4	-88683.659	13105.314	113.746	9 1 - 6 5
2 9 6	-88680.118	13117.509	113.708	9 1 - 1 4 9
3 0 5	-88697.684	13083.587	113.769	9 2 - 1 9 6
3 0 7	-88686.985	13088.960	113.681	9 2 - 3 3 6
3 1 0	-88684.597	13118.826	113.944	9 1 - 3 7

第14表 土器出土地点一覧表 (4)

第15表 石器出土地点一覽表

図

版

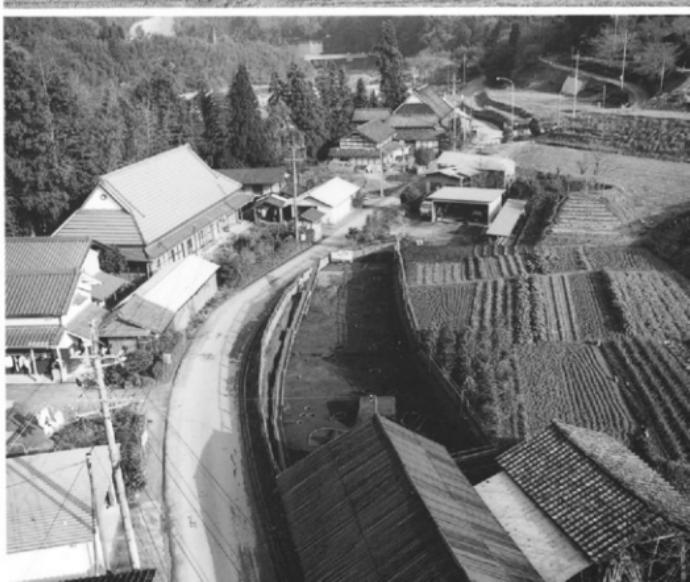
①遠景  
(北東より)



②91調査区  
近景  
(南東より)

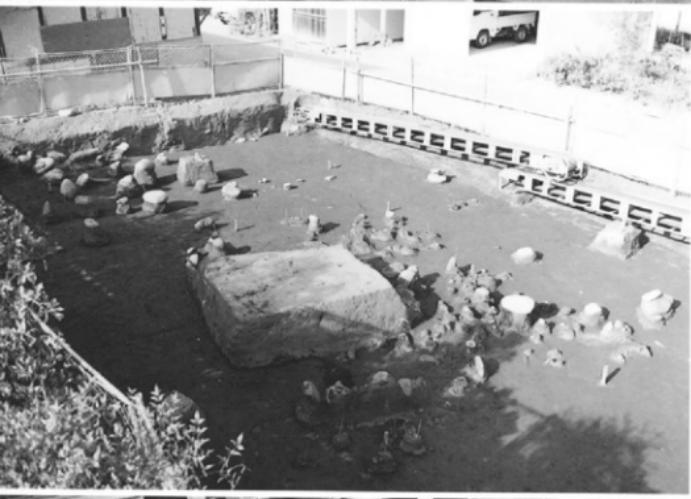


③91調査区  
全景  
(西より)





① 91調査区南西角  
(北東より)



② 調査区西侧  
遺物出土状況  
(南東より)



③ 91調査区  
SX02  
(南より)

①91調査区東側  
完掘状況  
(西より)

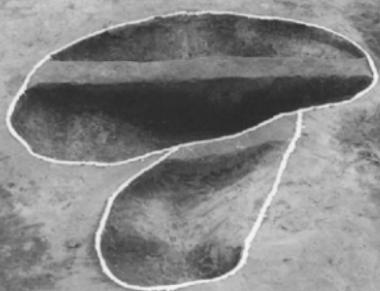


②91調査区全景  
(東より)



③92年調査区  
調査風景

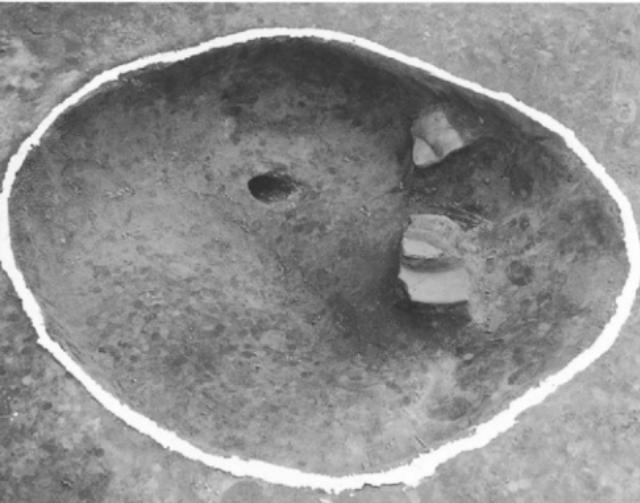




① 92調査区  
SK232  
SK233  
(東より)



② 92調査区  
鉢形土器出土状況  
(北西より)



③ 92調査区  
SK236  
(北より)

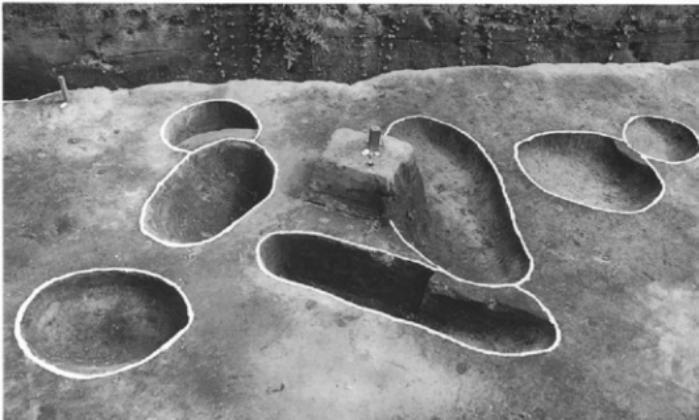
① 92調査区  
東土坑群  
(南より)



② 92調査区  
南東土坑群  
(南東より)



③ 92調査区  
中央南土坑群  
(北西より)





①92調査区  
南壁セクション  
(北東より)

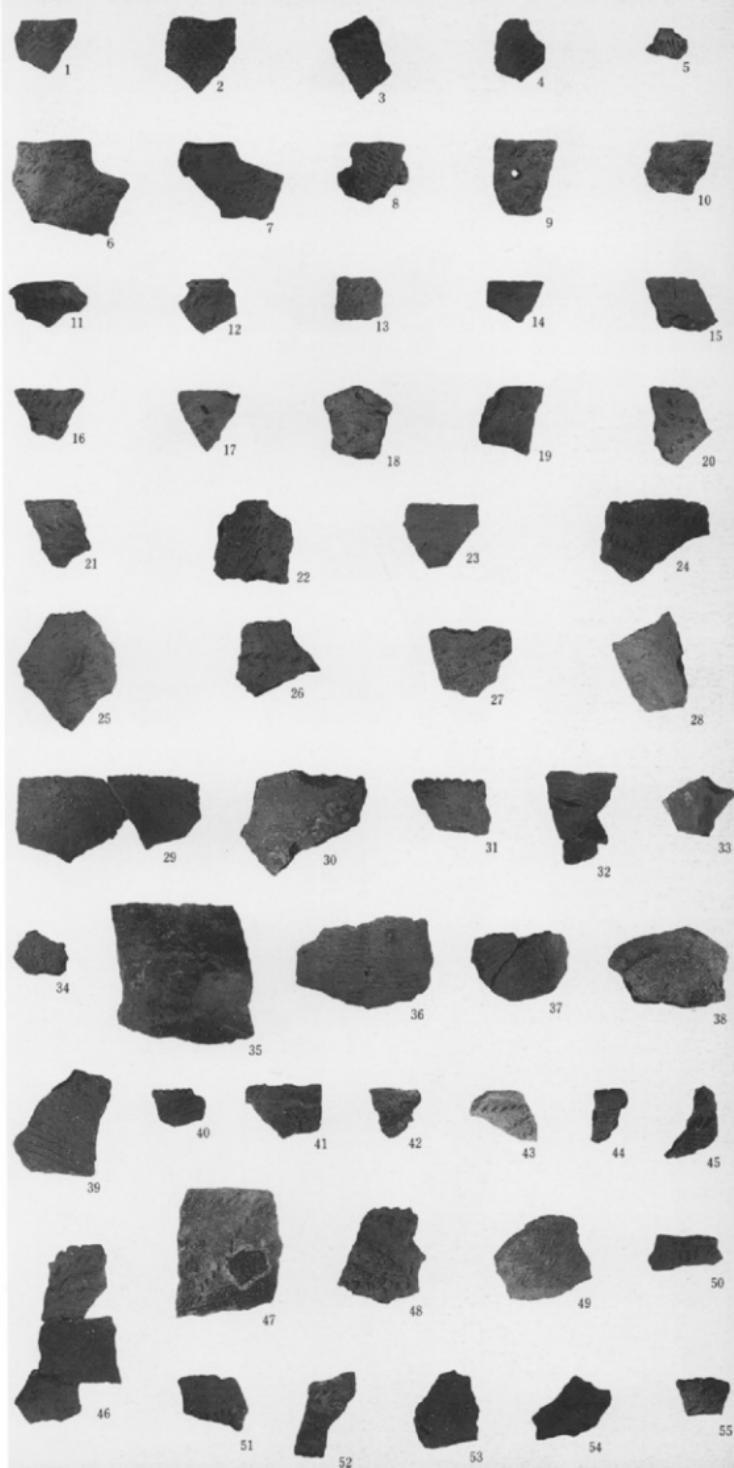


②92調査区  
全景  
(南西より)



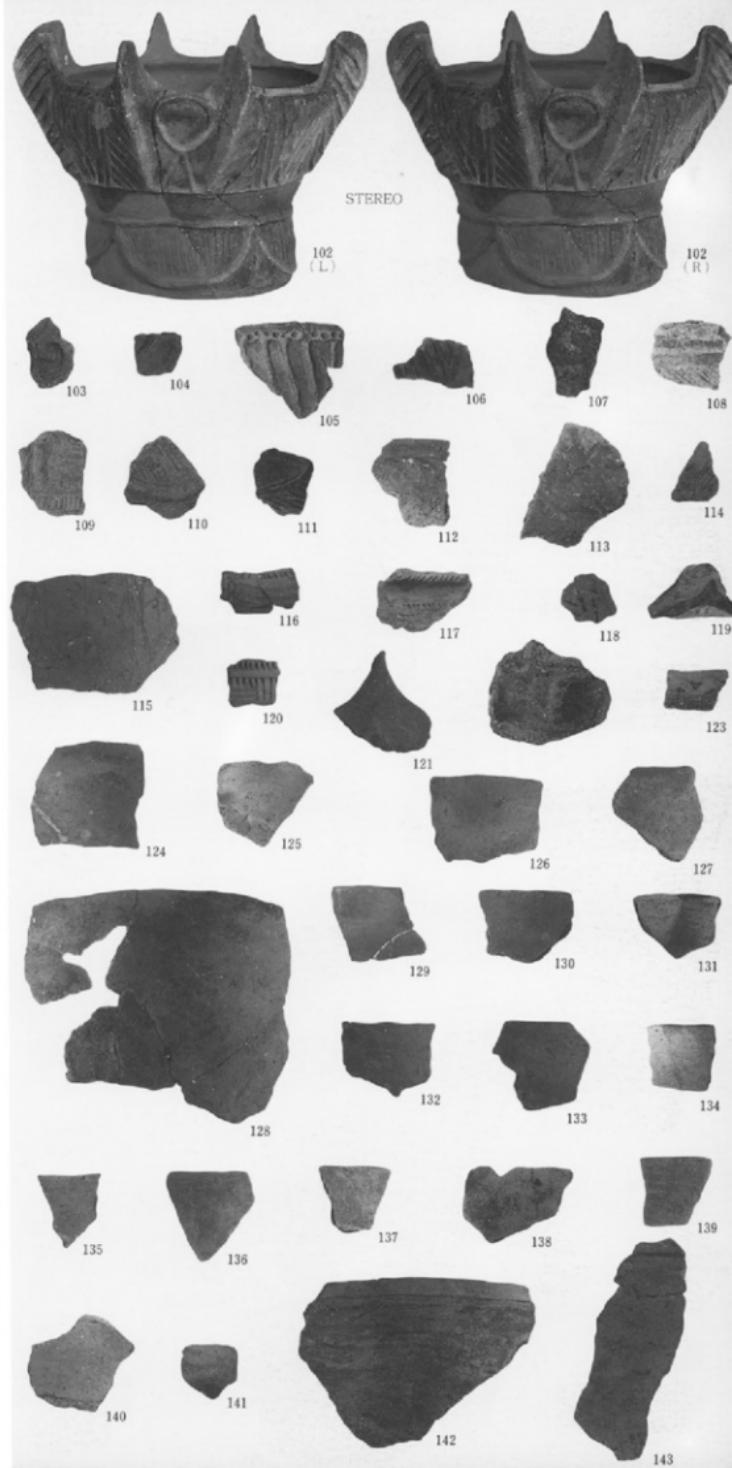
③92調査区  
全景  
(北東より)

图版 7

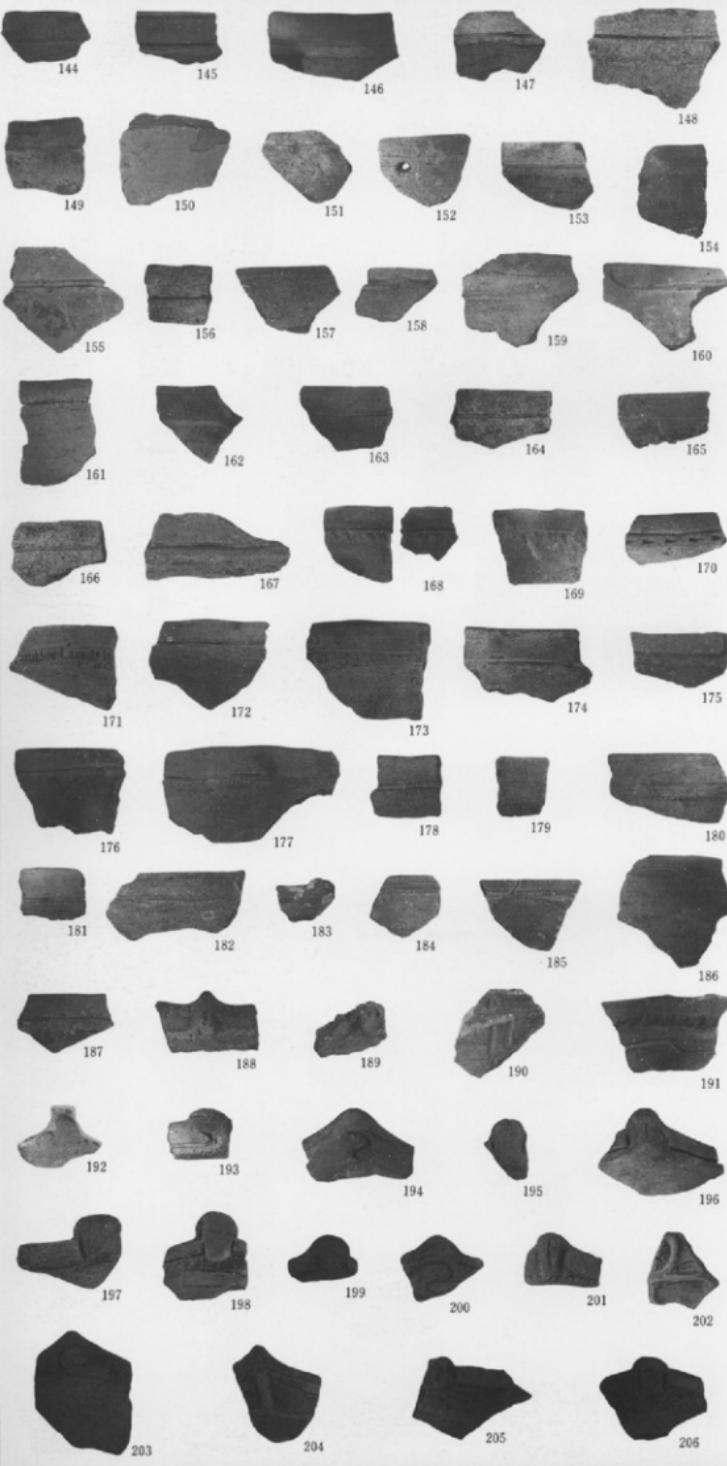


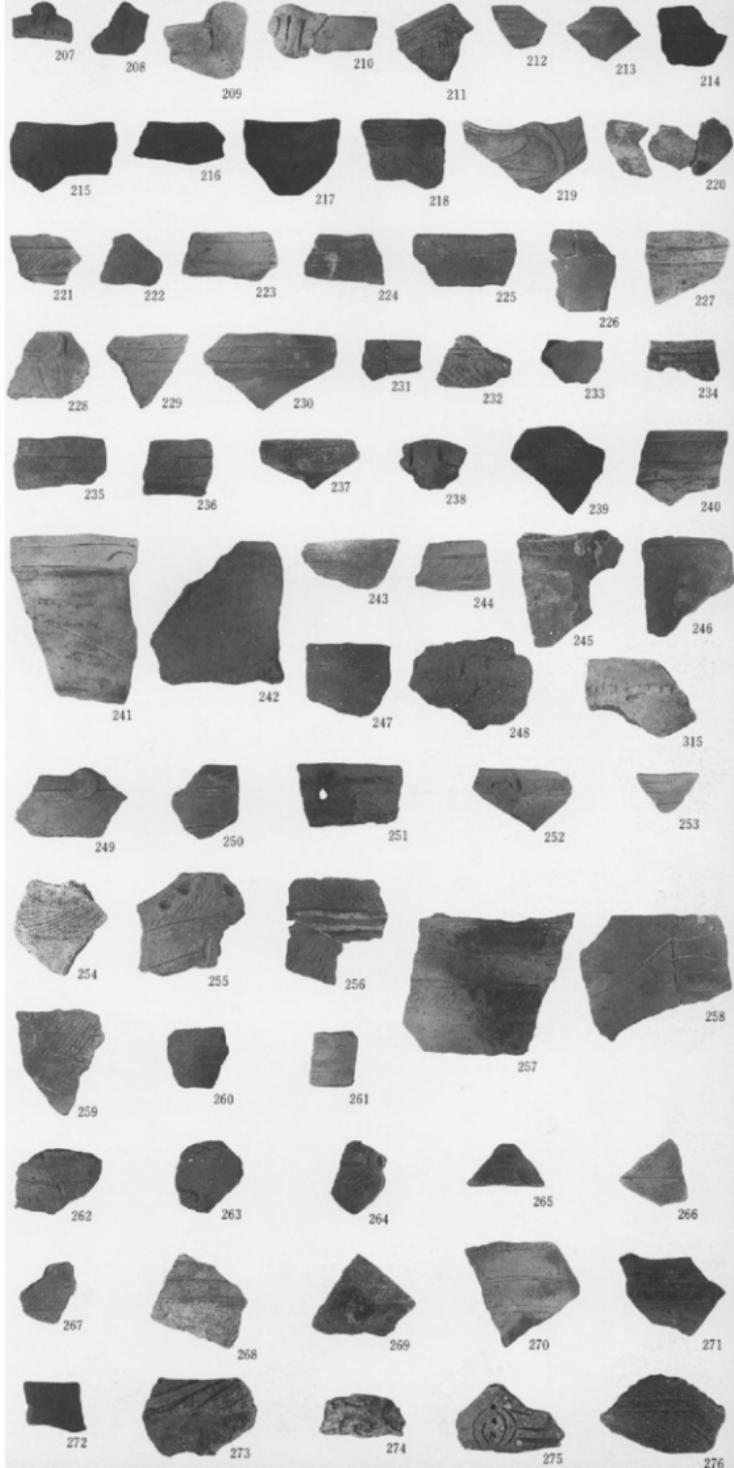


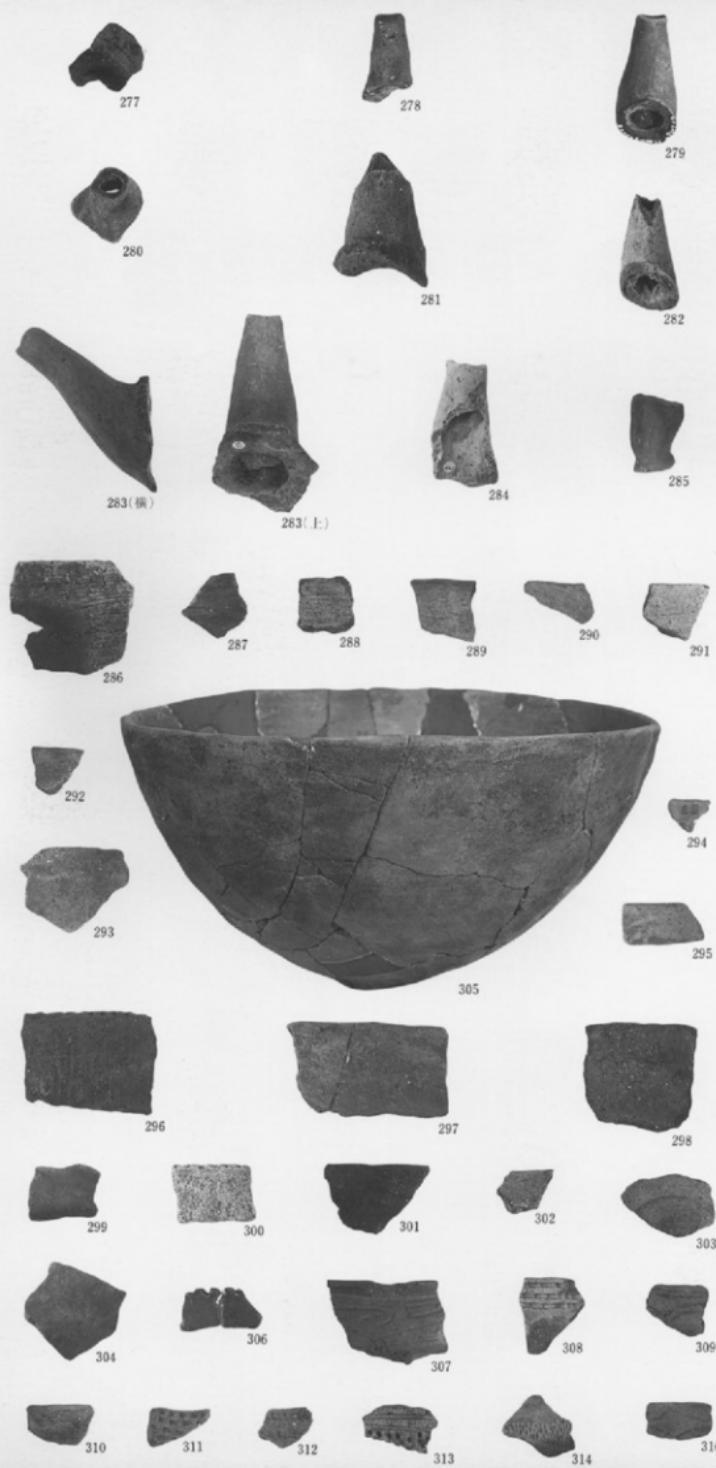
88・95・96 1/4 柄尺  
他 1/3 柄尺



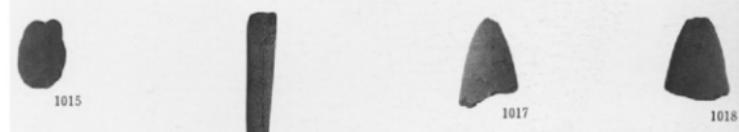
102は1/4縮尺ステレオ撮影  
他は1/3縮尺







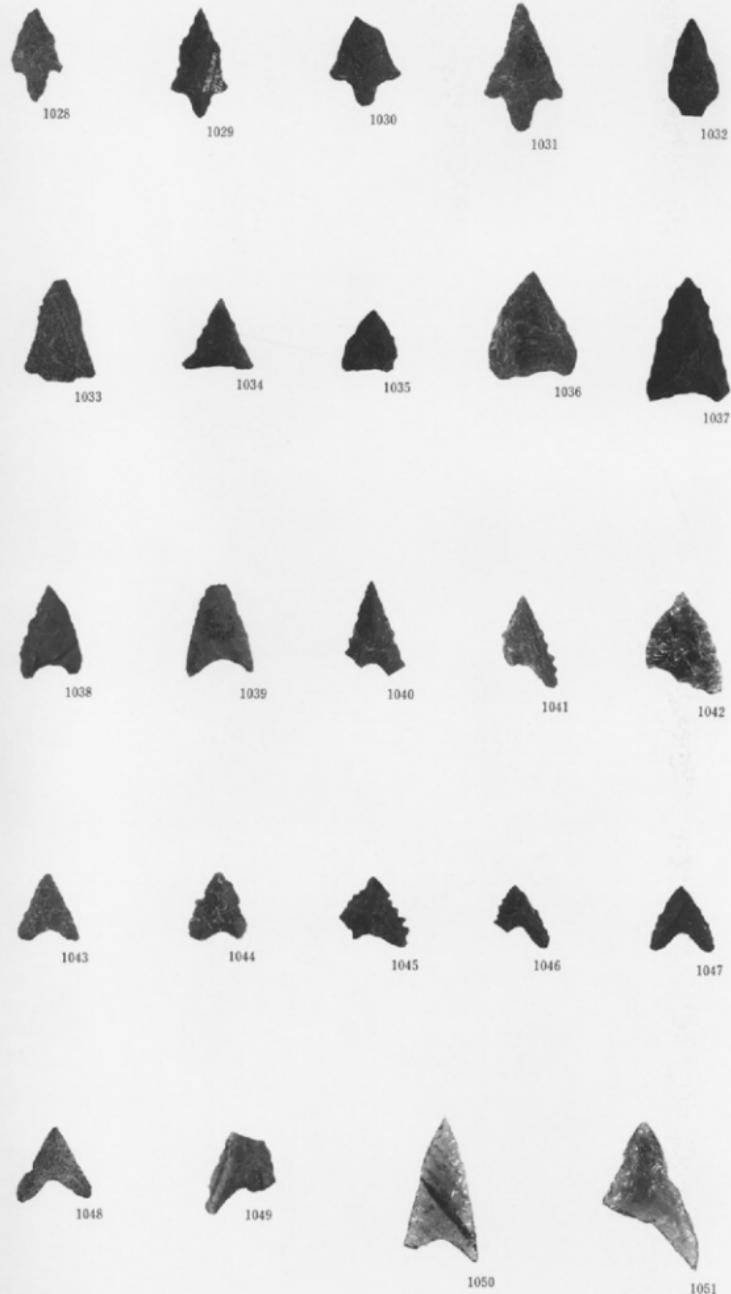
305は1/4縮尺  
他は1/3縮尺



1/4缩尺



1/2缩尺



# 高 権 遺 跡

## 例　言

1. 本編は、愛知県豊田市坂上町字高樋に所在する高樋遺跡の発掘調査報告である。
2. 調査は県道坂上・花沢線拡幅工事に伴うもので、愛知県教育委員会を通じて愛知県土木部からの委託を受け、平成3年（1991年）11月から12月にかけて財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査面積は500m<sup>2</sup>である。
3. 調査担当者は、山田基（課長補佐兼主査、現刈谷市立衣浦小学校）・石黒立人（調査研究員）・余合昭彦（同）で、測図等に岡 裕子（発掘調査補助員）が協力した。
4. 調査にあたっては、次の各機関の御協力を得た。

　　愛知県教育委員会文化財課 愛知県埋蔵文化財調査センター

　　愛知県土木部 豊田市教育委員会

5. 本編の執筆分担は以下の通りである。編集は余合が行った。

　　第3章 2 服部信博（調査研究員）

　　上記以外のすべて 余合昭彦

6. 報告書の作成にあたり、次の各機関・諸氏の御教示・御協力を得た。

　　（敬称略）

　　大参義一 鈴木昭彦 野口哲也 松井直樹 足助資料館 西尾市資料館  
　　南知多町郷土資料館

7. 遺物の整理・作図について、次の方々の御協力を得た。（敬称略）

　　山本章子 西山朋子 中島由美子

8. 調査区に使用した座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第VII系に基づくものである。

9. 出土遺物・調査に関する記録は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管している。

## 目 次

第1章 調査の概要	
1 調査の経緯	1
2 遺跡の環境	2
第2章 層序と遺構	
1 基本層序	4
2 遺構	6
第3章 遺物	
1 縄文土器	7
2 石器	13
3 その他の遺物	16
第4章まとめ	17
付表	18

### 挿図目次

第1図 高櫛遺跡の位置	1	第8図 縄文土器(1)	9
第2図 調査区位置図	2	第9図 縄文土器(2)	10
第3図 周辺の遺跡	3	第10図 縄文土器(3)	11
第4図 調査区北壁の基本層序	4	第11図 土器出土地点分布図	12
第5図 Ⅱ層検出時の等高線	5	第12図 石器	14
第6図 調査区平面図	6	第13図 石器出土地点分布図	15
第7図 SK01埋土セクション	6	第14図 灰釉系陶器	16

### 図版目次

図版1	調査区全景
図版2	SK01・押型文土器出土状況
図版3	縄文土器(1)
図版4	縄文土器(2)
図版5	石器

# 第1章 調査の概要

## 1. 調査の経緯

愛知県豊田市東部の坂上町を流れる仁王川の流域には、昭和30年頃の耕地整理の際に発見された三斗目遺跡（県道跡番号 63356）<sup>①</sup>がある。近年、仁王川流域に耕地の圃場整備計画が持ち上がり、平成2年12月に豊田市教育委員会が三斗目遺跡の範囲確認のため試掘調査を行ったところ、同町字高橋からも縄文土器が発見されて高橋遺跡と命名された。さらに高橋遺跡の範囲内に県道坂上・花沢線の拡幅工事が計画されたため、愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターが、事前調査を行った。

調査の経過としては、平成3年11月5日に調査区を設定し、重機によって表土を除去した。その後作業員を投入し、12月末まで約2カ月間かけて包含層の掘り下げ及びトレンチの掘削、測図・写真撮影等を行った。12月19日に土層確認のため重機によって深掘りを行い、埋め戻しを年末・年始をはさんで平成4年1月上旬に行って調査を終了した。発掘調査面積は500m<sup>2</sup>である。

### 註

- （1）愛知県教育委員会 1988 『愛知県遺跡分布地図(1) 知多・西三河』



第1図 高橋遺跡の位置

## 2. 遺跡の環境

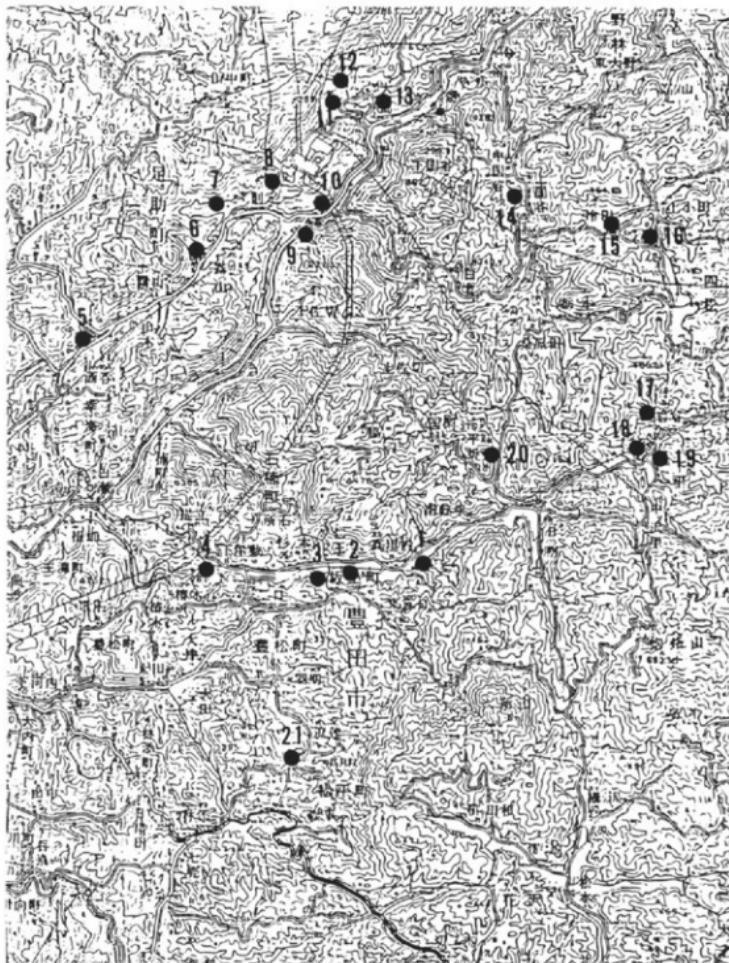
豊田市は愛知県のほぼ中央に位置する。市域の多くは矢作川によって形成された段丘上に展開しているが、東部は三河高原の末端にあたり標高約110m～600mの三河小起伏面に属している。豊田市と東隣の東加茂郡足助町との境には標高683mの炮烙山、その近くには標高611mの六所山があり、これらの山々から流れだした沢は仁王川となって矢作川の支流である巴川に注いでいる。

豊田市坂上町は炮烙山や六所山を含む仁王川の流域に広がっている。坂上町の仁王川に沿った地域は、山間部でありながら小盆地となっている。これは巴川にそった断層の活動によって坂上町のある巴川南東部が相対的に隆起した後、仁王川の下流より始まり王滝渓谷を形成している河川による下剝作用が、まだ坂上町域にまで及んでいないためと考えられる。

高橋遺跡は、仁王川沿いの小平野に北側から小さな沢が流れ込む地点に所在する。高橋遺跡と同じ仁王川の流域では、上流の足助町内に縄文時代早期の馬場遺跡があり、約1km下流にはほぼ同時期に当センターが調査した三斗目遺跡（縄文時代後期）・三本松遺跡（同晩期）がある。さらに下流には王滝岩陰遺跡があって縄文早期の土器片が発見されている。仁王川が巴川に合流した地点の対岸から尾根をひとつ越えた幸海町には、縄文時代草創期の遺跡として著名な酒呑ジュリンナ遺跡もある。



第2図 調査区位置図 (1/2,500)



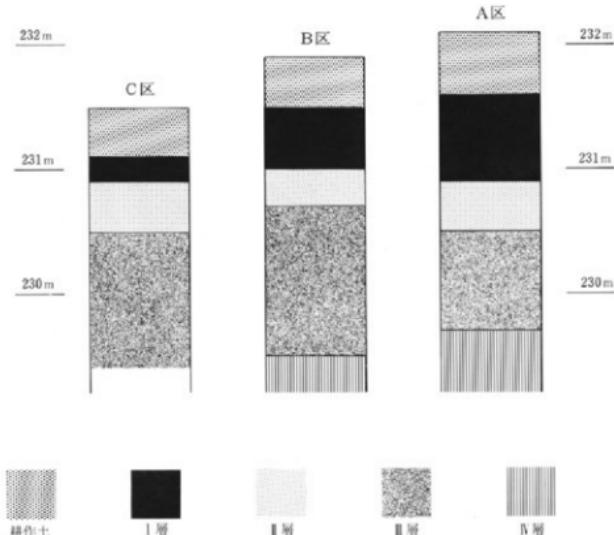
- 1. 高橋道跡
- 2. 三斗目道跡
- 3. 三本松道跡
- 4. 王滝岩陰道跡
- 5. 酒呑ジュリンナ道跡
- 6. 下井戸道跡
- 7. 別定本郷B道跡
- 8. シメ土道跡
- 9. 上柄ノ実道跡
- 10. 仙道跡
- 11. 仏田道跡
- 12. 追分山ノ神道跡
- 13. トウノ前道跡
- 14. 広畠道跡
- 15. 惣道跡
- 16. 兼ヶ田道跡
- 17. 堂ノ下道跡
- 18. 田面道跡
- 19. 馬場道跡
- 20. 南道跡
- 21. 松平氏発祥地

第3図 周囲の道跡 (1/50,000)

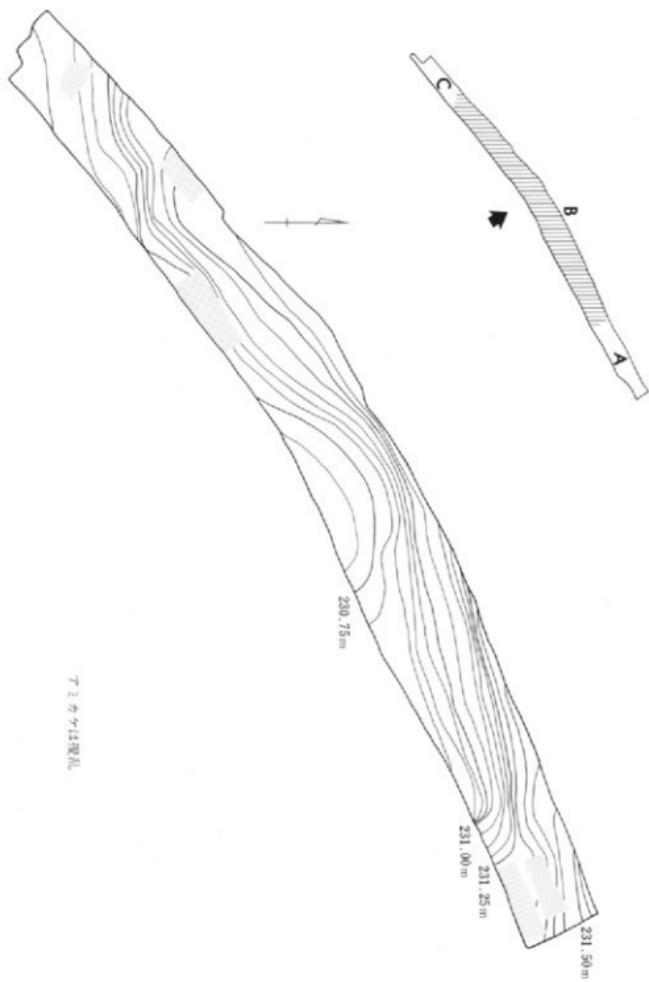
## 第2章 層序と遺構

### 1. 基本層序

調査区は仁王川にそった段丘面と小平野の境を走る県道に平行して、長さ約80m、幅約5mの細長い長方形で設定した。全体に北から南に向かって緩く傾斜している。調査前の地目は水田である。調査区は大きく3つの部分に分けられ、最も東のA区は山裾が張り出していたため、水田を開く際に地山まで削平されており、最も西のC区は耕作土のすぐ下が旧河道になっていた。この2区では、遺物包含層は検出されなかった。中央のB区の基本層序は、上から耕作土、褐色粘質シルト（Ⅰ層）、黒色シルト（Ⅱ層）、灰褐色シルト（Ⅲ層）、赤褐色土（N層）である（第4図）。Ⅰ層は約30~50cmの厚さをもつ耕作土下の床土であり、少量の繩文土器や中世・近世の土器が出土した。Ⅱ層は厚さ約20~50cmで、繩文土器や石器が発見された。Ⅲ層は河川による堆積層で厚さは最大で約1m50cm、大部分は砂質だが一部粘質シルトの部分もあって細分が可能である。この層は無遺物層と思われたが、土層観察のためのトレンチを掘ったところ、Ⅲ層の下部から押型文土器が一個体出土した。これ以外には遺物の出土を見なかった。N層は花こう岩質の地山である。

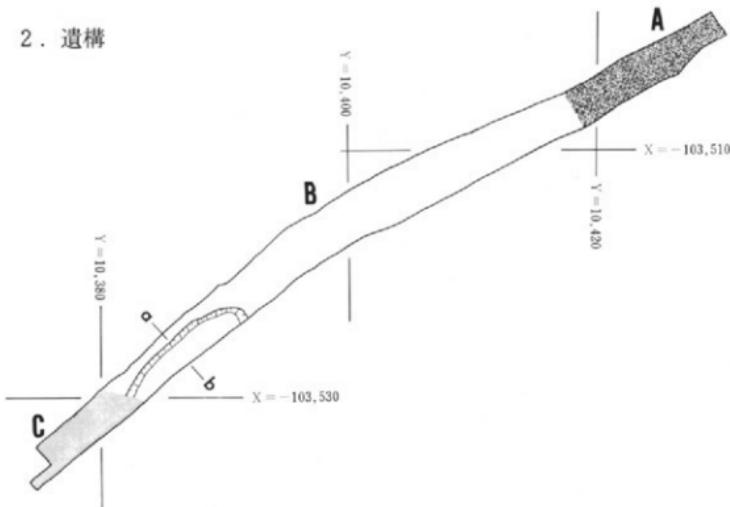


第4図 調査区北駅の基本層序



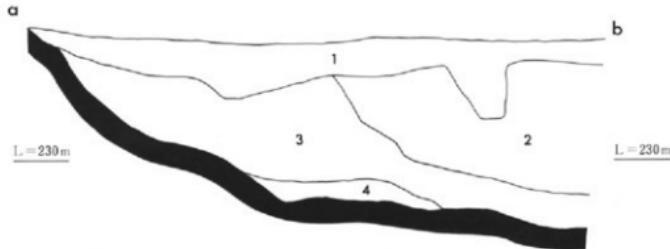
第5図 Ⅲ層検出時の等高線 (1/200)

## 2. 遺構



第6図 調査区平面図 (1/400)

今回の調査区は、もともと緩やかな傾斜地に設定されており、遺構の存在は考えにくい状況であった。調査の結果、調査区の中央よりやや南西の部分で土坑が1基だけ検出された。この土坑(SK01)は調査区の南壁にかかっているため全体の形や大きさを知ることはできなかったが、調査区内では最大径11.4m、深さ75cmをはかる方形あるいは円形の土坑と考えられる。土坑の中からは、最上部に堆積した黒色シルト(前ページのⅡ層)から土器・石器が検出されたほか、最下部の暗灰褐色シルトからも土器・石器が発見された。



1. 黒色土 2. 黄褐色砂質シルト 3. 暗灰褐色シルト 4. 灰褐色砂質シルト

第7図 SK01埋土セクション (1/20)

## 第3章 遺物

### 1. 縄文土器（第8図～第10図）

調査によって出土した土器は420点余りである。点数が必ずしも多くないため土器は可能な限り光波トランシットを使用して座標値を記録しながら取り上げた。土器のうち310点ほどは無文土器、あるいは摩耗して文様が不明な土器である。ここでは有文土器を中心に分類を行った。

1類…押型文土器である。さらに3種に分けられる。

a種（1～3）…神宮寺式系のネガティブな押型文。3点出土した。1は唯一Ⅲ層から発見された尖底の土器で、直径7mm、短径3mmほどのくずれた長方形の押型文を器面全体に施していると思われる。2は口径12.7cmほどと推定される小形の鉢の口縁部で、SK01の最下層から出土している。長径5mm、短径1mmほどの細長い楕円の押型文である。3は2によく似た細長い楕円文が施された底部に近い部分の破片と思われる。仁王川上流の馬場遺跡（鈴木他 1981）から同様の土器が多数出土しており、関連が注目される。

b種（4～7）…ポジティブな楕円押型文をもつ土器である。12点出土したが、色調や焼成の似ているものがあり、個体数はもっと少なくなると思われる。5は楕円文の長径が5mm、短径が4mmで楕円というより円形に近く、内面に沈線をもたない。4、6、7の楕円文は長径7mm、短径4mmで内面に太い沈線をもつ。器壁の厚さは7mmほどで、知多半島の愛知県南知多町先貝塚（山下他 1980）から出土した内面に沈線をもつ楕円押型文土器と比較するとかなり薄い。全体に摩耗が激しい。

c種（8、9）…縦方向の山形押型文で、2点出土した。8は波長が約12mmで、山形がくずれて直線に近くなっている。9は波長が19mmほどの大きな山形文をもつ。

2類（10～33）…胴部に隆帯をもち体部に条痕または刺突文をもつもの。26点出土したが同一個体と思われるものがあり、個体数は20点余りであろう。10～17、19～21は隆帯に刻目をもち、その上部に横方向の条痕をもつ。18は器壁が薄く粗雑な条痕を体部に施す。23～25、29～33は口縁部直下または口唇部に刻目をもち体部に条痕を施している。26は口縁部と刻目がある隆帯のあいだに横に平行な3列の刺突文をもつ。28は刻目をもつ口縁部の下に棒状器具の先端でつけたと思われる斜めの刺突文をもつ。2類は胎土には繊維を含むものが多い。県内に類例は少ないが、繊維を含み胴部に隆帯をもつ点などから早期の茅山下層式あるいはそれに近接する時期の土器群と思われる。

3類（34～56）…体部の内外を条痕で調整し爪形文を施す類。39点出土し、有文土器の中では最も数が多い。胎土には繊維を含む。34は口縁部の大きな破片で体部には条痕を施し、外面には口縁部直下と体部に口縁部と平行して3列の爪形文が、その中間には斜行すると思われる1列の爪形文が施され、内面にも口縁部直下に1列の爪形文を施している。また、口唇部は大きな刻目がつけられているため波状を呈する。35、36、38～41も条痕の上から爪形文を施している。条痕にも42、46、

50、56のようにはっきりとした条痕や45、49、53のような細かな条痕の2種類があるが、ここでは一括して3類とした。条痕のみが認められる土器のうちの一部は2類に属する可能性もある。早期後葉の柏畠式に比定されるが、34は体部にわずかながら段が認められ、また斜行する爪形文をもつことから柏畠式に先行するハツ崎I式（増子 1983）に近いものかもしれない。

4類（57）…1点のみ出土した。口縁部に三角形の突起をつけ、その両脇の楕円形の区画の中に細かな爪形文を施した土器で、器壁が薄い。中期の北屋敷式と思われる。

5類（58～70）…沈線を施した土器群で15点出土した。61、64は波状口縁の波頂部で、曲線的な太めの沈線を施している。62も波状口縁で、口縁部と「く」の字に屈曲する頸部とのあいだに太い沈線で文様をついている。65～70は沈線がやや細いものである。この類は、中期末から後期の初頭の土器と思われる。

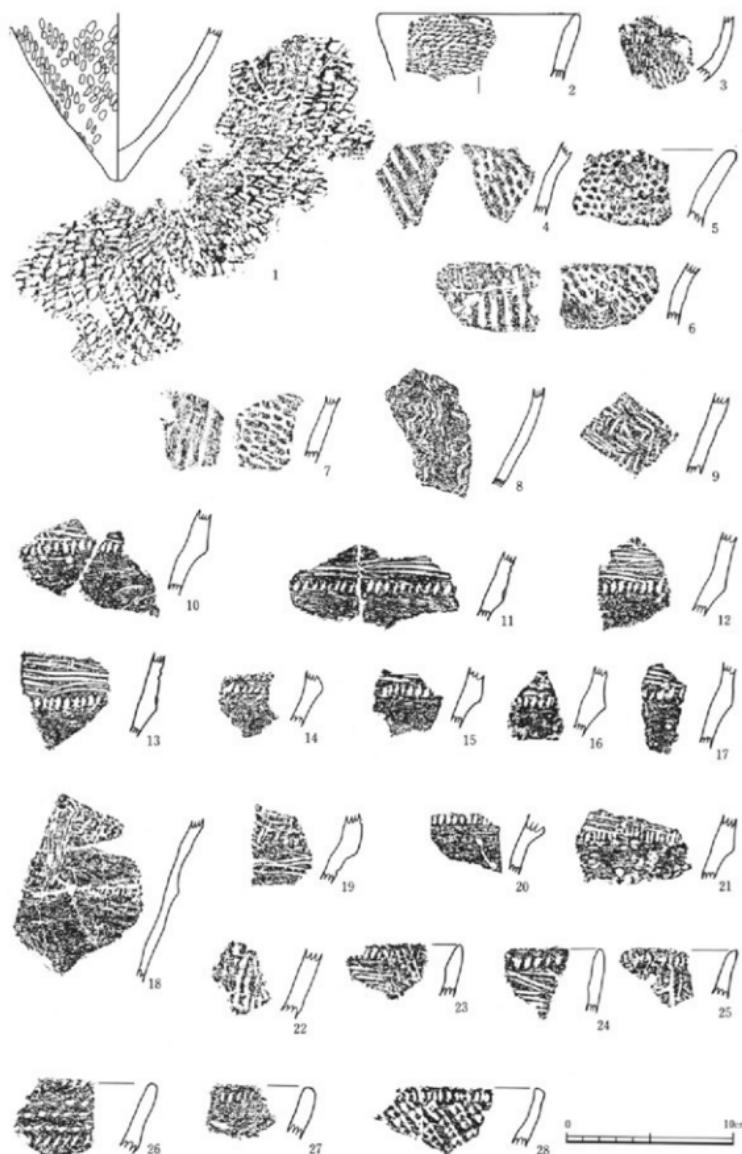
6類（71、72）…条痕を施したもので6点出土した。71は角ばった口縁部で、器体全体に条痕をもつ土器。72は羽状条痕のようにみえる。晚期に属するものと思われる。

7類（73～81）…その他の有文土器を7類とした。73は口縁部に刻目をもち、その下に斜めに細い沈線と刺突文を3列ずつ施したもので、全体の雰囲気は2類土器に似ている。74は器壁の全体に繩文を施したものである。75は口縁部から縦に繩文帯と無文部分を並べ、また口唇部にも繩文を施したもので、後期初頭の土器かと思われる。76は「く」の字状に折れ曲がった部分に刻目をもち、その上部に斜めの刺突列点文をもつ土器である。77は口唇部に指または棒状器具で押圧を加えた土器である。78は磨消繩文をもつ土器で後期に属する。79～81は櫛状の器具またはヘラのようなもので細い沈線を施したもので、やはり後期に属するものと思われる。

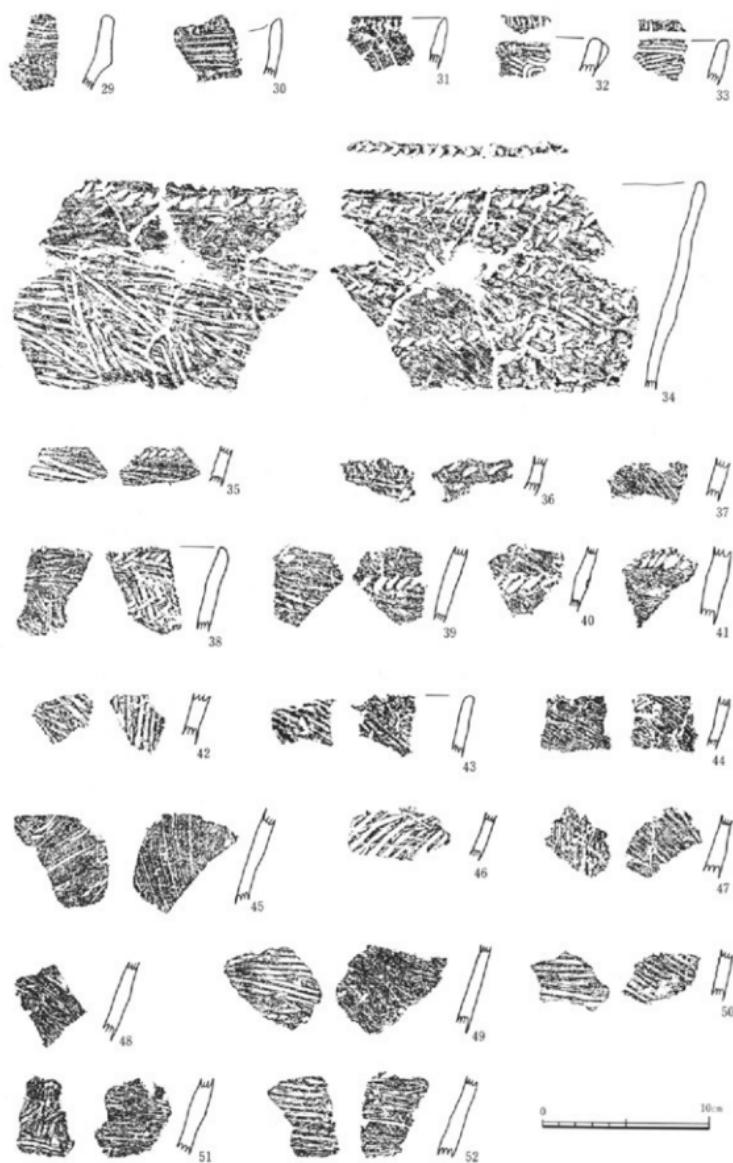
8類（82～86）…底部を8類とした。82は体部の一番下の部分に刻目を施し体部に条痕をもつ。83は丸底である。84は推定底径11.5cmをはかり、器壁も厚い大型土器の底部である。85、86は胎土に纖維を含み、早期の土器の底部と思われる。

#### 参考文献

- 鈴木茂夫他 1981 『馬場遺跡概報』 足助町教育委員会  
 増子康眞 1983 「ハツ崎I式土器をめぐって」『古代人41』 名古屋考古学会  
 山下勝年他 1980 『先菊貝塚』 南知多町教育委員会



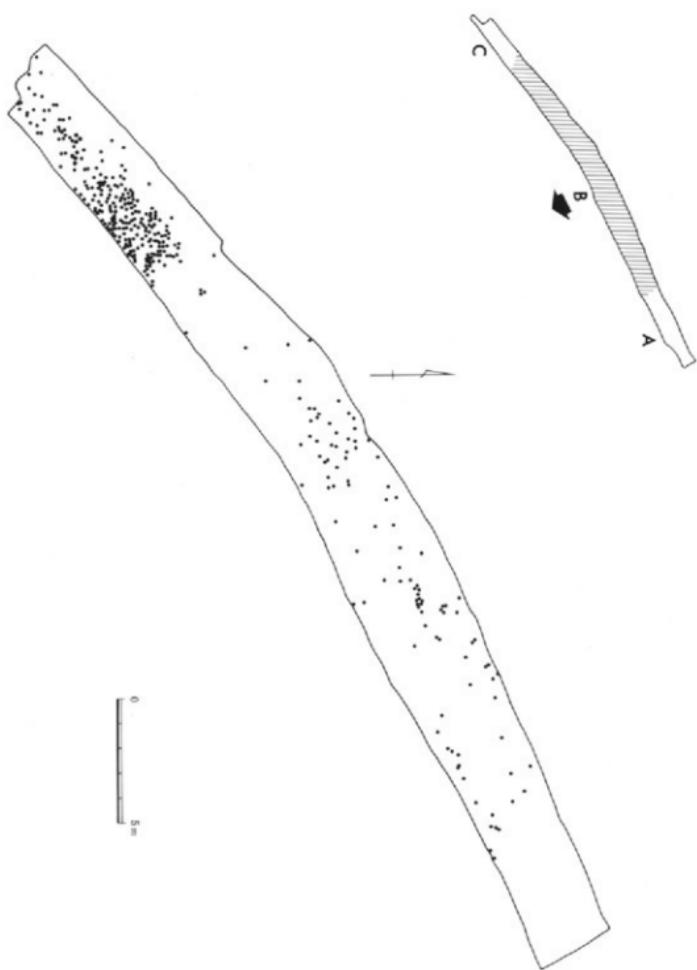
第8図 漢文土器(1)



第9図 條文土器(2)



第10図 両文土器（3）



第11図 土器出土地点分布図 (1/200)

## 2. 石器（第12図）

今回の高橋遺跡の発掘調査で出土した石器は、すべて打製石器であり磨製石器は1点もみられない。出土総数は、剝片資料等を含め84点であり、量的には決して多いとはいえない。しかし、帰属時期に若干の問題を残すものの大半の資料が縄文時代早期（中葉から後葉）に比定される可能性があり、やや資料不足の感が拭えない状況にあった当該期の石器研究の面において、興味深い資料を提供したといえよう。

### 石鏃（1・2）

1は、基部がほぼ直線的に走る平基無茎鏃であり、長さ1.5cmを測る。チャート製。2は、基部が欠損しており、全体の形状は不明である。剝片の片側側縁部分のみに調整を加えた粗悪品であり、石材は安山岩を利用している。

### 尖頭器（3）

3は、基部部分のみ残存し全形は判然としないが、黒曜石製の木葉形尖頭器と考えられる。

### 石匙（5）

5は、横型石匙であり、典型的な形状を呈している。安山岩を石材として利用している。全体的に風化が進行しており、剝離痕等が不鮮明になっている。

### スクレーパー（6～12）

剝片の一端に刃部を形成した石器を一括してスクレーパーとした。大きく以下の2種に分類することができる。

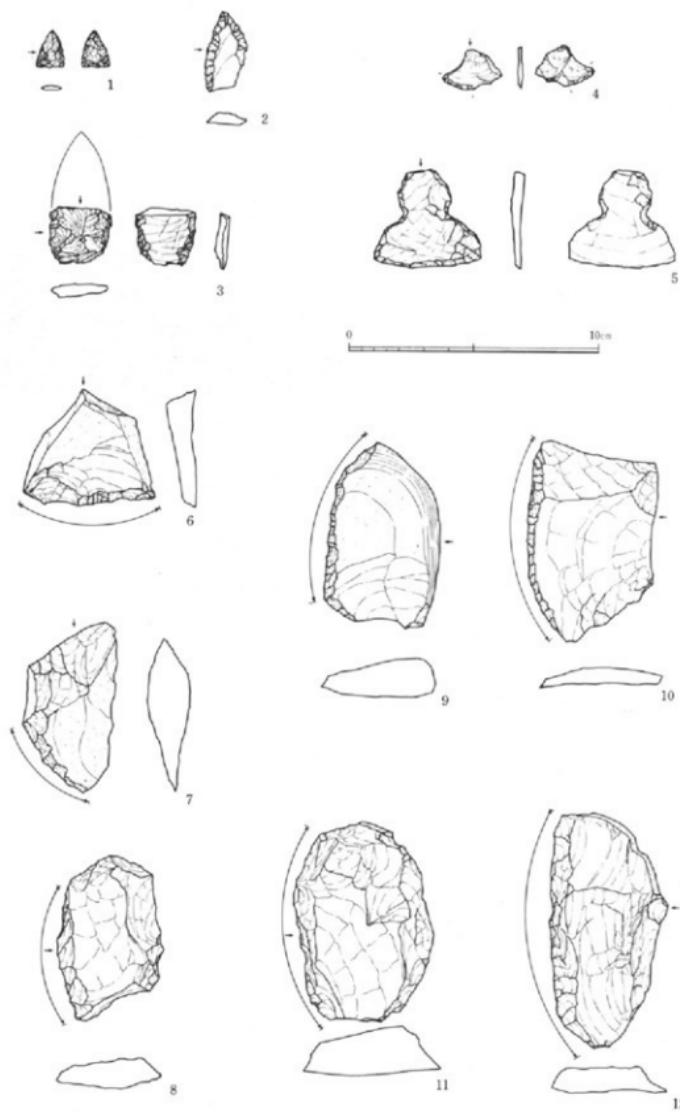
- a 剥片の長軸の端部に連続的に刃部をつくりだしているもの。
- b 剥片の側縁に連続的に打撃を加え刃部をつくりだしているもの。

aには6・7の2点が該当する。6はチャート製、7は凝灰岩を使用しており、いずれも自然面を残す剝片端部に連続的に打撃を加え刃部をつくりだしている。

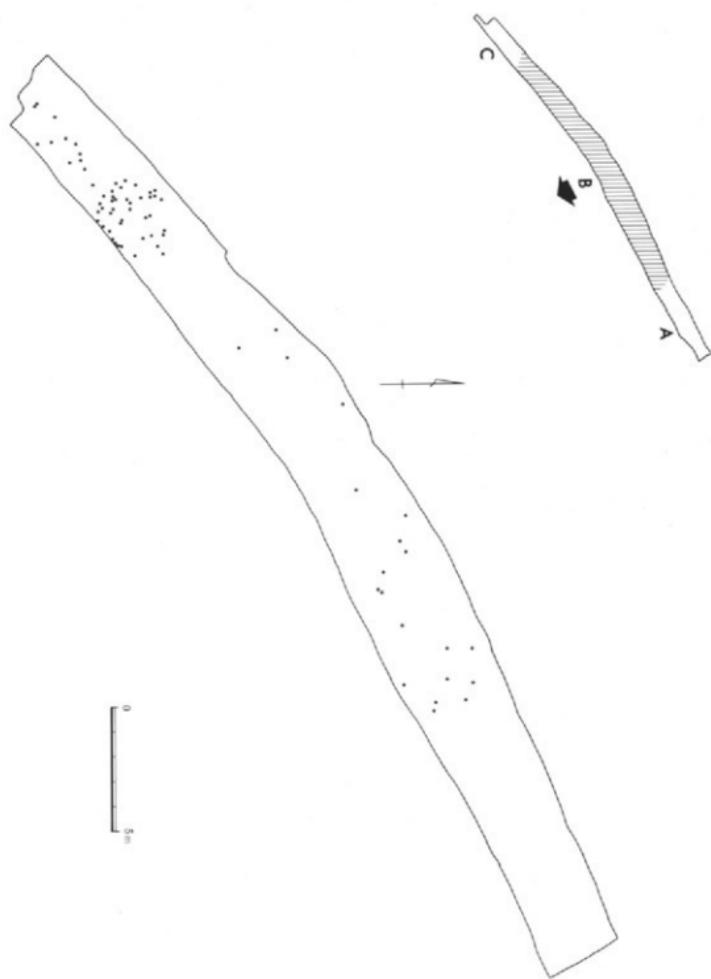
bに該当する資料は、8～12であり、他に図示していないものが3点ほどある。8・9は縦長剝片の側縁に刃部を形成した資料であり、9は自然面を残す側から、細かな打撃が連続して加えられている。8は安山岩、9は極細粒砂岩製。10～12は横長剝片を使用したものであり、いずれも刃部の調整は、片面の側縁部分にはほぼ直線的に打撃が加えられている。10は凝灰岩、11は安山岩、12はガラス質石英安山岩（下呂石）を使用している。

### その他（4）

4は、剝片側縁の一部に細部調整が施されたものであり、定型的な刃部をつくりだしていない。石材は、サスカイトである。



第12圖 石 器



第13圖 石器出土地点分布圖 (1 / 200)

### 3. その他の遺物

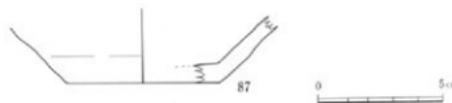
高槻遺跡では、前述した繩文土器や石器の他にⅠ層から中世の灰釉系陶器、近世の施釉陶磁器、金属製品などが数点出土した。灰釉系陶器のうち図示できるものは1点（第14図87）のみで、推定底径が6cmほどの碗である。高台を失っており、胎土はかなり粗い。13世紀後葉から14世紀前葉にかけてのものと思われる。その他の灰釉系陶器は小さな破片ばかりであるが、口縁の破片は直線的な形態をもち87とほぼ同時期のものと考えられる。高槻遺跡が所在する仁王川流域では、從来から灰釉系陶器が散見されており<sup>①</sup>、また同じ仁王川流域の三斗目・三本松遺跡<sup>②</sup>でも灰釉系陶器がある程度出土している。中世前期にこの地域で人々が生活を送っていたことがうかがわれる。近世陶磁器は碗や擂鉢と思われるが、いずれも小さな破片である。金属製品は小刀と思われるものと煙管の雁首である。

## 註

(1) 豊田市坂上町 1991 『坂上町誌』

(2) 高槻遺跡とほぼ同時期に本センターが調査した。報告書は1993年3月刊行。

石黒立人・余合昭彦他 1993 『三斗目・三本松遺跡』 御愛知県埋蔵文化財センター



第14図 灰釉系陶器

## 第4章 まとめ

高槻遺跡の今回の発掘調査では、住居跡等の人々の生活の痕跡を直接示す遺構を検出することはできなかった。また土器は早期から晩期にかけてのものが同一層位から出土し、取り上げる際のレベルは古い時期の土器が下層から出土する傾向を示したものの、層位的な区分はできなかった。遺跡が立地している地点が山裾にそった傾斜地であることから、今回の調査区は河川の氾濫あるいは山腹からの崩落等による、遺物の2次的散布地である可能性が高いと思われる。ただ仁王川流域に縄文時代早期から人々が生活していたことは、すでに足助町教育委員会による馬場遺跡（足助町大字下平）の調査（鈴木他 1981）でも明らかであり、今回の高槻遺跡の調査結果はこれを裏付けるものである。

高槻遺跡から出土した縄文土器には押型文土器が数点含まれる。押型文土器は豊田市に隣接する東加茂郡足助町では出土例が多く、前出の馬場遺跡や大麦田遺跡（足助町大字西櫻尾）（鈴木他 1987）などで、神宮寺系のものを中心に100点以上が出土している。豊田市内では酒呑ジュリンナ遺跡での報告（大参他 1967）があるのみである<sup>10</sup>が、豊田市東部地域では足助町と同様に押型文土器の出土がこれからも予想され、矢作川流域での縄文時代早期の様相を明らかにするきっかけになることが期待される。

高槻遺跡の縄文土器は早期後葉の条痕文系土器に位置づけられる2類、3類土器が主体である。茅山下層式あるいはそれに近い土器とした2類土器は、近隣の同時期とされる土器とは類似点が少なく、やや特殊な様相を示している。柏畠式に比定される3類土器は、矢作川流域の山間部で出土例が多い土器である。この地域の縄文時代早期の遺跡からは、押型文土器や条痕文系土器が多く出土するものの、土器形式では柏畠式の時期までで、それに後続する早期末葉の土器の出土例は少ない<sup>11</sup>。高槻遺跡でもそれは同様であった。矢作川上流域では柏畠式土器の時期が終了した時点で、人々がこの地での生活を断念せざるを得ない事情があったかも知れない。

### 註

- (1) 高槻遺跡とはほぼ同時期に本センターが調査した三斗目遺跡（豊田市坂上町）でも、1点のみであるが押型文土器を出土している。平成5年3月報告書刊行。
- 石黒立人・余合昭彦他 1993 『三斗目・三本松遺跡』 岐阜県埋蔵文化財センター
- (2) わずかに粗面貝戸遺跡（足助町大字中立）で柏畠式から前期の塗器式にいたる土器が数点出土している（鈴木他 1982）。

### 参考文献

- 鈴木茂夫他 1981 『馬場遺跡概報』 足助町教育委員会  
 1982 『埋蔵文化財確認調査(3)』 足助町教育委員会  
 1987 『大麦田遺跡概報』 足助町教育委員会  
 大参義一他 1967 「酒呑ジュリンナ遺跡」『名古屋大学文学部研究論集44』 名古屋大学文学部

付表(1)

土器一覧表

番号	登録番号	分類	出土層位	色調	番号	登録番号	分類	出土層位	色調
1	E-1	1類a	Ⅲ層	茶褐色	4 6	E-3 8	3類	Ⅱ層	茶褐色
2	E-2	1類a	SK 0 1	赤褐色	4 7	E-4 3	3類	Ⅱ層	赤褐色
3	E-3	1類a	Ⅱ層	赤褐色	4 8	E-3 9	3類	Ⅱ層	赤褐色
4	E-8	1類b	Ⅱ層	赤褐色	4 9	E-3 6	3類	Ⅱ層	濃橙色
5	E-5	1類b	Ⅱ層	茶褐色	5 0	E-4 7	3類	Ⅱ層	赤茶褐色
6	E-6	1類b	Ⅱ層	赤褐色	5 1	E-4 6	3類	Ⅱ層	赤褐色
7	E-7	1類b	Ⅱ層	赤褐色	5 2	E-4 4	3類	Ⅱ層	赤褐色
8	E-9	1類c	Ⅱ層	茶褐色	5 3	E-4 5	3類	Ⅱ層	黑褐色
9	E-1 0	1類c	Ⅱ層	薄赤褐色	5 4	E-5 1	3類	Ⅱ層	赤褐色
10	E-1 4	2類	Ⅱ層	茶褐色	5 5	E-5 2	3類	Ⅱ層	黑褐色
11	E-1 1	2類	Ⅱ層	濃茶褐色	5 6	E-5 3	3類	Ⅱ層	赤褐色
12	E-1 5	2類	Ⅱ層	黑茶褐色	5 7	E-5 7	4類	Ⅱ層	明茶褐色
13	E-1 3	2類	Ⅱ層	茶褐色	5 8	E-6 0	5類	Ⅱ層	褐色
14	E-1 4	2類	Ⅱ層	茶褐色	5 9	E-6 6	5類	I層	茶褐色
15	E-1 2	2類	Ⅱ層	黑茶褐色	6 0	E-6 8	5類	I層	茶褐色
16	E-1 6	2類	Ⅱ層	明茶褐色	6 1	E-6 1	5類	表土	黑褐色
17	E-1 7	2類	Ⅱ層	茶褐色	6 2	E-5 8	5類	Ⅱ層	明茶褐色
18	E-5 4	2類	Ⅱ層	黑褐色	6 3	E-6 2	5類	Ⅱ層	黑灰褐色
19	E-1 9	2類	Ⅱ層	黑褐色	6 4	E-6 4	5類	Ⅱ層	赤褐色
20	E-5 5	2類	Ⅱ層	黑褐色	6 5	E-6 5	5類	I層	黑褐色
21	E-1 8	2類	Ⅱ層	茶褐色	6 6	E-6 3	5類	I層	明赤橙色
22	E-5 6	2類	Ⅱ層	赤褐色	6 7	E-5 9	5類	表土	濃茶褐色
23	E-2 5	2類	Ⅱ層	黑褐色	6 8	E-6 7	5類	Ⅱ層	赤橙色
24	E-2 8	2類	Ⅱ層	茶褐色	6 9	E-6 9	5類	表土	赤橙色
25	E-2 3	2類	Ⅱ層	赤茶褐色	7 0	E-7 0	5類	I層	赤褐色
26	E-2 4	2類	Ⅱ層	黑茶褐色	7 1	E-7 1	6類	I層	明茶褐色
27	E-2 7	2類	Ⅱ層	茶褐色	7 2	E-7 2	6類	表土	黑褐色
28	E-4	2類	Ⅱ層	濃茶褐色	7 3	E-7 5	7類	Ⅱ層	黑褐色
29	E-2 2	2類	Ⅱ層	黑褐色	7 4	E-7 7	7類	I層	明茶褐色
30	E-2 6	2類	Ⅱ層	茶褐色	7 5	E-7 4	7類	Ⅱ層	黑茶褐色
31	E-2 1	2類	Ⅱ層	黑褐色	7 6	E-7 6	7類	Ⅱ層	黑褐色
32	E-7 7	2類	Ⅱ層	黑褐色	7 7	E-8 0	7類	Ⅱ層	赤褐色
33	E-7 3	2類	Ⅱ層	黑褐色	7 8	E-7 8	7類	I層	濃茶褐色
34	E-2 9	3類	Ⅱ層	赤褐色	7 9	E-4 1	7類	Ⅱ層	黑灰褐色
35	E-3 1	3類	Ⅱ層	暗黑褐色	8 0	E-4 0	7類	Ⅱ層	黑灰褐色
36	E-4 9	3類	Ⅱ層	黑褐色	8 1	E-8 1	7類	Ⅱ層	濃赤橙色
37	E-3 7	3類	Ⅱ層	黃褐色	8 2	E-8 2	8類	Ⅱ層	黑灰色
38	E-3 0	3類	Ⅱ層	赤橙色	8 3	E-8 3	8類	Ⅱ層	黃褐色
39	E-3 2	3類	Ⅱ層	明褐色	8 4	E-8 4	8類	I層	赤褐色
40	E-3 3	3類	Ⅱ層	黑褐色	8 5	E-8 5	8類	I層	赤褐色
41	E-3 4	3類	Ⅱ層	赤黃褐色	8 6	E-8 6	8類	I層	黃褐色
42	E-4 8	3類	Ⅱ層	茶褐色	8 7	E-8 7	山茶碗	表土	
43	E-5 0	3類	Ⅱ層	赤橙色					
44	E-4 2	3類	I層	明茶褐色					
45	E-3 5	3類	Ⅱ層	黃橙色					

付表(2)

石器一覧表

番号	登録番号	種別	出土層位	石質	重量
1	S-01	石鏃	SK01	チャート	1.4 g
2	S-02	"	Ⅱ層	安山岩	3.0 g
3	S-03	尖頭器	Ⅱ層	黒曜石	4.2 g
4	S-04	剣片石器	SK01	サヌカイト	0.7 g
5	S-05	石匙	Ⅱ層	凝灰岩	7.5 g
6	S-06	スクレーパー	Ⅱ層	チャート	32.2 g
7	S-07	"	Ⅱ層	凝灰岩	39.5 g
8	S-08	"	Ⅱ層	安山岩	41.3 g
9	S-09	"	Ⅱ層	極細粒砂岩	63.2 g
10	S-10	"	Ⅱ層	凝灰岩	42.8 g
11	S-11	"	Ⅱ層	安山岩	114.0 g
12	S-12	"	Ⅱ層	下呂石	60.0 g

図 版

図版 1



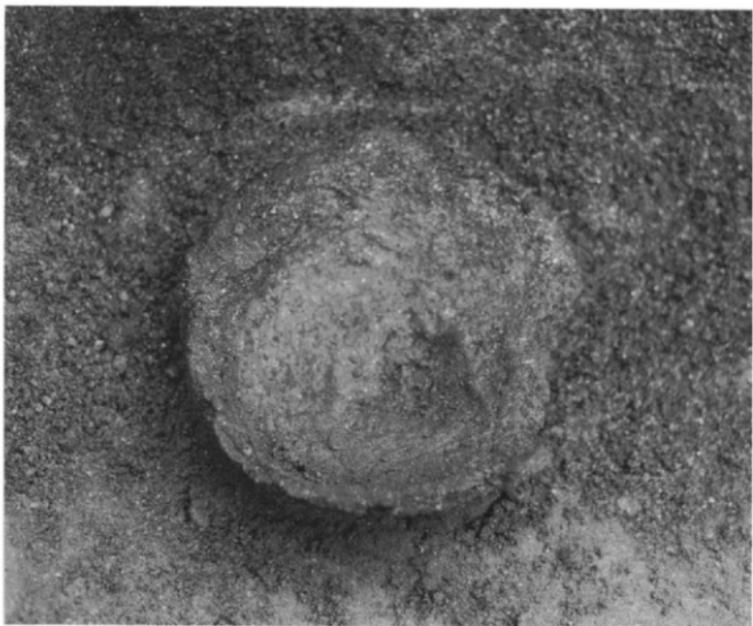
調査区全景  
(東より)



調査区全景  
(西より)

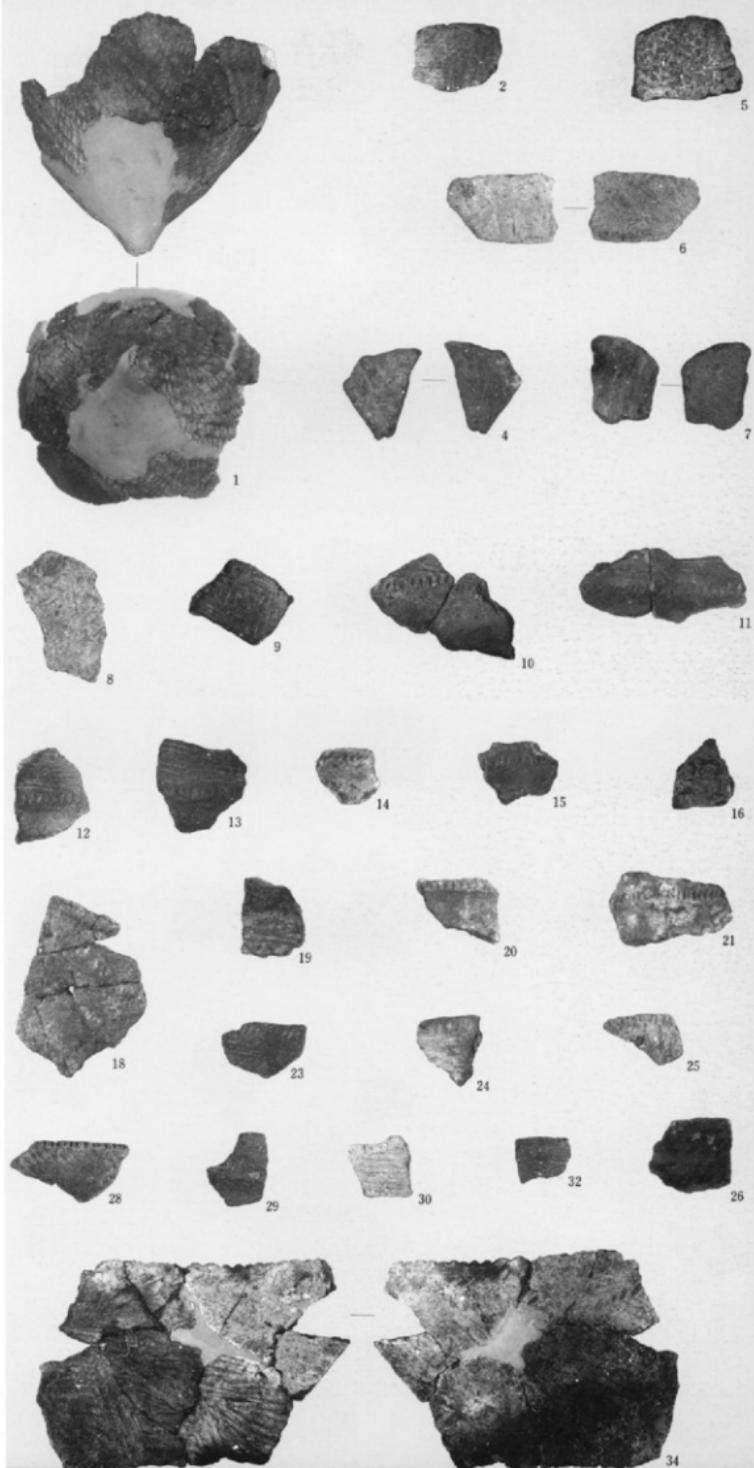


SK01  
(東より)



押型文土器  
出土状況

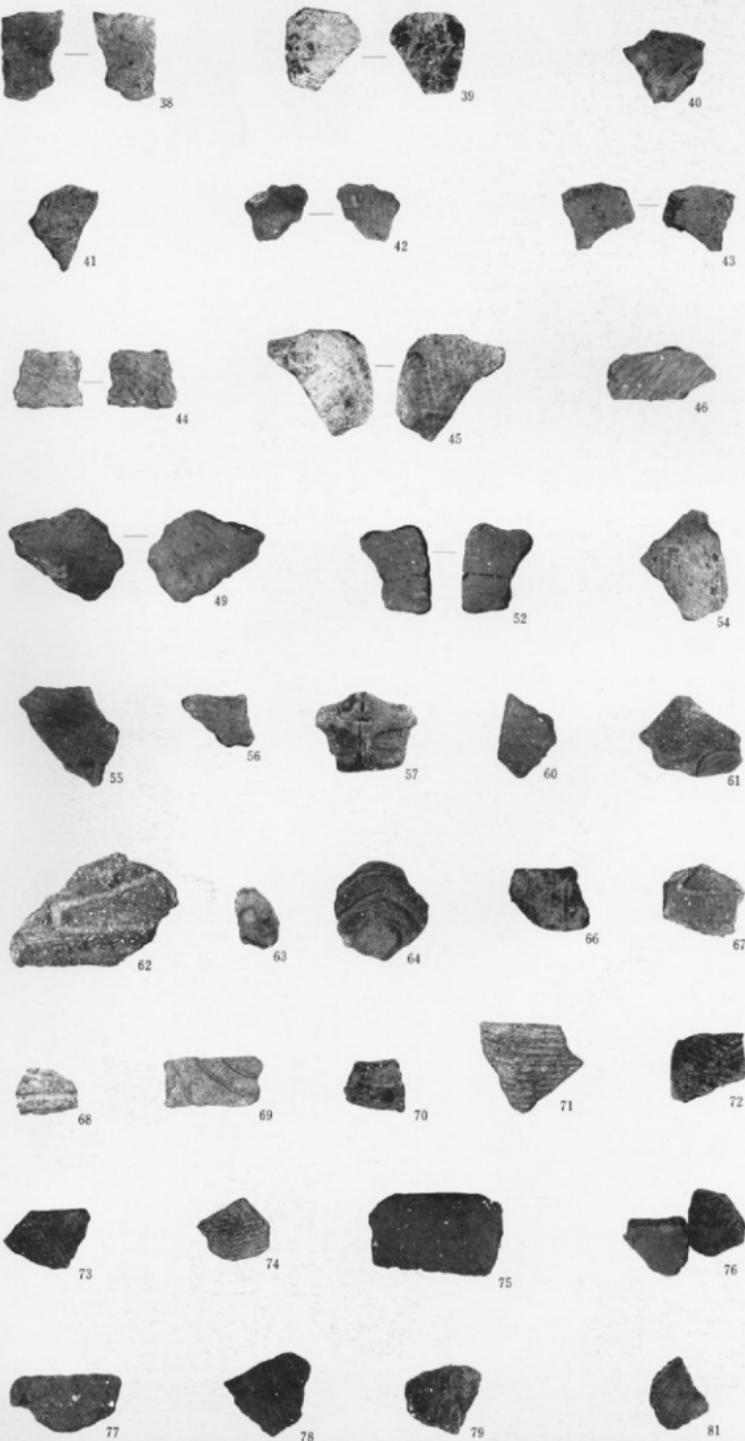
図版 3



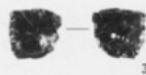
縄文土器

(1)

(約1/3)



縄文土器  
(2)  
(約1/3)



## 報告書抄録

フリガナ	イボイセキ・ネガワ3ゴウフン・サカグチイセキ・タカドイイセキ
書名	伊保遺跡・根川3号墳・坂口遺跡・高穂遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第46集
編著者名	松田訓・赤塚次郎・都築暢也・杉山真二・服部俊之・余合昭彦・服部信博
編集機関	財団法人愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年	西暦1993年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
イ 保	トヨタヒガシミズウ ・ホシコウ 豊田市東保見 町・保見町	23211	63074	35°30'00"	137°8'30"	19901101 19920731	4442	道路建設
ネガワ3ゴウフン 根川3号墳	トヨタヒガシミズウ ・ホシコウ 豊田市東保見 町根川	23211	—	35°30'00"	137°8'30"	19900601 19900831	300	道路建設
サカグチ 坂 口	ヒガシモゾンヲヒチ ・カグチ 東加茂郡旭町 大字池鶴字坂 口	23544	69022	35°12'00"	137°18'37"	19911001 19920110 19920420 19920814	366	道路拡幅
タカドイ 高 穂	トヨタヒガシミズウ 豊田市坂上町	23211	—	35°4'00"	137°16'41"	19911105 19920107	500	道路拡幅

所収遺跡名	種 别	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項
伊 保	集落	旧石器 弥生 古墳 平安		尖頭器4 古式土師器 灰釉系陶器	旧石器の遺構なし 集落の縁辺部
根川3号墳	古墳	古墳	古墳1	須恵器	
坂 口	散布地	縄文	土坑85	縄文土器・土製品 石器	
高 穂	散布地	縄文	土坑1	縄文土器・石器	

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第46集

伊 保 遺 跡

根 川 3 号 墳

坂 口 遺 跡

高 植 遺 跡

1993年3月30日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印刷 正鶴堂